
天人伝承

安芸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天人伝承

【Nコード】

N2283J

【作者名】

安芸

【あらすじ】

もとより出会はずの二人だった。だが出会ってしまった。それがすべての災いの始まりだった。

戦乱の中、やがて惹かれあい、激しく求めあう二人に次々と悲劇が襲いかかる。

邂逅、友情、恋、裏切り、憎悪、怨恨、謀略、決別、そしていくつもの死。

戦火はひろがり、戦線は激しさを増す一方で、国は焦土と化してゆく。勝機は見えない。もはや残されている選択はひとつ。

だがそれは、二人の絆に永遠の決別を告げるものだった。
ヒロイック・ファンタジーです。

硬質・重厚・波乱万丈。物語の中枢を担うにふさわしい、未熟だ
けど、大器であることを感じさせる、美しく、心やさしく、誠実な
青年王子が主人公。

道ならぬ禁断の恋が待ち受ける物語 どうぞよろしくおつきあ
いください。

* 小説&まんが投稿屋様より転載 安芸の名前で掲載してます

プロローグ（前書き）

この物語はプロローグと第一話が続けてごらんください。

プロローグ

翼無き者に告ぐ

我らは天人

いと高き天より地を

生きとし生ける命あるすべての行く末を

見届けるものなり

我らは天人

人ならぬもの

プロローグ

激しい雷鳴。そして稲妻も。

朝からずっと、大粒の雨が大地を穿ち続けている。

おかげで今日の課外授業は台無しだ、とキルヴァが恨みがましい
眼で窓の向こうを睨みつけたそのとき

なにかが、閃いた。

暗く垂れこめた雲の合間から、まっすぐに、なにか金色に燃えるものが落ちてきた。

キルヴァは机を飛び離れ、窓辺にしがみついた。

だが、光はすぐに消えてしまった。

「王子、席にお戻りを。勉強の最中です」

「いま、なにか空から落ちてきた」

「空から落ちてくるものなど決まっています。雨か、星です」

「えっ。星？」

「正しくは星のかけら、隕石ですが。……拾いに行きたいですか？」

「行きたい」

「ではさっさと今日の分の勉強を終わらせてしまいましょう。終わって、雨がやんでいたら、星拾いにお供いたします」

キルヴァは眼を輝かせて机につき、真剣に勉強を再開した。

側近のセグランは真面目で厳しいが、約束したことは必ず守ってくれる。

雨がやんでくれればいい。

しかしキルヴァの幼い願いはかなえられることなく、結局、雨はやまなかった。

キルヴァがセグランに連れられ星を拾いに行けたのは、翌朝だった。ところが、落ちていたのは星ではなかった。

「……あれ、なに」

キルヴァが朝日に輝く湖のほぼ真ん中を指差した。

「……鳥？」

「……いえ、鳥にしては大きすぎますよ。あれは……まさか……」

セグランは湖の淵に近づこうとするキルヴァを止めて、じっと眼を凝らした。

「大変だ」

セグランはすぐに上着を脱ぎ捨てた。

「王子はここにいてください。これ以上近づいてはいけません。というよりは、もっとずっと離れて、できれば隠れていてください。私がいいというまで出てこないように。いいですね。お願いですから、いまは私の言うことを聞いてください」

「……わかった。隠れている。けど、その前に教えて。あれはなに？」

セグランの強張った喉が、緊張にみちた声を紡いだ。

「あれは、天人です」

もしも、このとき、この出会いが、後の悲劇の源になると知っていたならば

私はあなたを助けなかった

そう、私は選択を誤ったのだ

私があなただけを助けなければ

王子とあなたは恋に落ちることもなく

私はなにも失うことはなかったのだ

プロローグ（後書き）

2010年、新年を迎えました。皆様、あけましておめでとございます！

連載開始第一弾は、ヒロイック・ファンタジー。自分でも荷の重い題材を扱っています。苦悩することまちがいなし。でもやります。少しでも皆様の心に届く物語を。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

第一章 絶対の秘密を持つということ 天人（前書き）

天人てんじんと読みます。天使じゃないです、念のため。

セグランはすぐさま異変に気がついた。

シュイの湖はオーラン山脈の雪解け水と地下水脈が流れ込むため、波が立たないことはない。

だがいま湖面は磨き上げられた鏡のように平らで、歪みひとつなく、柔らかな朝の光を反射して輝いている。

なにかが、おかしい。

湖に飛び込む寸前、湖岸に眼を走らせたがこれと言って不審なものも見あたらなかった。

それがわかったのは、水に身を躍らせてからだだった。

身体を万力で押しつぶされるような水圧に襲われた。束の間呼吸ができなくなり、手足が大きく痙攣する。そのまま沈めば、二度と浮上できなかつたであろう。

だが同時にこの湖に仕掛けられたからくりがどんなものなのか、だいたい想像がついた。

セグランは眼を瞑り、身体から一切の力を抜いて、呼吸を細く、細く、整えた。心臓の鼓動数と呼吸数を合わせ、気で辺りを撫でるように探った。

……どこかに、水の力を抑えている原因があるはずだ。

慎重に、だが素早く探つてゆく。見つからない。どこだ。どこにある。

……まずい、意識が遠くなりかけてきた。このままでは溺れてしまふ……。

と、そのとき、キルヴァ王子の叫び声が聞こえた。自分の名を呼んでいる。

セグランは気力を振り絞った。こんなところで死んではいられない。王子をひとりになどできない。決してひとりにしないと、あの

日、私は誓ったじゃないか。

……あつた。あれだ。

ちようど、天人が浮いている場所の真下の湖底に赤黒い青銅の短刀が打ち込まれていた。その刃から、ただならぬ気配を感じる。

セグランは水面に顔だけ浮かべた。視界の隅に、王子が映る。様子がおかしいことに気がついたのだろう。隠れ場所から飛び出してきた、湖岸に膝をつき、地面に爪を立て、前のめりになって、必死のまなざしでセグランを見ている。

身体がちぎれそうな痛みをこらえ、セグランはすう、と息を吸った。

「……水よ、水よ。私の声を聞け、我が声に答えよ。私の肉は水でつくられ、私の命は水に還り、私の魂は水を廻る。さればいま、水の中にあつて自由を得るは自然の理なり。我を開放せよ、我を開放せよ、我を邪なる戒めより開放せよ……」

ふと、身体が自由が利いた。

セグランはこの機を逃さなかった。大きく息を吸い、止める。そのまま身体を捻って、昼なお暗い湖底を目指した。

柄を握り、短刀を一気に引き抜く。その途端、湖に張り巡らされた魔法は不意に消滅した。

セグランは翼をひろげたまま、斜め仰向けに漂う天人のすぐそばに浮上した。湖に小波が戻っている。

もう動かしても大丈夫だろう。

「セグラン、大丈夫？」

「はい、ご心配をおかけしました。ただいま戻りますのでもう少しお待ちください」

キルヴァが蒼褪めた、いまにも泣きそうな顔で無理に笑顔をつくってみせる。相当怖い思いをしたに違いない。だがそれでも、気丈にふるまうところはさすがに王の子だ。

セグランは短刀を口にくわえ、考慮の末、天人を曳くように岸へと運んだ。

この命がけの救助も、物語のはじめにすぎなかった。

「この者を、助けたいですか」

なにを今更、と思った。はじめに手を出したのは自分ではないか。それでもセグランは訊かねばならなかった。

満身創痍で蒼い血を流しながら横たわる天人を、食い入るようにみつめていたキルヴァはぼんやりと顔を上げた。

瞳がすっかり竦みあがっている。

天人を見るのも初めてならば、その人とは違う生き物がいままさに死に瀕している場に遭遇したのも初めてなのだ。恐ろしく思わぬい方が、どうかしている。

キルヴァがこっくりと首を縦に振った。

「助けない」

「あとから面倒なことになるかもしれません。それでも助けますか？」

「面倒って、なに」

セグランは跪いて、キルヴァの小さな手を押し戴いた。

「王子、あなたは子供です。だが、なにもわからない子供ではない。違いますか」

「私は王の子、だ。それはわかっている。けど、セグランがなにを言いたいのかわからない」

「簡単にご説明します。私の話をきちんと聞いてから、さきほどの質問にもう一度答えてください」

セグランは天人に眼をやった。

湖から引き揚げたものの、陸に上げた天人は死にかけている。全身に及ぶ裂傷からは蒼い血が溢れ、大きく盛り上がった豊かな白い四枚の翼は水に落ちた衝撃で薄紫に変色し、そのうちの一枚は火傷痕のような蒼い深い傷が一条、くつきりと残っていた。

「湖には、魔法がかかっています。おそらく天人を捕えるためのものと思われます。あの天人の怪我は魔法の罫によるものなのです。

何者かが、理由はわかりませんが、天人を必要とする何者かが、仕掛けたのです。おそらく中級以上の高位の魔法使まほうしの力が働いています。そして我が王の直轄の領土内で、無断でこんな暴挙がはたけらるわけがありません」

「……父上の、命令ということ？」

「……わかりません。ただ、無視はできません。もし王命だとすれば、いまあの天人を助けてよいものかどうか。この場合は助けて、王に報告しご判断を仰ぐのであれば、それはそれでよろしいでしょう。ですがそうした場合、あの天人の命は王のものとなります。自由は奪われ、おそらく天へは帰れませんまい」

「そんな……そんなの、かわいそうだ」

「この者を、助けますか……？」

王家の血を受け継いだという証の翡翠の双眸がキラツと光って、その固い意志を示した。

「助けて。そして父上には秘密にしよう。ううん、誰にも秘密だ。」

私と、セグランだけの二人だけの絶対の秘密だ」

それは、極めて危険な賭けだ。

既に魔法の罫は解いてしまった。短刀は抜いてしまったし、湖には天人の血も流れている。もしうまく痕跡を残さぬようこの場を立ち去ったとして、どこにどうして天人を匿える？

だが、これ以上は時間の無駄だ。せつかく助けた命も無駄になっってしまう。

「わかりました」

セグランは首肯した。拳を握った左右の手首を交差し、重ねて、頭を垂れて額を押しつける。神聖な誓いを約するときのための姿勢だ。

「セグラン・リージュ、王子と秘密をとにもすることを、ここに誓います」

「うん」

「さあ、では急いでここを去らなければ。私は地面に滴った血の痕

に土をかぶせてきます。

王子は王宮の方角を見張っていてください。なにか見えたらすぐに知らせてくださいね」

「えっ。手当は？ 痛そうだよ。早く、血を止めてあげないと……」
「ここでぐずぐずしては危険です。大丈夫、私が助けを求められる相手をひとり、思い出しました。あそこなら山奥なので見つかりにくいし、人里からも離れている。治療も養生もできるでしょう」
「間に合う……？」

「やれるだけ、やってみましょう」

だめかもしれない、とはセグランは言わなかった。

あまりに多くの血が流れた。だが、相手は人ではないのだ。天人の生命力がどれほどのものなのか　いまは賭けるしかない。

第一章 絶対の秘密を持つということ

天人（後書き）

王子が小さいです。けなげでかわいいです。

あと少し、幼少期編が続きます。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ジァ親方（前書き）

うるおいのない序章ですみません。

ジア親方

その庵はエムズ山脈の西側、万年雪を抱く山々の雪解け水を運ぶユウル川を挟んだギーウ山の山裾にあった。

人目につかぬように大きく迂回しながら、慣れぬ山道を馬で辿って、着いたのは正午も近くになってからだだった。

「ここからは馬を降りて歩きましょう。王子、大丈夫ですか。ついてこられますか？」

「行く」

「あと少しです。馬はこのさき無理なので、ここに繋いでいきましょう。私のあとについてきてください。足もとに気をつけて、決して余所見をしないように、いいですね」

「わかった」

「……お疲れでしょうに弱音を吐かないとは、強くなりましたね。なかなかどうして見上げた根性です」

「弱音なんて、吐かない。だって私よりセグランの方が疲れているだろう」

「大丈夫ですよ。お気遣いありがとうございます。さあ、あと少しです。行きましょう」

セグランは微笑んだ。幼い王子の人を労わる優しい心が、嬉しかった。

それから、ユウル川支流をやや遡り、大きな火山岩がごろごろする緩やかな傾斜の山道を三十八イト（十八イトで約十分くらい）も登った。

「ここからはすぐです」

こことは、先の尖った黒い巨大な玄武岩が三つ、ちょうど柱のようになっている場所だった。

足場の悪い山道を逸れ、山に入る。

ややあつて視界が開け、目の前に木造の粗末な庵と、それより大きな作業小屋が現れた。水の流れる音が聞こえる。近くに沢があるのだらう。見回すと、動物小屋もあり、山羊が二頭つながれていた。「　　ジア親方、いるでしょう！　出てきてください、私です、セグランです」

ちよつと間があり、ガタガタツと軋みを上げて作業小屋の扉が開いた。

中から真っ黒にすすけた顔の、背は低いが恰幅のいい、鷲鼻の老人が出てきた。

「セグランだと？」

「お久しぶりです」

「この薄情者！　最後に会ってからいつたい何年が経ったと思つてる！」

「すみません。お元気そうで、なによりです」

「元気にきまつとるわ。俺は生涯現役を通すと　そりゃ、なんだ。

その羽……まさか、天人か？」

セグランにジアと呼ばれた老人は臆するふうもなく近づいてきて、セグランの肩に担がれた天人の顔を覗き込みながら、フガフガと鼻を鳴らした。

「死にかけとるじゃないか」

「なんとか助けたいのです。力を貸していただけませんか」

「まつたくおまえときたら、たまに顔を出したかと思えば、面倒ごとばかり持つてきおる。なんとかならんのか、その悪癖は」

「かさねがさね、すみません……」

さつきから謝つてばかりのセグランを見るに見かねたのか、キルヴアがおずおずと口を挟んだ。

「セグランが悪いわけじゃないのです。私がこの天人を助けたいと、わがままを言ったのです」

そこではじめてキルヴアに気がついたようで、ジア老人は大きく眼を睜つて、額を掌で叩いた。

「なんと、子連れか！ いやいや驚いた、おまえもついにひとの親になつたか」

それを聞いて、セグランは文字通り頭のとっぺんから足の爪先まで蒼褪めた。

「ち、違います！ なんて恐れ多いことを！ こ、こちらの御方は恐れ多くも次期王位継承者キルヴァ・ダルトワ・イシュリー様であらせられます。頼みますから、二度と、二度と間違つてもそんな恐ろしいことを言わないでください」

「セグラン」

キルヴァの切迫した声にセグランは我に返つた。急に右肩の重みが骨身にのしかかる。

セグランはあらためて頭を下げた。

「突然の訪問は謝ります。迷惑なのも承知です。どうか、助けていただけませんか」

「来なさい」

ジア老人は顎をしゃくつた。庵へ向かう。見かけより、足取りは確かで軽い。

キルヴァはセグランに問うようなまなざしを向け、セグランは頷いた。

「いきましよう」

庵の中は、物が少なく、豪華だった。

中央に木の食卓、椅子は背凭れつきのもものが二脚、右側の壁は陳列棚、左側の壁には上着やら帽子やら長弓やら、色々のものが掛けられている。奥が台所、寝台は一番手前にあつた。

キルヴァがびっくりするほど豪華だと思つたものは、床に敷いてある数々の敷物だった。獰猛果敢で知られる黄と黒のドノヴァン虎の毛皮、巨軀で有名なワズリー熊の毛皮、敏捷さではかなうものがないレット狐、耳がよく逃げ足の速いことで一番のアベラ大鹿……
まだまだある。

「あなたは猟師のですか」

セグランはジアの指示で寝台に天人を俯けに寝かせた。顔だけは気道確保のため横向きにする。あとからついてきたキルヴァが息をのむ気配がしたので、さつと振り向いたところにその呟きが聞こえた。

「猟師じゃない。まあ、暮らしのために春と秋は獣を狩るがね。なにせ毛皮はいい現金収入になるからな……坊は狩りをしたことがあるかね」

「坊なんて失礼です。きちんと王子と呼んでください」

「ぎゃあぎゃあ言うな。おまえはさつさと服を脱いでそっちの作業着に着替える。のろまじや天人は助からんぞ。俺は地下倉庫から薬を取ってくるから、その間にその桶で沢から水を汲んで来い。たらいは台所に大きいものがあるからそれを使え。急げ」

「私も手伝います。なにか、させてください。なにをすればいいですか」

キルヴァは既に上着を脱いで袖を捲り、ズボンの裾をたくしあげていた。

「見る、おまえより素早いぞ。よし、坊は外の作業小屋にいつて火窟くほ いや、火の窯の近くに大きな扇があるから、それを持って来なさい。あと、その食卓の上の角灯には油がさしてあるから、窯から火を移してくるんだ。窯の火力は強い、十分気をつけてな。火傷はするなよ」

「はい」

しつかりとした顔つきで頷き、セグランが止める間もなく角灯を片手に飛び出して行くキルヴァの機敏さに、ジアは感嘆した。

「たいした子供だ。あれはいい男になるぞ」

「王子に火窯から火を取ってこいだなんて、そんな危険なことさせないでください」

「……おまえ、ちと過保護すぎないか。大切に扱うことも度を越すと、なにもできない大人になるぞ。いいからとつと水を汲んで来い」

セグランが水を汲んで戻ると、ジアが地下倉庫から出てくるところに出くわした。手に色々と抱えている。

「それは？」

「薬草だ。天人の血止めに効く」

「なぜそんなものがあるんです」

それには答えず、ジアはむっつりとした顰め面で顎をしゃくつた。ついてこい、というしぐさだ。

セグランは黙って従った。とにかく、いまは救命措置に心血を注ぐのだ。

ジア親方（後書き）

天人救助劇です。まだ続きます。地味ですが、しっかりと足跡はつけて進みますので、どうかおつきあいください。

さて、余談。

私の完結作の中でも、乙女は中編のためか、やたらにアクセスが伸びています。題材が好みなのかなんのかわかりませんが、読まれた方で、こんな設定あったらいいな！ というもの、ありますか？ 私程度のウデでどこまでご期待に添えられるかわかりませんが、もしリクエストがあればご一報を。チャレンジしてみます。まあ、自分で書いた方が早いわ！ というご意見の方が多数でしょうが。笑。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

火の天人（ラーク・シャーサ）（前書き）

物語がぶつ切れになっているようなので、ちょっと小分けにしつつ、連続投稿します。

火の天人（ラーク・シャーサ）

キルヴァは作業小屋の立てつけの古い扉を開けた。途端、むわつと、熱い空気が押し寄せてびっくりした。慌てて扉を閉じる。どきどきしながら、もう一度、今度は覚悟の上で扉を開け、中に入る。驚いたことに、そこは鍛冶場だった。

セグランが親方、と尊称をつけて呼ばわったのはこのためだ。はじめ火窯ほくほと言ったのは、用語なのだろう。ジアは、鍛冶職人なのだ。キルヴァは意を決し、鍛冶火床に近づいた。熱い。呼吸さえ苦しくなるほどの熱さだ。そこには水の入った長細い水桶や木炭入れ、小槌、金床、扇、そのほかよくわからないものがあった。壁は土壁、窯は石だ。中ではごうごうと火が燃え盛っている。とてもではないが、灼熱の火の窯になど、容易には近づけない。

でも、やらなければ。

キルヴァはまず袖と裾を元に戻した。あたりを見回す。道具箱がある。火かき棒を取る。獣の皮手袋も見つけた。面隠しもあった。さっそく皮手袋をつけ、面隠しを被る。大きいが、仕方ない。眼の位置は一か所しか合わなかった。皮手袋は温くなっている水に浸し、棒を握り、木炭入れから小さなかけらを取って、先端に刺す。額に手をかざし、火かき棒を火窯にいれて、少し炙る。爆ぜる火の粉が飛んできたが、面隠しや皮手袋のおかげで無事だった。木炭に火がついたので、棒を抜き、火窯から離れた。

角灯の蓋を開け、持っていた短刀で木炭のかけらを油の上に削ぎ落とす。すぐに火が点く。キルヴァはこれを手に下げ、道具類をもとあつた場所に戻し、大きな扇を拾い、慎重に作業場を出た。

来たときは気がつかなかった声が、聞こえた。庵の裏からだ。

迷って、覗くだけ覗くと、庵の屋根から手製の鳥籠が下がり、一羽のヒナがいた。衰弱している。手当はされているものの、怪我を

しているようだ。弱弱しく、鳴き続けている。

……おなががすいているのかもしれない。

気になるが、いまは戻らなければ。

「ごめん、あとでまた来るから」

後ろ髪を引かれる思いで、踵を返す。

鳥は天に属するもの。すなわち、天人の使いである。鳥を害することはすべての国で禁止されており、また、なんらかの理由で怪我をしているようならば、手当の義務も負っている。

鳥を飼うことは原則禁止とされ、飼うには、法令に則った手続きをして、許可を得なければならぬ。王宮には何頭もの獣が飼われているが、鳥だけはまだ飼ったことがない。鳥は、神聖な生き物なのだ。

庵に戻ると、口元にマスクをして、獣の皮手袋を両手に嵌めたセグランが、天人に覆いかぶさるようにして、血まみれの衣服を破いている最中だった。

「このような無礼をお許してください」

「あんまりウブなこと言つとると、坊に笑われるぞ」

「ウブとかそういう問題ではないでしょう。できました、薬をください」

「もうちょいまで。まだ煉りが足らん」

「早くしてください」

「ええい、年寄りをせかさな」

ジアは台所に立ち、太い木の棒を握り締め、大きなすり鉢ですごい悪臭の薬草を煉っていた。鼻が曲がるどころか、もげる、と言っても過言ではない。

だが、そんなことは言っていられない。

「戻りました。扇と火です。次はなにをすればいいですか」

「セグラン、こつちと代われ。脇をしめて、よく混ぜろ。この臭いが酸っぱくなるまで煉ったら、これとこれを、半分ずつ交互に足し

ていけ。量を間違えるなよ。坊、おいで」

キルヴァはジアの手招きにより、寝台の天人に近づいた。

天人は美しかった。

腰まで届く長い豊かな髪は金色、肌は透き通るように白く、傷だらけで血で汚れていなければとても直視できない美しさだった。

「水の中で倒れていたのであれば、水の（・）天人じゃない。さあ、この扇でそつと煽いでみなさい」

キルヴァは唇を結んだまま頷いて、扇を動かし、天人の顔に向けて風を送った。

「……反応ないな。風の（・）天人でもない、か。では、次は火だ。角灯の蓋を開けて、近づけなさい」

言う通りにする。ジアは少しの変化も見逃すまいとした表情で見守った。

もし、これで反応がないようであれば、この天人は、雷の（・）天人だ。

キルヴァはびくつとした。角灯を少し下げて、火を顔に近づけた途端、脛がびくつと動いたのだ。ジアは見逃さなかった。

「火の（・）天人だ」

火の天人（ラーク・シャーサ）（後書き）

本日やっど休み……買い物行きたいー。でも更新もしたいー。コ
ーヒーのみたいー。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

セグランの後悔（前書き）

諸事情により、視点が三人の間をさまよっています。読みにくく
てすみません。

セグランの後悔

「火の（・）（・）天人？」^{ライク シャーサ}

「ああ、火の（・）（・）天人だ。^{ライク シャーサ}四種族の天人の中で、二番目に強い種族だ。気性が激しく、好戦的で、強い」

「でも、女のひとです」

「女でも、強い。強さだけでいえば、一番強い雷の（・）（・）^{パロイ}天人に勝るとも劣らんと聞いた。ただ、性格が飽きっぽいみたいだな。それから、悪戯好きで、ひと懐こいらしい。常にあらゆる事象に怒り狂っている雷の（・）（・）天人とは強さの根源がそもそも違うのだろう」^{ハロイ シャーサ}

ひとことも聴き逃すまい、と真剣に頷くキルヴァの横から、手を休まず動かしつつ、セグランが口を出す。

「随分と天人に詳しいですね。なぜです？ いったいどこからそんな知識を得たのですか」

「無駄口は叩かんでいい。できたのか？ できたらさっさと寄りこさんか」

「もう少しかかります」

「早くしろ。坊、火はもういいからあそこの壁に掛かっている布を手を巻いて縛ってきなさい。身体を拭く。薬を塗る前にきれいにせんと。手伝えるかね？」

「はい」

「よし、いい返事だ」

ジアも手袋を嵌め、洗って清潔にしまっておいた布を何枚も出した。沢から汲んできた水をたらいに張って、布を浸し、水を絞り、天人の傷を拭う。

ジアの手つきを見てから、キルヴァは真似た。

小さな手で懸命に動く。その必至な様子はジアの憂いをいくぶん慰めた。

彼は、たとえ助けられたとしても面倒を負う破目になるな、と正

直考えた。

一介の隠居老人が抱えるには、重すぎる厄介事だ。昔は若いから、それもできた。だがいまは年をとりすぎた。たったひとりでもれほどのことができようか。

「できました」

セグランの声にはつと我に返る。

ジアは邪念を振り払った。余計な迷いがあるようでは、助けられる命も、助けられない。

それからは、ジアの指示のもとすべての傷に擦り込むように薬草を塗った。

セグランが手を出せる範囲で裂傷を縫い、キルヴァが手や足をさすり血行を良くし、ジアが獣を縛る要領で、手際よく、ごわごわした包帯を全身に巻いてゆく。

それから、火に近い環境の方がよからう、というジアの言葉に従って、手当の済んだ天人を作業小屋に運んだ。同時に運び入れた獣の毛皮を何枚か敷き、その上に寝かせる。

相変わらず、天人の呼吸は糸のように細く、顔色も悪いままだ。

キルヴァが天人のすぐ傍に膝をついて、覗き込むような姿勢で、炎に照らされ明るく輝く美しい顔を凝視したまま呟いた。

「……助かりますか？」

「いまできるだけのことはやった」

ジアは既に汗まみれだった。顎下の汗を手の甲でぐいと拭う。ジアの渴いた喉から、嚙れ声が絞り出される。

「あとはこの天人の生命力次第だ」

キルヴァがセグランを仰ぎ見た。

「手を繋いでいてもいい？ 励ましたい」

「ずっとここにおられるつもりですか」

セグランは躊躇した。ここは大人の自分でも参るくらいのすごい熱さだ、王子の身体のためを思うなら止めるべきだろう。

だが、セグランはそうしなかった。

「では、いま水筒に入れて水を持ってまいります。まめに飲んでください。その水がなくなったらいったん外に出ること、これをお約束くださいますか」

「約束する」

すぐにセグランは竹細工の水筒に水を入れて持ってきた。ちょうど子供の腕の手首から肘くらいまでの長さがある。簡素だが、軽く、頑丈で、使い勝手の良さそうな入れ物だ、とすぐにキルヴァは気に入った。

「どうぞ。よろしいですか、決して無理はなさないでください。

私は少々親方と話があるので少しお傍を離れますが、大丈夫ですか」

「大丈夫。……無理を言つてごめんなさい」

セグランはかぶりを振った。懐から手拭いを取り出して、王子の額と頬、顎の下にそつとあてる。

我慢できない熱さだろうに、一言も音を上げない。

それだけでも大した気力だが、加えて、自分の立場をきちんと把握し考慮できるとは、いかに普通の子供ではないといえ、少しできすぎのような気もする。

そうさせているのは、私なのか？

少し考えて、それは驕りだ、と打ち消す。

王子の気性は生来人に、周囲に、よく気を遣う。その繊細な心に、王の子であるという精神的な圧力をかけられ、常に正しい立場、正しい選択をしなければならぬと、自ら言い聞かせているのだろう。だから、それに反するような行動は後ろめたく感じてしまい、時折こんなふうに俯いてしまうのだ。セグランは王子の汗ばんだ小さな手をすくい、軽く握った。

「無理なときは止めます。私が止めないときは無理ではないのです。それは私が判断いたします。ですから王子は、本当はもつと我儘をおっしゃってくださいてもよろしいですよ」

戸惑いするキルヴァに微笑み、一礼してからセグランは立ちあがった。

外に出ると、ちょうど薬湯を取りに庵へいつていたジアが引き返してくるところだった。

太陽は、既に傾いている。時刻は日没まであと二バーツ（一バーツは六十八イト）というところだろう。もうここにいられる時間は残り少ない。

「お話が」

「なんだ」

「間もなく、私たちは帰らなければなりません。大変心苦しいのですが、あとをお願いできますか」

ジアはフガフガと鼻を鳴らし、悪態をついた。

「言われんでもわかっとする。だが、やすやすと引き受けるわけではないぞ。あれは、恐ろしい生き物だ。本当なら俺は二度と関わり合いを持ちたくない。いまだって、坊があれば一生懸命でなければそこいらの沢にでも捨て置きたいくらいだ」

「……二度と、とは、やはりはじめてではないのですね。そのお話を伺ってもいいですか」

ジアは、今度ははぐらかさなかった。

深く吐息し、淡々と話しはじめる。

「もう二十年近く前、同じように怪我した天人を助けたことがある。人生五十年というのに、俺はもう七十の齢を越え、この人生の内でも二度も天人と関わるはめになるうとはな。これもなにかの縁なのか」
一度でも滅多にあることではない。天人は文字通り天に住み、人間世界には関わらない生き物である。昔、しばらく一緒に暮らした天人はそう言っていた。

「あのときは、運よく助けることができた。だが、今度はどうか……正直なところ、自信がない。怪我の度合いが重すぎる。あの裂傷では流れた血の量も相当なものだろう。まあ、あのときと違ってさ。いいいなのは、天人に効く薬草があるということだな」

「さっき煉っていた、あの薬草ですか」

ジアは首肯した。ふーっと、疲労の色の濃いため息をつく。

「以前、やはり怪我した天人の命を救ったことがある。あれは風のソレイア（・）天人で、俺が山で見つけ、俺が看病した。いままで誰にも話したことはない。あれもそう望んだし、俺もその方がいいと思った。天人の存在自体は秘密でもなんでもないが、直接関わったとなると、国の機関がうるさいことを言ってくるかもしれない。場合によっては、口を封じられるか、もしくは幽閉されただろう。いや、いまだってこの話がばれたら、俺はきつと連れていかれる」

「どうしてです」

「普通知っちゃあならんことを、知っているからさ。これはあとで聞いて知ったんだが、天人ってやつは、嘘をつけない生き物だ。話したくないことは話さなくてもいいし、答えたくないことには沈黙を押し通すこともできる。だが、偽ることはできん。それに、命を救ってくれた者には忠誠を尽くす義務があるらしい。だから俺が質問したことには、答える必要があったというわけだ。当時は俺も若かったし、好奇心も手伝って、つい色々なことを訊いた。だが、多くのことを知っていくうちに、段々怖くなってきた。ようやく、これは俺なんかが聞いていい話じゃない、と気づいたときには遅かった。たぶん、いまでも俺は天人の生懸について詳しく知る数少ない人間のひとりだ。おまけに、あれの名を知っている」

「知っている、どうなのです」

「呼べる。言つたらう、忠誠を尽くす義務があると。俺はあれを呼べるし、使える（・・・）。それがどういふことかわかるか？」

「……使える、とは、まさか天人の力を使えるのですか？」

「正確には、あれを従えることができるということだ。俺が怖くなった理由がわかるだろう？ 天人ひとりの力がどれほどのものなのか、あれを意のままにいうことをきかせることができるとはどういふ災いを招くのか。さいわい、俺はそれがわからないほどの阿呆じゃなかったからな、ずっと黙っていた」

セグランはぶるつと震えた。汗が冷えたからではない、これは戦

慄だ。

「なのになぜ、いま私に話すのです」

「話しておかなければならんと思っただからさ。あの火の（・）^{ライク}天人^{シャーサ}を本当に助けることができたとしたら、それは誰の力なのか、俺には判断がつかない。おそらくそれを決めるのは火の（・）^{ライク}天人^{シャーサ}本人だろう」

危惧していたよりはるかに深刻な事態だ、と今更ながらセグランは思い知らされた。

ジアは最後にできるなら誰にも告げずにいたかった秘密を打ち明けた。

「俺は、風の（・）^{ソレイア}天人^{シャーサ}から聞いた話をまとめてある。そのためにだいぶ時間をかけて文字まで覚えたんだ、なかなか苦労したぞ」
「待ってください。その書の在り処は教えないでください」

「ああ、いまは言わない。だがもし俺がいなくなつたあとでそれが必要となつたときは、この敷地のどこかを探せ。おまえなら、みつけられる」

不意に、どっと疲れを感じ、セグランは地面に片膝をついた。地面を指で搔く。激しい後悔に襲われた。

なぜ、星を拾いに行こうなど言ってしまったのか。

なぜ、天人を助けてしまったのか。

「……私は、大変な間違いをしてしまったのではないでしょうか。王子にとつて禍をもたらすことになりはしないでしょうか」

ジアの節くれだつた大きな厚い手が、セグランの肩にそつとおかれる。

「それはそのときになってみなければわからん。だが、たとえそうなつたとしても、その時々で最善を尽くした結果ならば受け入れるしかあるまい。俺は、この七十年ずっとそうして生きてきた。おまえに真似しろとは言わんが、おまえがそうしてがたがた騒いでいたんじゃあ、坊は不安になるんじゃないか？ 先のことはわからんよ。いまはただ、できることをやるだけさ」

セグランはジアの思いやりに満ちた声の叱咤に目頭が熱くなった。
乱れた気持が、鎮まってゆく。

自分の判断は、間違っていないなかった。ここへ来てよかった、と、
思ったそのとき。

作業小屋でキルヴァの悲鳴が上がった。

セグランの後悔（後書き）

もう少しで、第一章が終了します。このあと、小さなキルヴァが決死の覚悟で頑張ります。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

王家の名のもとに(前書き)

キルヴァ、少年ながら、かつこいいです。将来を楽しみにしてください。

王家の名のもとに

「どうしました！」

作業小屋に飛び込んだセグランは、キルヴァの顔や手、首から胸元にかけて蒼い血で汚れているのを目の当たりにした。

「王子！」

「触れるなッ」

腹に気をためた重い恫喝に、セグランの足が止まる。

ジアは作業着の懐にねじこんだ皮手袋を取り出して嵌めながら、セグランに顎をしゃくった。

「素手で触るな。天人の血は副作用がある。血だけじゃない、できるだけ汗や唾液や涙や尿にも触れんように気をつける。天人に触れるときは、必ず布を巻くか、手袋を嵌めるんだ」

「副作用？」

セグランはその言葉の響きに嫌なものを感じた。

「なぜはじめに言ってくださらなかったのですか」

「理由を教えるつもりはない。だから、訊くな。坊、こっちにおいて。セグラン、坊の顔を拭いてやれ」

坊、と呼ばれてキルヴァははっとした。

天人の吐血を浴びた衝撃で一瞬呆然としていた。

「セグラン、ラーク・シャーサが血を吐いた！ 苦しそうなのだ、どうすればいい」

「そこをどきなさい」

ジアは取り乱すキルヴァを後ろからひょいと抱き上げて、手袋を嵌め、手拭いをひろげるセグランに預けた。大人しくセグランに顔を拭われながらも、キルヴァは天人から視線を外さない。

「俺は医師師じゃないからはつきりとはわからんが、どうも胸をやられているようだな」

「医師師が必要なら呼んでくる！」

「王子、いまからでは間に合いません」

「やってみなければわからない！」

「いいえ。間に合って、助かってても、存在が知られれば自由を失います。私たちも罰を受けるでしょう。私たちだけではありません、この、なんの罪もないジアも」

「……ッ」

「……祈りましょう」

キルヴァは全身を強張らせ、悔しそうに、辛そうに、ぎりぎりとな拳を震わせた。

「……私は、なにもできないのか」

セグランは呼吸を整えた。熱さで集中力が途切れがちになるのを必死に保ち、二度瞬きをして、じっと一点を見据えた。

「……魂魄が、離れかかっております。命が失われていこうとしているのです。せめてあの魂魄を肉体にとどめておけるならば、回復の見込みもあるかもしれませんが……」

「魂魄って、なに」

「……そうですね、わかりやすくいえば、あなたがあなたであることの証……意思や心のことですよ。その力が、命そのものである力と結びついて、肉体に宿り、生命体となるのです。もしこの魂魄と命の結びつきが解かれれば、肉体に宿ってはいられない……つまり、死を迎えるのです」

キルヴァは眼を剥いてセグランの胸元を掴み、揺すった。

「どうしたら助けられる」

「無理です」

「いやだ」

キルヴァは叫んだ。

セグランを突き放し、天人に縋りついて泣き叫ぶ。

「いやだ、いやだ、いやだ！ ラーク・シャーサ、死ぬな！ 死ぬなッ」

キルヴァは二年前を思い出した。

母と二人で近くの森を散策中に、暴漢に襲われた。あのときも、なにもできなかった。母は自分を庇い、背中から短刀で胸を刺された。血が流れ、母の眼から命が流れてゆくを見た。静かに、今際の際に一言もなく息絶えてゆくのを、ただ見ていただけだった。

「いやだ」

母の死に際の顔と天人の白い顔が重なる。

キルヴァの眼から涙が流れた。涙粒は天人の顔に滴って、つつ、と頬を滑り落ちる。

「もう誰も、死ぬのはいやだ……！」

「……せめて、この天人の名がわかれば、呼ぶことができるのです
が」

「……名？」

「はい。私は医師師ではないので治療はできません。ですが、少しの魔法は使えます。多少無茶をすれば魂魄を肉体に繋ぎとめるくらいは、できるかもしれないのですが……」

ジアは見かねてキルヴァの小さな肩を撫でた。

「坊、いずれ誰もが死ぬ。人も獣も天人すら例外じゃない。生命は神の範疇で、人が手出しをできるものではないのだよ」

「でもいやだ。私は助きたい……ッ、助きたい！ 助きたい！！
セグラン……！」

助けて、と言われるのを覚悟した。

あのとき 二年前、王妃が非業の死を遂げた現場にセグランはいた。

少し離れて警護していたことが、仇になった。暴漢はその場で仕留めた。だが王妃を助けることはできなかった……。

母上を助けて、と王子はセグランの胸に泣き絶った。母上を助けてセグラン、と……。

結局、かなえられなかったのだけれど……。

そのとき、誓ったのだ。王妃の代わりに、王子をお守りすると。ずっとずっと、この命尽きるまで、お傍にいます。

だが、キルヴァが告げた言葉はセグランの予想を裏切った。

「私を許せ」

言うが早いのか、キルヴァは懐から短刀を引き抜き、鞘を払って、セグランが止める間もなくその刀身を左の掌に、横一条に走らせた。

「なにをなさいます！」

「さがれ、セグラン！」

向けられたまなざしのあまりの苛烈さにセグランは気圧された。思わず跪く。まぎれもない、王の瞳がそこにあった。民を平伏させ、従わせる。その力を生まれながらに持つ者だけが有する王者の瞳だ。逆らえない。

なんて眼だ。

キルヴァは血に濡れた手を天人の唇にかざした。

なにをするのだろうか、とセグランすら、その意図がわからない。

キルヴァの血が数滴、天人の口に入った。

キルヴァは自らの唇にも掌を擦り、血で赤く染めて、そのまま天人に静かに口づけた。

あまりの出来事にセグランは啞然呆然とした。頭が真っ白になって、動けない。

「……私の血はそなたの血、私の息はそなたの息、我が心の臓の鼓動はそなたに寄り添い、私の声はそなたに届く。大いなる尊き血を継ぐ者よ、いまこのときより古き名を廃し、新しき名を授ける。我が名はキルヴァ・ダルトワ・イシュリー。汝が名はステラ。しかるべき契約に則り、繰り返す。そなたの名は我のもの、そなたの血は我のもの、我が死しても我のものである」

キルヴァは左手の痛みをしかめながら、セグランを振り返った。

「我が王家の始祖がはじめて迎えた花嫁は天人だったとき。名は、ステラ。はじまりの名だ。相応しいと、思う。だから」

キルヴァは必死に言いつのる。膝が震えて、どうしようもない。こんなにも怖いことを、なぜ独断でできたのだろう。王家の名を使

い、王家の血を使い、王家の契約のもとになにかを与えるなど正気の沙汰ではない。

だが不思議と、後悔はない。

怖くて仕方ないが、後悔はない。天人が助かればそれでいいのだ。いや、ただの天人じゃない。ステラだ。ステラが助かれば、あと
の責任は自分が取ればいい。

「名は与えた。次はなにをすればいい。魂魄を肉体に繋ぎとめるには、どうすればいいのだ」

セグランは、覚悟を決めた。王子の決断が誇らしかった。

このさき、なにが起ころうともかまわない。この身がどうなるうとも、王子の望みをかなえてみせる。

救うのだ、なんとしても。この天人を。ステラ、あなたを。

王家の名のもとに（後書き）

今日は大雪。寒いです。

できれば、今夜にでも、新作を投入したいです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

魂魄追跡（前書き）

第一章終了です。ありがとうございました。

魂魄追跡

セグランは深々と頭を垂れて告げた。

「あとは、お任せください」

「だめだ。セグランは私のために平気で無茶をする。だから、ひとりではだめだ。私も手伝う。なにをすればいい。教えて。お願いだ、セグラン」

セグランは顔を上げた。

視線がぶつかる。

「……仰せの通りに。では、すぐにはじめます。もう既にステラの魂魄はここにはおりません。が、まだ完全に離れたわけでもありません。私はいまからあとを追います。王子は私とステラの手を握ってください。そして強く、心の中で私たちの名をお呼びください。ただし、声に出してはいけません。私に話しかけてもなりません。戻ってこられなくなる恐れがあります。よろしいですね？」

「わかった」

「では、はじめます。どうかお力をお貸しください」

セグランは皮手袋を脱ぎ捨て、ステラの眉間に左手の人差し指と中指を揃えて触れた。右の人差し指と中指は自分の眉間に添える。眼を閉じる。

それから呼吸を整え、ステラのそれに徐々に合わせてゆく。細く、細く、ゆっくりりと、ゆっくりりと……そして完全に重なったその刹那、間髪おかず、セグランの魂魄はふっと肉体を放れて、みるみる飛翔した。

遠く遠く遠く、遠く遠く遠く、遠く遠く遠くへ

彼方へ、遙か彼方へ

セグランの魂魄はその肉体から一条の光の尾を引いて、まっしぐらに飛んでゆく。ステラの光の尾を追って。

いまにも意識が途切れそうなきりぎりの精神をもって、セグラン

はステラを追った。

魂魄を追うのはこれがはじめてではないが、それでも、もっていかれそうだと、思った。

そもそも、自分程度の魔法知識で、十分な準備もなく、試みていない技ではない。

どこだ……。

どこにいる……？

セグランは意識を集中させた。かつてない域まで研ぎ澄まし、ぐんぐん、ぐんぐんと、ステラの航跡に迫ってゆく。

いた。

呼びかけは、一度きり。

二度はない。失敗すれば、もう追えない。意識を保てる人の限界域をだいたい突破しているのだ。

ともすれば、自我を失いそうな局面において、だが、セグランを支えるものがあつた。

王子の声が聴こえる……。

キルヴァ様……。

心が、ふつつつと熱いもので滾る。

力が、湧いてくる。

この一度の呼びかけに、すべてを注ぐ。

すべてを賭けて、呼ぶ。

ステラ！

あなたは、生きるのだ。

そちらではない、こちらだ こちらだ。

そうだと、こちらだ。

共に、還ろう。

共に、還るのだ、王子のもとへ

私たちの王子のもとへ ！

かつ、とセグランの眼が開かれた。と同時にくずおれる。

「セグラン」

キルヴァは破顔して、セグランの首にぎゅっと腕を巻きつけ抱きついた。

「よかった、セグラン」

セグランは荒々しく喘鳴を吐き出しながら、キルヴァの後頭部を撫でた。小さな手の温かさが、嬉しかった。

「……ただいま、戻りました。ステラも、無事です」

「うん、ありがとう」

「……ずっと、名前を呼んでくださいましたね……ありがとうございます。ございます。おかげで、助かりました。私ひとりでは戻っては来られなかったでしょう。病状は、どうにもなりません……しかし、魂魄さえあれば、時間はかかっても徐々に良くなるでしょう」

「まあ、乗りかかった船だ、あとは俺が看るさ」

ジアはセグランに水を渡した。

キルヴァは気恥ずかしげに離れ、セグランは受け取った水を一気に飲み干した。

そして一息ついて、言った。

「王子、私たちができることはすべてやりました。まもなく日が落ちます。夜になる前に、戻らねばなりません」

「……うん。でも、あの、もうちょっとだけ。ステラが眼を覚ますまでついていたい」

セグランは姿勢を正し、首を振った。

「いつ眼を覚ますかわからないものを待つわけにはいきません。お判りでしょう？ 王子が戻らねば、大変な騒ぎになります。大勢の人間が捜索に出ます。そうなったあとでは、今日あった出来事すべてが露見する危険があります。このことは、湖でも誓ったとおり、私と王子と、そしてジアの、絶対の秘密です。あなたはもうここへは来られません」

「えっ」

「あなたは今日ここへは来なかった。湖ではなにもなかった。そういうことにしなければならぬのです。無論、天人のことはひとことも言っではいけません。できれば忘れてほしいくらいですが、それは無理なことでしょうか？」

「忘れるなんて、できない。でも、セグランの言うことは、わかる。正しいと、思う」

痛ましいくらいに努力で自らを納得させんとするキルヴァは、いつにもまして、大人びて見えた。

キルヴァは苦しさを我慢した表情で、ジアに寄って、手を握り締めた。

「でも、せめてステラがどうなったかは知りたい。よくなっても、わ、悪くなくても……絶対に恨まないから、教えてくれる？」

「それとわからない方法でセグランに伝えよう」

「ありがとう」

セグランは、ジアに詳細を話さなかったことは正解だったと思った。

万が一ジアがステラに色々訊かれても、知らなければ答えようがない。湖で起こったことは、本当の意味で、自分と王子の二人だけの暗黙の秘密なのだ。

「もう坊とは呼べんな」

ジアはさみしそうにうつそりとそう呟いた。

「王子」

ジアはキルヴァの手を取ったまま、ぎこちなく膝を折った。

「あなたさまは賢い。自分がどんな身分であるのか、きちんとわきまえておられる。ときにはその垣根を払い、ときにはその垣根を高くする。なにがよくて、なにがいけないか、なにが正しくて、なにが悪なのか、それが人の基準では測れないとき、自らの心に従うすべをもはや身に付けておられる。だから、どうか覚えておいてください。天人は、ひとの力では扱いきれぬ者、ひとの心ではわかりあえぬ者……ひとならぬ者なのだ」

ジアはキルヴァの手を押し戴いて、鈍い動作で立ち上がった。

「さあ、行きなさい。山の夜は早い。獣も出よう。途中まで送りた
いが、この者についてなければならぬのでな」

「……いつも面倒ばかりかけて申し訳ありません。いつかこの身で
ご恩が返せればよいのですが」

「もういい。それより、気をつける。天人は群れる生き物だ。おそ
らく、この者の行方を捜しているはず。おまえたちには天人の気配
が染みついている……自分じゃわからなくとも、ついているんだ。
いきなり襲われても不思議じゃない。帰る前に、これを塗っていけ」
渡された小さな袋は口が紐で閉じられていて、中には黒い粉末が
入っていた。

「……なんですか？」

「なんでもいい。水で溶いて、肌の露出した部分に塗るんだ。少量
でいい。余ったら、持って行け。あとでなにかの役に立つこともあ
るかもしれない」

ジアはセグランの二の腕をぐっと掴んで引き寄せ、キルヴァの耳
にはいらぬよう、ほんの小さな声で戒めた。

「……覚えておけ。このさきにながあっても、決して天人を敵に回
すな」

「……はい」

「よし、行け」

「はい。あなたもどうか、ご健勝で。 王子、そろそろ参りまし
よう」

キルヴァはステラの傍にいた。

今日逢ったばかりなのに、なぜかとても近しく感じられて離れ難
い。

だが、セグランが呼んでいる。もう行かなければ。

「……いつか、もう一度逢えるような気がする。だから、さよなら
は言わない」

またね、とキルヴァは誰にも聞こえないように呟いた。

ジアの指示のもと、天人避けの薬を塗って作業小屋の外に出てみると、もう日暮れ時だった。

紅と橙色の荘厳な色合いの夕焼けが空を染め、紫色の雲が薄くたなびいている。風は清々しくも冷たく、夜の到来を告げていた。

なにかが、聴こえた。

キルヴァははっとした。

「そうだ！　ねえ、裏に鳥のヒナがいたけど、あの子はどうしてここにいるの？」

「しまった、餌をやらんと。いやいや、昨日の大風でな、巢から落ちたらしい。怪我をしとったから連れてきて手当てをしたまま、すっかり忘れておったわ」

「ねえ、あのヒナ、私が引き取ってはだめ？　きちんと世話をして大事にする。野生の鳥は、一度ひとの手から餌をもらったら野生に戻れないと、聞いたことがある。だから結局死んじゃうって……ね、セグラン、父上には私からお話するから、連れて帰りたい。もし私に任せてくれるなら、だけど……」

ジアとセグランは顔を見合わせた。

すぐに天人と重ねていることはわかった。それゆえ放っておけないのだということが。

「そうですね。親方さえ、よければ」

「あれはギイ大鷹のオスのヒナで、成長するとばかでかくなるが、いいのかね」

「大きく立派に育ったら、見せに来るよ！　約束する！」

「ほお、そりゃあ楽しみだ。じゃあ、任せるとしようか」

「ありがとう！」

本当に嬉しそうにキルヴァが笑ったので、ジアもセグランも、鳥を飼うということがどれだけ面倒で大変な手続きが必要であるかは保留することにした。

キルヴァは胸にギイ大鷹のヒナをそっと抱えて庵をあとにした。

ジアは二人が見えなくなるまで見送った。

だが、約束は果たされることはなかった。
キルヴァは、ジアとはそれが最後の別れになった。

魂魄追跡（後書き）

次話より、第二章開始です。

十年後です。キルヴァがどんなふう^に成長を遂げているか、お確かめください。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

第二章 命を懸けた誓いに生きるということ

書状（前書き）

やや短めに掲載することにしました。

多少は読みやすくなるかな、と思います。

第二章 命を懸けた誓いに生きるということ

書状

春

満開の桜、若草は萌え、木々は新しく息づき、あらゆる生き物が眼を覚ます。

風は芳しく、光は淡く明るく、空はどこまでも穏やかに澄みきってひろがる。

雲ひとつなく晴れた春爛漫のこの朝、一通の書状がこの地方の若き当主宛に届けられた。

それは、のちにこの国の命運を決する出来事へと導くことになるものだったが、まだこのときは誰の胸にもなんの予感もなかった。

差出人はセグラン・リージュ。

宛先人はキルヴァ・ダルトワ・イシュリー王子殿下 名実ともに、この国の第一王位継承者である。

「また少し眼を離せばこれだわ さつきまでおとなしく書状を読んでいたと思っただろ。ンもう、本当に油断も隙もない！ 王子！ 隠れてないで出てきてくださいな！ あなたさまにいたくならないと私が怒られるんです！ ちょっと、なにひとりで寛いでいるのよ。ダリー、あんたどうして王子についていかなかったの」

ダリー・スエンディーは心外だ、とばかりに顔をしかめて席を立ち、外出用の身づくろいをはじめた。

中肉中背、まっすぐ姿勢が保てず、少し左肩が下がる癖がある。金髪は日に焼けて赤茶に近く、眼は少し珍しい色合いで、紫がかつた藍である。

まだ三十代半ばだが、どことなく緩慢な動きは常にてきぱき、き

びぎびと行動するエディニイ・ローパスの癪に障り、十以上も年下の彼女にしょっちゅう子供のように注意されている。

ダリーはエディニイのよく動く口が閉じたのを見てから言った。「……おまえを待っていたんだ。王子が出かけるから、今日は全員で供をするようにとのことだ。いま、厩舎に馬を取りに行った。クレイとミシカがお傍についている。俺たちも行くぞ」

「え、あらそうなの。じゃ、行きましよう、早く」
まったく悪びれた様子もなく、エディニイはマント掛けから自分のそれを取り、日よけの帽子を被り、皮手袋を嵌め、常備する武器用具をざつと検分し、用意が済むと、さつさと踵を返した。

なにことも無駄が嫌いな性分なのだ。
背は少し低め、だが足が長いのが自慢でそのうえ脚線美に優れている。顔はやや童顔で、いつも年相応に見られないのが秘密の悩み
の種である。無造作に束ねて結いあげた髪は黒、瞳も黒。肌は砂漠出身のため褐色である。

ダリーはこの口喧しい年下の同僚を猫と同じく扱っている。

「そういえば、今ぐらいの時期で、ちょうどこの辺りでしたね」
クレイ・シュナルツァーは馬上でやや身を捻り、手綱を軽く手前に引いて、速度をゆるめながら王子を振り返った。

なにか、少し考え込んでいるようである。
短く切り揃えるのが惜しまれるぐらいの見事な金髪が風の形にたなびく。王家生粋の翡翠の瞳は静かな胆力と知性が宿り、年不相応に落ち着き払っている。美貌で知られた亡き王妃によく似た整った容貌、武芸に通じた体格は日頃の訓練の賜物である。幼き頃より徹底した帝王教育を施された成果故か、慎み深い物腰の中にも、どこか風格がある。

「ご立派な青年になられた……」。
クレイは眼を細めて心の中で称えた。
セグラン次軍師がご覧になられれば、さぞやお喜びになられるだ

るうに……。

「憶えておいでですか。カズス・クライシスを王子がお気に召して、近衛に抜擢した場所ですよ」

「憶えている。あれは傑作だった」

「呼んでみませんか？　もしかしたらあいつのことだからまた繰り返すかもしれませんよ」

「まさか」

キルヴァが一笑した。

だが悪戯心が芽生えたようで、

「やってみるか」

「やりましょう、やりましょう」

クレイはキルヴァより、ほんのわずかの距離をおいてさがつた。

黙って成り行きを静観していたミシカ・オブライエンは憮然とした表情でクレイを見やった。

彼女は彼が王子を眺めて涙ぐむ姿を幾度となく、頻繁に、目撃していた。どうも王子の成長を非常に喜んでいるようなのだが、正直、鬱陶しい。自分より五つも年下で、まだ三十にも届かない若さでありながら、年寄りくさいのも気に食わない。

図体ばかり勇ましく、横にも縦にも人並み以上のくせに、顔は意外に繊細というのも気に食わない。薄茶の髪、薄茶の瞳。男のくせに肌のきめが細かいことも気に食わない。要は、同僚でなければ近づきたくない部類の男なのだ。

まあ、たぶん相手も同じようなことを考えているだろうけど。

と、ミシカは自嘲気味に口辺を歪めた。ミシカは自分というものをよく知っていた。

女でありながら武芸一般に秀で、一方、まともな行儀作法も満足でない。並の男より体格は勝るものの、顔は十人並み、髪も眼も平凡な茶で、胸もなく、腰もくびれていない。とりたてて女らしいところがない。口が下手で、気もきかない。愛想もない。仕事以外に

趣味らしい趣味もない。人のことなどとやかく言える人間じゃない。
……それでも、やはり気に食わないが。

キルヴァは空を仰いだ。素晴らしい天気だった。太陽光がきらめき、あたたかく、風も爽やかで、本当に清々しい。

そう　あの日も、こんな朝だった。

嵐の中、薄暗闇を引き裂いて金色の光が閃いた。

それが星だと聞いて、胸を躍らせて赴いた湖で　。

私は秘密を抱くことになった。

あれからもう、十年が経つ。

十年だ　セグラン。

「あれ、どうしました王子」

はっとする。

キルヴァは思考を中断し、なにごともなかったかのようにクレイに向けて微笑した。おもむろに、左腕の肘を折って肩の高さまで掲げた。そして、声高に呼ばわった。

「来い　カドウサ！」

第二章 命を懸けた誓いに生きるということ

書状（後書き）

キルヴァ、成長しました。笑。

一挙に人口密度も増えました。

連続投稿しますので、続きをどうぞ。
安芸でした。

イシユリー国（前書き）

本当は地図でも作成できればよいのですが。

イシュリー国

広大なカダル大陸には大小十一の国々が権勢をしのぎ合っている。中でも四番目に建国が古く歴史のあるイシュリー国は、ほぼ中央にオーラン山脈が横断し、更に河川と湖沼も多く、水源に不足のない水に恵まれた国だった。

国土は現在十の領地に区分され、第一領地から第十領地までと、それぞれ王家所縁のものが自治を任されていた。

自治には国法とは別に各領地の自治法があり、通常は多くが独自の自治法によって管理運営されている。

だが、戦時の場合においての主権はすべて王のものとなり、何人も異を唱えることは許されず、国法に基づき王命に従うことになる。いまイシュリー国は七年にわたる交戦状態にあった。

はじめはライヒエン国とスザン国が領土の境界線を巡って開戦し、やがて双方に隣接するイシュリー国にどちらの国からも支援要請があった。

これを断ったところ、二つの国からの攻撃を受け、侵略の対象とみなされたので反撃に出た。長きに及ぶ、三つ巴の戦のはじまりだった。

オーラン山脈の山裾、第一領地に国の中枢を担う王宮があり、そこにイシュリー国第十九代国王ディレク・ダルトワ・イシュリーと、第二王妃（第一王妃はすでに死去）エリフェア・ダルトワ・イシュリーは在していた。

いまは亡き第一王妃シュリトウを母とする第一王子は第四領地へ領主として赴任、エリフェア王妃を母とする第二王子は第八領地へ領主として赴任（まだ成人年齢に達していないため後継人付き）中である。

決着のつかないまま、戦線は膠着状態で二年が経つ。

目下の前線は、ライヒエン国とは第二領地から第三領地にかけて、スザン国とは第六領地から第五領地にかけてひろがった。

更にライヒエン国とスザン国も事を構えているので、状況は一進一退の攻防が続いたまま現在にいたる。

しばらくはこのままかと思われた矢先、第五領地前線で異変があったと、第一報がもたらされた。

さつそく、国王デイレクは自ら兵を率いて戦地へ向かった。ライヒエン国ともスザン国とも一線を交え、数々の死線をくぐり抜けてきた勇猛な王である、ちよつとやそつとの出来事で怯むことなどない。

だが、いつてみて驚いた。

第五領地とスザン国との国境　その最前線に張った味方の陣が燃えていた。そればかりではない。国境線そのものが炎上していた。高く吹き上がる炎の柱は見渡す限りずっと続く。おそらく第六領地まで、もしくはそれ以上までも。

これではこちらから攻め入ることは不可能、と判断した国王デイレクは事態の打開を火急に図るために軍師と次軍師二人を呼びつけた。

リアストン暦九百九十三年、オーエンの月、第九日目のことである。

イシユリー国第四領地は南側を中央にある第一領地に接し、また西側を第三領地と第十領地、東側を第五領地という具合に隣り合わせていた。

数年前に戦線は一時拡大したものの、その後はほぼ膠着し停戦状態になってしまったので、第五領地よりいまだ支援の要請はない。

王命も指令があるまで待機とのことなので、さいわいにも、まだ戦火の傷を負ってはいなかった。

第四領地は、主に農作地である。

農業を主軸に、ついで牧畜が盛んである。領民の多くは代々何世

代も続く農民で、その暮らしぶりは質素で堅実、気質も穏やかで、自分たちの生活を過不足なく支えてくれる領主に信頼を寄せていた。領主城は領地の南側、第一領地側に寄っている。

だが城とは名ばかりで、実際のところは要塞である。危機の際は領民すべてを収容できる規模の頑健な建造物群は、完成までに八年の歳月をかけた。

ここには、領主の居城、労働者の大型住居群、自治関連施設、大規模な兵舎、厩舎、練兵場、運動場、相当数の避難施設、備蓄を保管する倉庫群、医療施設、管理の徹底された井戸と水道と水を蓄える池、確保された農業地と家畜、武器工房、製鉄・鍛冶工房、そしてこれらの施設を建設、整備、管理する建築関連施設がある。

有事に備えてこの要塞の建設に着手し、完成させたのは、いまだ若き現在の領主であった。

着工当時は費用や物資の面でさまざまに揉めたが、いざ開戦となると、それが危急に必要なものだということに納得がいった領民たちの行動は迅速だった。

そうして完成した領主城に、いまおよそ二万の兵士が駐屯している。

イシュリー国（後書き）

次でキルヴァの近衛の顔ぶれがそろいます。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

六人の近衛兵（前書き）

少年キルヴァがジア老人より譲り受けた鷹が、立派に育ちました。
笑。

この物語は、人名に気に入ったものが多いです。

六人の近衛兵

キルヴァは赤煉瓦づくりの大型兵舎が建ち並ぶその向こう 建造物群の中でも一際高い領主の居城の塔のてっぺんを見つめた。小さな影が舞い上がる。ふわ、と浮いたその姿は両翼を一度はばたかせたのち、首を前に突き出した恰好で、ぐん、と一気に下降した。

と、ほぼ同時に、一番手前の兵舎の二階窓から人影が現れたかと思つや飛び降りて、そのままつしぐらに全力で疾走してくる。

宙を滑空し飛来して来たそれは、ギイ大鷹の成長したオスで、灰色の翼と黒い頭部、黄色い眼、そして鋭い黒い嘴をもっていた。

キルヴァの頭上で大きく宙返りをしたギイ大鷹、カドウサは、照りつける太陽にその姿を重ね、光の中一点の影となり、黒く映える。そして優美に翼をたたみながらキルヴァの腕に舞い降りた。

これと同着で、脇目も振らずに突進してきたのは下半身に薄い下着をつけて紐を結んだだけの裸の男で、着くなりキルヴァの足元に跪いた。

「カズス・クライシス、ただいま参上致しました！」

ぶはっ、と横でクレイが嘖き出す。ミシカまで苦笑する気配がした。キルヴァも思わず笑ってしまった。

「え、なんかおかしいですか、俺」

カズスは跪いたまま太腿に手をおいた姿勢で顔だけちよつと持ち上げ、キルヴァを見て首を傾げた。その腕にギイ大鷹のカドウサがとまっているのに気づくと、失態に気づいたように顔を引きつらせた。

「……もしかして、そいつを呼んだんですか？」

「そうだ」

「あちゃー。またやったか。俺何度目だろ……しかも裸だし。あーすいません王子、ちよつと御前を失礼して服着てきてもいいですか。

つて、あれ、前にも同じ会話をしたような気がするな……？ えー
と、気のせいですかね？」

「いや、気のせいではない。はじめて会ったときも君はそう言った。
忘れたのか？ 私はカドウサを呼んだのに、君が裸で走ってきて驚
いた……もう六年前になるか」

「ああ！ そういえば、そうでしたっけね。俺、まだ入隊したばか
りだっていうのにいきなり王子に名前を呼ばれてびっくりしたのな
んのって！ そうか、俺が王子にお仕えしてもう六年になるのか

「
六年前のカズスとの出会いは衝撃的だった。

カドウサを呼んだはずなのに、全力疾走で眼の前に現れたのは、
赤みがかった金髪に灰色の眼、日に焼けた肌、傷痕だらけの鍛えら
れた肉体、とても若く、精悍で、力があり余っているといった風貌
の真っ裸の男だった。

変わった男だ、という第一印象と共に、意志の強そうな瞳と実直
そうな振る舞いが、ふと別の誰かを思い起こさせた。

四年前に別れたきり会っていない、特別の秘密を分かち合う存在
師とも兄とも慕っていた、心を尽くしてくれた、少し年上のひと。

セグラン・リージュはキルヴァのために、キルヴァがために、
キルヴァゆえに、いまもまだ離れた地でひとり闘っている。

少しセグランに似ているかも知れない、と思ってキルヴァはカズ
スを傍においた。六人目の直属の近衛兵だった。すぐにまったく別
の人格であることは判明したが、そのときには彼が近くにいること
の騒々しさに慣れていた。

「時の経つのは早いなあ」

しみじみと、感慨深げにキルヴァを眺めるカズスの視界にクレイ
は横ிட்டた。手綱を操りキルヴァの近くに馬首を寄せて、皆に聞こ
えるようにしっかりと声で耳打ちした。

「ほうら、やはり来たでしょう。王子、この男は頭が悪い いや
進歩がないと思いませんか？ なにせ六年前とまったく同じ行動、

同じ台詞ですよ。こんなのいらないうんじやないですか」

「おいこら、こんなのつてなんだ！ 王子に変なこと言つなよ！
首切られたらどうすんだ」

「私も同意見です。露出狂なんて、王子のお傍には無用です」

そう言つたのはミシカで、キルヴァと眼が合うとまんざら冗談でもないようににやりと口辺を歪めた。

あまり無駄口をきかないミシカまでそんなことを言うものだからカズスは慌てふためき、キルヴァにしどろもどろに言い訳した。

「俺は露出狂じゃねえ！ 王子、俺違いますからね。ほんと、違いますからね。俺いま演習後で、水浴びしたばかりで服着る前に呼ばれたから 服、そつだ服着てきます。すぐ着てきますから俺を置いていかないでください」

「私がどこかにいくなんて、どうしてわかる？」

「そりゃわかりますつて。クレイとミシカだけじゃなくてダリーとエディニイも来たし。それにさつき練兵場からアズガルが出て行きましたからね、たぶんそこらへんにいるでしょう。俺だつてお供しますよ。お願いします、少しお待ちを」

一方的に許しを請うてカズスは踵を返し、兵舎へと駆け戻つてゆく。その恥も外聞もない裸の後ろ姿を見咎めて、合流したばかりのエディニイは悪態をついた。

ダリーはクレイから事の顛末を聞くとくつと笑い、ミシカは傍観を決め込んでいる。

ふと背後に視線を向けると、そこにはいつのまにいたのか、アズガル・フェイドが頭を垂れ、跪いてキルヴァの声がかかるのを待っていた。

「来たか」

「ご命令を」

「皆と一緒に供を頼む」

「畏まりました」

アズガルは一礼して風のように姿を消したかと思えば、いつのま

にか馬の手綱を引いて傍に控えている。

キルヴァは彼がどうしてそんなふうに動けるのかいまだにわからない。

アズガルとはこの顔ぶれの中で一番長く一緒にいるが、彼についてキルヴァが知っていることはほとんどなかった。

アズガルの黒い双眸には感情がない。出身国不明の容貌は冷たく整い、癖のないまつすぐな黒髪はやや長めでひとつに束ねている。背は高く、瘦躯、常に黒装束で履物も黒、佩いている長剣の柄や鞆まで黒、黒以外を身にまとったところを見たことがない。物音をたてずに歩き、ふらつと姿を消しても、気がつけば影の如く傍にいます。決して皆の輪の中にはうちとけない。皆もそれを承知しているので彼には一切話しかけない。いつもの仲間内の光景だった。

キルヴァは、今朝早くセグランより書状を受け取ってからはじめて胸が安らぐのを感じた。するとカドウサが自分の存在を忘れるなと言わんばかりに抗議の声を上げた。キルヴァは微笑して、カドウサを空に放した。

あつという間に、カズスが戻ってきた。

今度はきちんと身支度を整え、武装して、自らの愛馬に跨っている。その姿は颯爽として、さきほどの惨めさは微塵もない。

「お待ちせしました！ さあ行きましよう。で、どこに行くんです？ 王子が俺たち全員を連れて出かけるなんて珍しいですよえ。

……あれ、待てよ。もしかして、さっき勘違いして出て来なかったら、まさか俺、さりげなく置いていかれました？」

「そりゃ置いていくわよ。あんたみたいに騒々しい奴を誰が好んで連れて行くの？」

と辛辣にも言い切ったのはエディニイで、隣ではクレイがしきりと頷いている。

キルヴァは無言で馬首をめぐらせた。軽く手綱を振るう。愛馬のバレンジールが低く嘶き、早足で駆けはじめ。

すぐに皆が後に続き、数瞬のちには、右前方にエディニイ、左前

方にクレイ、右にダリー、左にミシカ、右後方にアズガル、左後方にカズスがそれぞれ定位置に就いた。

そして上空にカドウサの羽ばたき音を聞きながら、キルヴァはカズス、と呼ばわった。

「なにも告げずとも、君は私の傍にいる。こうして常に、どんなときも必ず。たとえ私が突然姿を消したとしても探し出してついで参れ。よいな」

息をのむ気配。ついで感極まった威勢のいい声が響く。

「はっ！ 必ずや」

「もちろん、そのお言葉は私たちにも向けられているのですよね」
ちよつと不満そうに言ったのはクレイで、キルヴァは首肯した。

「無論、君たちも同様に決まっている。今日はこれから少し遠出する。帰りは夜になるだろう。そのつもりでついて参れ」

「どちらまで行かれますのか」

ミシカが訊く。瞳には警戒の色がある。

キルヴァはミシカと視線をぶつけたまま、一切の反論を許さぬ口調で目的の地を告げた。

「第一領地、シユイ湖だ」

六人の近衛兵（後書き）

無事、第二章の滑り出しです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

シュイ湖にて（前書き）

短めに、短めに。
過去への追想です。

シュイ湖にて

第四領地から第一領地境までは大農耕地帯と起伏のある丘陵地が続き、四か所の交通の要所の中継を経て、未開発の原野をよぎった。彼方には峻嶮なオーラン山脈が聳え、古来より寸分変わらぬ威容を誇っている。

小型の漁船二隻がようやく行き交うだけの川幅と深さを維持するザール川に着いた頃、正午になった。

この川が領地の境目であるだけに人も物資も往来は途切れることなく、一行は順番を待ち、二手に分かれて渡し船に乗り、向こう岸に到着した。

憲兵は兩岸にいて雑事や揉め事、見張りに従事していたが、用向きを伝えると最敬礼と共に一行を送り出した。

第一領地に入ってはじめての町ポルトで休憩をとった。

馬を休ませ、餌と水を与える。一行も身分を明かさぬまま旅客人用の食堂で食事と用足しを済ませた。一バーツ後、出立した。

人里から離れているためか、まるで人気のない静かなるヒースの森を抜け、シュイ湖に到着したのはそれから二バーツ後である。

湖は十年前とほとんど変わらぬ趣だった。

時間帯による光の加減と、周囲の樹木の成長はともかく、湖そのものは十年前と同じくそこにあつた。湖面は光を反射してきらめき、小波がゆるく湖岸に打ち寄せている。

キルヴァは皆を制して馬を下り、湖の淵までいった。

春の陽射しが眩かった。緑の新鮮な薫りが鼻孔をくすぐった。風がやわらかで心地いい。

キルヴァは湖の真ん中に視線を定め、胸一杯に息を吸い込み、眼を閉じた。

ゆっくりと息を吐きながら眼をあけると、そこに、十年前の幻影を見た。

……セグランが、傷ついている天人を曳いて、こちらに戻ってくる。

湖岸に眼を移す。

……今度はセグランと幼き日の自分が向き合っている。

あの日ここで、二人で絶対の秘密を誓った。

あれから十年。

あの日から五日後、キルヴァはセグランと別れた。

別れてからの十年の月日は長いようで短く、また、短いようで長いものだった。

こうして思い出の地に立つと、埋もれていた記憶がまるで昨日のことのように蘇ってくる。

シュイ湖にて（後書き）

皆様には、親兄弟以外で、年の離れた、大切なひとはいますか？
別れたくないのに、別れてしまった、もしくは現在別れて暮らしている、そんなひとが？

心の寂しさ。

そんなところも書けていけたらと思います。

ご覧の通り、地味ですが、淡々といききたいです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

宣誓（前書き）

誰かに命をかけて戻くされる、
という事は、
どついつ感じなの
でしょつね。

宣誓

「私は軍師になります」

セグランは片膝をついてキルヴァと目線を合わせ、決然と言い切った。

「いずれあなたがこの国を統治なさるとき、私も微力ながらお手伝いをしたいのです。あなたとあなたの守るこの国を、私も守りたいのです。そのために、私は学ばなければなりません。何年も何年もかかるでしょう。ですが、次にお目にかかったときにはあなたのお役にたてるものとなり、あなたのために必要なものであるように、全力を尽くします。私のこの我儘を、お許し願えますか？」

セグランは押し黙るキルヴァの手を押し戴いた。

「……本当を申しますと、このままでは私は殺されます。お静かに声を荒げてはなりません。どうぞそのままお聞きください。私についてはおそらくは湖の一件だとは思っていますが、他にも何人か、なにに対してかは不明ですが、憲兵に疑われて捕えられ、罰を受けたようなのです。疑わしきは始末せよ、と軍師リユーゲル・ダツフリー殿から指令がおりているようで、既に処刑されたものもいると聞きます。私も今日のところは帰されましたが、私だけがこのまま無事に済むとは思えません。王子は大丈夫です。王子は他ならぬ王の御子、王が守ってくださいます。私は、まだ死にたくありません。あなたを残しては死にたくないのです。ですからいつそ、この秘密の渦中に飛び込もうかと思えます」

セグランは血の気のない顔で微笑した。

「軍師殿は王命でしか動きません。なにが起きているのかはともかく、なににせよ、軍師殿が動いている以上、国家規模のなにかであることは間違いないのです。そしていずれはあなたにも関係のあることとなるでしょう。そのとき私ばかりがなにも知らない存在ではいたくないのです。いついかなるときも、あなたのお力になるため

には、無知のままではいられない……たとえそれが、禍々しい、白日のもとにはさらされぬ悪逆の秘密であったとしても。あなたが負うものは私も負いたい……身の程知らずかもしれないませんが、お許し願いたいのです。しばらくのお暇を、どうか。私は、リユージェル・ダツファリーのもとへ参ります」

セグランに向け、キルヴァは口を利いた。

「……私になにかできることは？」

「……余裕のあるひとに、おなりください。あなたはやがて王になられるお方。ですから目先のことにのみだけ、とらわれてはなりません。常に先を見て、常に先を読むように、常に先のことを考えるようにするのは。それには余裕が必要です。余裕のあるひとだけが、他者にも優しくできるのです。そうすれば、あなたは立派な王となられるでしょう。……もっとも、いまでもあなたはその心をお持ちです。あなたはお優しい。健やかで、明るい。どうかその心をいつまでも忘れないでください……いつの日にかまた必ず、お傍に参ります」

「誓うか？」

「誓います。しばしのお別れです　王子。いえ、私の唯一無二の

王よ」

宣誓（後書き）

身分のあるひとの話し方、というものについても困ります。少しでも、それらしくあれば、よいのですが。

次話、天人登場です。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

葬送剣舞（前書き）

悲しみに耐えること、それが必要なときもあります。

葬送剣舞

キルヴァは物思いより醒めてからもしばらく動かなかった。

懐には、今朝届いたばかりのセグランからの書状がある。それを読んで、参戦の意を決めた。ついに起つたときが来たのだ。あとは迅速な行動、的確な判断と無駄のない指令がものを言うだろう。

だが 発つ前にどうしてもやらねばならないことがある。

「ダリー、ミシカ、支度の手伝いを頼む」

短い返答のあと、ダリーとミシカは手際よく馬に括りつけていた衣装箱二つを下ろし、敷物を敷いてその上で荷ほどきをはじめた。

カズスとクレイは皆の馬を誘導し、湖で水を飲ませ、草地に連れ行き、手綱を解けぬよう樹の幹に括りつける。

エディニイとアズガルはどちらともなく左右から近辺に異常がないか見回りに行った。

キルヴァは敷物の上で服を脱ぎ、着替えはじめた。

ミシカが衣装箱から丁重な手つきで取り出した衣装を見て、クレイが悲鳴をあげた。

「うわっ、大真紅黄長衣！ まさか、本物ですか。うわわわわ、被り巻き布、肩帯、帯締め、腰紐、履物まで一式勢揃え……！ いったい何事ですか、これは！」

「よく知っているな、クレイ」

「まさか！ 実物など見たことありませんよ！ 姿絵だけ たった一度お目にかかったことがあるだけです！ うわあ……すごい。これはすごい……本物だ……こんな、こんな、なんて……なんて美しい……素晴らしい……信じられない。この眼で、こんなに間近に本物を拝見できるなんて……」

感無量といった風情でいまにも泣き咽びそうなクレイに対して、少し胡散臭いものでも見るような眼で眺めてカズスが訊いた。

「……まあ、確かに赤くてきれいだけども。この衣装、そんなにすごいのか？ どこが？」

「口を慎め！ この衣装は、王族の方にだけ許された真紅であるばかりじゃなくて、ごく限られた祭典や儀礼にのみ、着用を許されるものなんだぞ。王でさえ、一生のうちにも袖を通される機会など数えるくらいしかないはずだ。主な用途は、高位の王族の結婚か葬儀か王位継承か……それぐらいのものだ。この衣装に触れるのもごく限られた人間で、管理もそれは厳重なはずなのに……ねえ王子、よろしいのですか？ こんな、我々の前で、それも湖のほとりで、十分な警護なく、しきたりも無視で、儀式もないままなんて……いや、よくない。よくないですよ。こんな不用心なところ誰かに見られてもしたら一大事です！」

「そうだな。だから皆、他言無用だぞ。よいな」

「そんな、王子……勘弁してくださいよ。いえ、お似合いですよ？ さすがにお似合いですけど、でもやはりこんなところを誰かに見られてもしたらまずいですって。私たちも咎められるでしょうが、まあそれはやむを得ないとして、王子だってただではすみませんよ？」

クレイは泣きごとをぶつぶつ言いはじめた。

キルヴァは平然と聞き流して、真紅の衣装を順番に、正確に、慎重に、すべて身につけた。上衣は立ち襟で丈は長く太腿まであり、脇にスリットがあるので腕の上げ下げはしやすいようになっていて、下衣は裾のやや広がった薄いズボンを穿き、更にその上に横長の一枚布をそのまま腰に巻き、前で襷をつくり巻きつける。それから肩帯を右から左に斜めに掛け、帯を締め、腰紐を飾りに流し、被り布で頭を覆い、赤い王家の紋章の飾りで留める。最後に同布の履物を履く。

大真紅黄長衣　王家の真紅に黄色の糸での独特の意匠の刺繍を施した、特別の儀礼服。これを纏うのは母の葬儀以来のことだ。

クレイが大騒ぎするのも無理からぬことだ、とキルヴァは思った。

実際、それだけの価値のあるものであり、滅多に人目に触れるものではない。このたびは自分の裁量で、やむなく無断で持ち出したのだが、それもあってはならないことだ。露見すればクレイの言うとおり、なんらかの処罰が下るだろう。

だが、

「……それでもよい。私にできることなど、このぐらいしかないのだ」

「いったいなにをなさるおつもりですか」

ダリーとミシカが一通り片づけをすませた頃、見回りからエディニイとアズガルが戻ってきた。

「まあ、素敵なお召し物ですね、王子！ よくお似合いです」

エディニイが率直に褒めるのも面白くない様子でクレイが渋面する。

アズガルさえ眼を瞞って、訝しげに首を捻った。

カズスは肩にとめたカドウサにおやつをやりながら事の成り行きをぼんやり見ている。

「皆はあちらに下がっていてくれ。アズガル、君も。大丈夫、なにも危険なことはない」

キルヴァは持参した聖水で唇と手を清めた。

「これから私の古い友人のために、葬送剣舞を舞う。少しの間静かに見ていてくれないか」

「……葬送剣舞？ しかし、肝心の剣は？ 持ってきていませんが」

ダリーが疑問を口にした。

「剣はいい。代りのものがある。さあ、皆下がれ」

キルヴァが背を向けるとほぼ同時に、カドウサがカズスの肩より羽ばたいて、近くの樹にとまる。

皆も少し離れて、クレイの説教のもと、姿勢を正してキルヴァを見守った。

キルヴァはある方角を眺めて、腕を十字に交差して左足を引き、腰を折って深々と一礼した。

懐から蒼い鞘の短刀を一振り抜き、その鞘をいったん押し戴いてから、聖布を広げた上に置く。

もう一振りいつも持ち歩く短刀を抜き、こちらの鞘は地面に置く。両手に柄を握り、更に深く拝礼した。

そのままの姿勢でしばらく黙禱を捧げたのちに、ごく小さな声で申し述べた。

「我が古き良き友人、ジアに厚く感謝申し上げます。私の我が儘により、あなたには多大な迷惑と負担をかけたことをお詫びしたい。またあなたの親切に対して、なんの恩にも報えぬままあなたを失ったことが辛くてならない。なにより、あなたとの約束をかなえられなかったこと、とても残念に思うよ、ジア」

キルヴァは顔を上げ、「カドウサ！」と小さく叫んだ。カドウサはすぐにやってきて、キルヴァの肩にとまった。

「……見えるかい？ あのとときのヒナだよ。カドウサと名をつけた。はじめのうちは食べ物を食べないし、馴れなくて苦労したけど、いまでは私の友達だ。セグランも、いまここにはいないけど、なんとか元気でやっているようだ。……私も、頑張っているよ」

キルヴァは微笑んですつくと立った。カドウサが浅く飛び離れる。

「……本当は俺まで行きたかったのだ。だけど、あそこは私とセグランの秘密の場所にしようと思う。かまわないだろう？ 返事はいらない、たぶん、あなたのことだ、いいと言ってくれると思うから。だから、いまはここで許してほしい。ここに、私、キルヴァ・ダルトワ・イシュリーがあなたのために祈りを捧げる」
ゆつくりと、キルヴァは舞いはじめた。

大きな動作も、小さな動作も、指先まで丁寧に型が決められている。音は立てず、呼気も小さく整えて、きわめてゆるく、ひとつひとつの型を絶え間なく連ねていく。さながら川の流れるように。

風の形に袖が膨らみ、帯が揺れ、上衣の裾がたなびく。
高く立ち、低く屈む。

右腕は天を指し、左腕はまつすぐに、片膝を曲げて片足で一呼吸停止する。眼を瞑ったまま、まわる、まわる、まわる。

平伏し、すぐに宙を斬るしぐさで腕を大きく交差する。勝負とばかりに身構えて、一呼吸、前に出て、押し通す。

右に避け、左に避け、身体を捻りながら、短刀を縦に振りおろす。翻る袖。

舞いながら、キルヴァはジアの訃報をセグランより知らされたときの衝撃を思い出した。

ただ一度、少しの時間を共有しただけなのに、坊と呼んだあの老爺をとて好きになつていた。

思いもがけないほどの信頼を寄せていることに気がついたのは、何年も何年も経つてからだ。だから、再会を約束しながら果たせなかったことが悔しかった。そんなに離れているわけでもないのに、自由に出会に行けない身の上で恨めしかった。深い悲しみが、胸を衝いた。

キルヴァは葬送歌を歌いはじめた。

高低差に余裕のある深みのある声が樹木の梢を揺らし、爽やかに渡る風になり、高み高みへと流れてゆく。空の向こうへと、吸い込まれてゆく。

舞いと歌と祈りのすべてを、キルヴァはジアに送った。

その眠りが安らかであるようにと切に願って、キルヴァは静かに顔を伏せ、ふわりと軽い動作で膝を折り、短刀をそれぞれ鞘に戻して葬送剣舞を終えた。

突然、ごおつと突風が襲った。

ほんの一瞬のことだが、足元からすぐわれるような感触にひやりとした危険を感じ、キルヴァは身を屈めたまま顔を上げなかった。ややあつて、ひとつ肩で息を吐きながら立ち上がり、前を見てはつとした。

「王子！」

アズガルを除く全員の叫びが重なった。そして臨戦態勢をとる。

エディニイとクレイが正面を、ダリーとミシカが左右を、アズガ
ルとカズスが背面を固め、それぞれ武器を掲げてキルヴァを囲う。

頭上には鋭い鳴き声を進らせながら、カドウサが低く旋回している。
「ゆっくりと、頭を下げてください」

近衛長のダリーの指示に、だがキルヴァは従わなかった。

かぶりを振って、巖かに佇む。

正面にひと群れの天人がたむろしていた。

どのくらいの数だろう、正確にはわからないが三、四十天人もい
るだろうか。地上には誰ひとりとして降り立たず、僅かに宙に浮い
たまま、身を寄せ合うようにくっついてこちらを見ている。

色の濃度の程度の差は若干あれ、皆、金髪蒼眼で、すらりと背の
高い瘦躯に、ほとんど肌を露出しない袖も裾も長い白い衣を纏って
いた。翼の数はまちまちで、それぞれ異なっている。高く盛り上が
った白い翼を動かしている者はなく、きゅっと閉じたままじつとし
て、午後の陽射しを浴びている。

葬送剣舞（後書き）

この小話も好きですね。

湖畔、真紅の着物をまとい、短剣を手に、追悼の剣舞をひとさし。

ロマンだ……。

えー、次話は天人との対面の続きです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

風の天人（ソレイア・シャーサ）（前書き）

紅い軍神

と、サブタイトルをどちらにしようか迷った結果です。

この小話は色々な伏線が張り巡らされています。

風の天人（ソレイア・シャーサ）

不思議と、脅威は感じなかった。驚いたことに親近感が湧いてきた。指先から、熱いものが身体中を駆け巡る。

キルヴァは、ずっと待っていた運命にようやく巡り会えた、と思った。

だが、蒼い一条の傷痕を持つ翼の天人は、そこには見当たらなかった。

軽い落胆と共にキルヴァがふつと身体力を抜くと、それを合図としたかのように天人の群れはざあつと一斉に舞い上がった。巻き起こる風は螺旋を描き、ひと連なりとなって上空へと吸い込まれていく。

そして、その場にただひとりが残った。

金髪蒼眼、短髪、長身痩躯、色素は薄く、頬のこけた、少し角のある美貌、白い衣装、翼はたたまれているようで数はわからない。

だが、一目でステラではないことは知れた。天人にも性別があり、翼以外の肉体的特徴は人間とさほど変わらず、明らかに男性だった。「……おまえの歌に惹かれてね、皆集まってきたんだ。深く、伸びやかに響くいい声は、我らの好むものだ。これでも歌の出来の良し悪しには喧しくてね、おまえの歌は、悪くない。ひとにしちゃあ随分力強く歌に心を響かせている……ジアにも、きつと届いたことだろうよ」

キルヴァはエディニイとクレイを押しやった。

「皆、下がれ」

「危険です、王子」

「承服致しかねます」

エディニイとクレイが異を唱え、同調するように他の誰も離れなかった。

「いいから下がれ。彼は敵ではないと、言っているのだ。どうも私

の歌に惹かれてやって来ただけのことらしい。こんな機会は稀だろう、少し話がしてみたい」

「えっ。王子、天人の言葉がわかるんですか」

カズスが仰天の声を上げる。

キルヴァは「ああ」と応えた。

「少しな。王家の者の嗜み程度には、だが。わかつたら退け。離れるのに文句があるのだったらそこにいてもいい。ただ邪魔をするな」
不承不承、エディニイとクレイが脇に退く。

キルヴァは手を振り、もう二、三步下がらせた。それから天人に向きなおり、頭を垂れ、両手を胸において、そのまま掌を下にしたまま肘を伸ばし、脇へゆつくりと下ろし、左足を浅く引いてお辞儀した。

「我々流の挨拶か」

「間違っていたらすみません」

「いや、合っている。しかしひとの子とはいえ、一国の王子が腰の低いことだな」

「武器の矛先を向けた非礼のお詫びまでです。へりくだっているわけではありません。なぜ私のことを王子とご存知なのですか」

「ジアに聞いた」

「ジアをご存知なのですか」

「まあな。おまえの懐にあるその短刀、一方はジアが鍛えたものだろう」

「はい。何年も前にもらったものです。……いまとなっては形見になっただけでしたね」

「その柄の細工が納得のいく形になるまで苦労していた。何度もやり直していたな。いい加減に妥協しておけばよかろうと思ったくらい、しつこかったぞ」

「大事にします。そうか、ジアは私のためにそんなに頑張ってくれたのか。やはり最後に一目だけでも会っておきたかったな……あなたにはジアを看取ったのですか？」

「なぜそうなる」

「ふと思っただけです。不快に思われたのでしたらお詫びします」
天人の眼の中に一条の哀しみが揺れた。

「……看取るには看取った。ひとの子にできることなどなにもなかったが、ひとりで逝かせるよりはいくぶんましだろう。俺でも、いないよりは」

「ありがとうございます。少しほっとしました。ひとりで倒れて看取る者がいないなんて、孤独すぎる。あの小屋は山裾とはいえ奥まった場所にあるし、ひとが訪ねるとも思えない。私は友人からジアの訃報を知らされたのですが、その友人もそのときは遙か遠方の地にいたはずで、どうやってそのことを知りえたのかずっと不思議だったのです。あなたが教えてくださったのですね」

「死ぬ間際にひとつ頼まれたことがあった。俺はそれをかなえただけで、死の知らせはついでのようなものだ。……それにしても、おまえ」

「はい」

天人はキルヴァを凝視した。

蒼眼は不愉快そうでもあり、愉快そうでもある。間が合って、天人は顎を撫でるしぐさをしながら不意に翼をひろげた。

背後で気色ばむ気配がした。

それを片手で制しながら、キルヴァは翼が十枚あることを数えた。
十翼とは上位の天人だ。

最高が長の十三翼で、次が十二翼、その次が十翼だ。翼の数だけ力を保有する天人も、上位ほど数が少ない。二桁の翼の天人は滅多に人前には姿を現さない希少種だ。それなのに。

「不思議な奴だ。我らと対等に口をきくだけでもたいしたものだが、我らに対してまるで物怖じしないその資質はひとには珍しいぞ」

「あなたがそれを許してくださったからでしょう。あなたは私などいつでも殺すことができた。でもあなたはそうならなかった」

「我ら風の者は気まぐれだからな。おもしろければそれでいいのさ」

「私がおもしろいと？」

「っははは」

天人が短く、だがはつきりと笑った。しかし、彼自身意外だったようで、すぐに笑いをおさめる。それからばつが悪そうな顔で視線をさまよわせたあと、言った。

「自分を知らないとみえるな。おまえは相当な変わり種だぞ」

キルヴァは無言で肩をすくめた。

「俺を笑わせた褒美に、ひとつ、教えてやろう。俺はジアの頼みで、セグランというひとの子に、あるものを預けた。それは、おまえ宛のものだ。ジアはそれをおまえに渡すか渡さぬかの判断はそいつに任せると言っていた。さきほどおまえは懐の短刀が形見と言ったな。ということは、あれはまだおまえの手には渡っていないということだろう。機会があれば訊ねてみるがいい」

「……ジアが、私に？」

「そうだ。あれは、我ら天人とひとの運命を左右する力を持っている恐ろしいものだ。願わくば、おまえの手元には届かぬように」

「ではなぜわざわざ教えてくださったのです」

「気まぐれさ。俺はもう行く」

「またこうしてお話できますか」

「……おまえはひとの子としてはよく我らの言語に通じている方なのだろうが、いかんせん発音が聞き苦しい。まずそれを直せ」

言い捨てて、風の天人は大きく翼を上下した。次の瞬間には空の彼方に消えていた。

キルヴァはしばらく空の中を見つめていた。

この天空のどこかにステラがいる。

いつか、会える。

いつか再会の時が来る　ずっとそう信じていた。

だがやはり、現実はそのうまくはいかない。ジアに託していた一縷の望みをも断たれたいま、キルヴァは喪失感で満ちていた。ジアの死と、その死によるステラとの細い絆の断絶。

十年前のあの日は、なんて遠い思い出となったのだろう。

「……子、王子」

呼びかけに、キルヴァは追想から我に返った。ゆっくり振り返ると、全員が燦った表情でキルヴァの言葉を待っていた。クレイなどはいまにも質問攻めにかかりたそうに眼を血走らせて落ちつかない。である。

キルヴァは黙って懐から書状を取り出し、それを近衛長のダリーに差し出した。

「……これは？」

「今朝届いたばかりのセグラン・リージュからの書状だ」

「なにが書いてあるのですか」

「読んでくれ」

皆の手に順番に渡り、最後にカズスの手からキルヴァに戻された。キルヴァは丁寧な懐にそれをおさめてから、一同を見渡した。ダリー、ミシカ、エディニイ、クレイ、アズガル、カズス。誰の眼にも一部の恐れも見当たらない。これからキルヴァが言うであろう言葉をはつきりと予測して、それを受け入れるつもりなのだ。

「私は戦線へ赴く」

キルヴァは宣言した。びりつと、空気に緊張が漲った。

「セグランの知らせでは父上の負傷は軽いものらしいが、前線基地は壊滅的被害を受けたようだ。すぐにも補給と援軍が必要だろう。こちらに要請はいまのところないが、このたび私は要請がなくとも動く。おそらくそれは待つても無駄だろうから、準備が整い次第出陣する。皆もそのつもりで早速支度にかかってくれ」

「お言葉ですが」

と言ったのはミシカである。

「王の要請もなく勝手に動かれてはのちに軍規違反に問われることになるかと思われませう」

「私は待った」

キルヴァは静かに言った。額にかかった髪を無造作に掻きあげる。

「要請があつてしかるべき危機に名乗りを上げて、二度とも待機を命じられた。三度目をじつとしていくつもりはない。これ以上ただ黙って傍観していれば腑抜けの烙印を押されても仕方あるまい。それに私は成人してもう三年になる。二十一にもなる男がただ大勢の家臣の背に守られていたとあつては、我が祖先にも我が民にも顔向けできないだろう、違うか」

意気込んで、カズスが一步前に出る。

「俺は行きます。王子が行くなら行きます。どこでも行きます。絶対についていきます」

「頼む、カズス」

「いやだから、カズスだけに頼まないでくださいって。私だつて行きますよ、もちろん。私やカズスだけじゃない、皆も行きます、行くに決まっています。我々は王子の近衛です、王子の行くところ、たとえ奈落の底まで来いと言われても黙ってお供しますって」
クレイの言葉に異を唱える者はいなかった。ミシカも、もう反対しなかった。

キルヴァは頷いた。胸に温かいものがひろがっていく。

セグランと離れ、この十年、失ったものも多いが、新たに得たものもある。孤独を感じることもあるが、決してひとりではないということがキルヴァを勇気づけた。

「君たちがいてくれてよかった」

「任せてください。俺、いや、俺たち王子命ですから！」

どん、とカズスは胸を叩いた。笑顔は子供のように潑刺としている。

それにしても、と大きな声で彼は続けた。

「その姿、王子本当にお似合いですねえ。ほら、光がちょうど天上から斜めに射して　物語の英雄さながら立派で　まるで紅い軍神みたいですよ」

風の天人（ソレイア・シャーサ）（後書き）

書けば書くほど、キルヴァが好きになる。主人公に思い入れがあるのはやはり当然と言えば当然なのかもしれないが、彼は私がいままで書きあげてきた主人公のどれとも違います。たいしたことはまだなにもしていないのに、彼は、本当に王族。真正の王子です。引き続きよろしくお願いいたします。安芸でした。

要請なき出陣（前書き）

短いですが、次話と続けてお読みください。

要請なき出陣

セグラン・リージュから書状が届いてより六日後、補給物資等の支度を整え、キルヴァ・ダルトワ・イシユリーは第五領地とスザン国との国境線の前線基地へ向けておよそ一万の軍勢を率いて出立した。

リアストン暦九百九十三年、オーエンの月、第二十三日目のことである。

第五領地スザン国との国境は既に侵犯されていた。不意の奇襲に前線基地がやられ、一時退却を余儀なくされた結果である。

これ以上の越境を許すわけにはいかぬ、というデイレク王の指令のもとに即時対抗措置がなされた。それからまた膠着状態に陥り、いままた一触即発の睨み合いが続いている。

第四領地から駆けつけた援軍一万は、出兵要請がなされていないということ、はじめ受け入れを拒否されたが、再三の王子による王への嘆願により認められた。これに伴い、兵の増強、物資の補給、救助の本格化がいつぱんにすすめられ、一時敗色の色が濃かった情勢も持ち直すことになる。

要請なき出陣（後書き）

昨日は睡魔にやられて更新できずに寝てしまいました。
えー、次で、第二章終了です。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

辞令（前書き）

セグラン再登場です。

彼の横にやかましいのがついてきています。

辞令

セグラン・リージュは伝令役を務める二人に王命を伝えて送り出したあと、自分の天幕に戻って片づけを再開した。そこへ、見張り役の取り次ぎもなしに入口が無造作に開けられる。

「なあなあ、いまここから出て行ったとびきりの美人はどこ誰よ」「言いながら勝手に中に入ってきたのはジェミス・ウィルゴーで、赤みがかつた茶髪に琥珀の瞳、手足がひよろつと長く、それでいて線の細さを感じさせないという特異な容貌の男だった。

いつも変な恰好をしているのだが自分ではその自覚がなく、いくらかおかしいといっても聞き入れないので、周りの者もいちいち指摘するのを諦めて、最近では個性として認めようと誰もが口出しをやめていた。今日は緑色の丈の長い上着に黄色いズボンを穿いて紫色の腰帯を締めている。木の細工の飾り物を首から下げているが、形はなんともわからない。

「あんまりいい女だったからさ、ちよつと声をかけたら鉛玉をくらつたんだぜ。見るよ」

セグランはジェミスの掌の中のものを一瞥した。

「それは目潰し用の飛ばし玉です。あたったのですか」

「そんなにまぬけじゃない」

「それは残念」

「……おまえ、いま本心だったろう」

「彼女は王子の近衛です。下手なちよつかいはやめておきなさい」

「王子の？ じゃ、あれが“鉤裂きのエディニイ”か！」

“隠し武器使いのエディニイ”と言ってください

「どちらも同一人物だろ。あつ、じゃあまさか、その隣にいたのが

“難攻不落のミシカ”か」

「“不屈不拔のミシカ”と言ってください。なにがまさかなんです」

「だってあんな不細工な面の　危ねえっ!」

「物を投げるのはよくありませんね」

「投げたのはおまえだろうが!　しかも鉛の文鎮!　俺を殺す気が
っ」

「投げさせたのはあなたです。ミシカは不細工じゃありませんよ。

そんなことを外で言っでごらんさい、袋叩きにあうのはあなたです。私は一向にかまいませんけど」

「……おまえ、俺が嫌いだろう」

「否定しません」

「否定しろよ。おまえ冷たい、冷たいよ。俺はこんなに朝から晩までおまえにべったりくっついて奉仕しているのになんでそんなにつれないんだ」

「あなたは私に就くのが仕事なのだから黙って働いてください」

「おまえってほんと、顔に似合わずひと使いの荒いこと。耐える俺ってけなげだと思わないか?　って、うわ、なにその冷たいまなざし。全身で拒否されているな、俺……かわいそうだな、俺……」

セグランは黙って手を動かし続けた。

「あ、そ、無視かよ。だけどどうしてあの無骨な大女が男どもにもてまくる?」

「……ミシカを嫌う男などいませんよ。彼女と少しでも付き合えばわかることです。彼女ほど情に篤く優しい女はそうはいませんからね」

「その優しい女が言い寄る男を片っ端から振るのか?　男の純情なめているんじゃないの?」

「それは……彼女、口説かれてもわからないくらい恋愛沙汰に鈍い性分であるというだけで、悪気はないのです。まあだから難攻不落などと名誉だか不名誉だかわからない通り名がついてしまったのですかね……とにかくあなたは手を出さないでください」

ジェミスはにやにやした。

「やけに詳しいじゃないの。おまえそれ、牽制か?　ああいう女が

「好きなの？」

「ミシカは知人です。第一、問題は私の好みじゃありません。私が問題にしたいのはあなたです。あなた、年下から年上まで男女問わず見境なく手を出すでしょう。なんでもかんでも身体で解決してばかりで、始末に負えません。それでいったい何度ひどい痴話喧嘩に巻き込まれたことか。とにかく、私の身の回りの人間と、王子の身の回りの人間には手出しは許しませんよ。絶対にやめてください。もしこのことを守れないようであれば私も大人しくなどしていませんからね。いいですね」

「わかった、わかった、わかりました。ん、けど、なんで王子の間関係までおまえの守備範疇に入ってるの？ あれ、そういえば、おまえさつきからなにしてるわけ？」

「身辺整理です」

あつさりとセグランは答えた。

「さきほど王より正式に辞令を賜りました。私は今日付けで王子の配下に入ります。ここの整理がつき次第、王子のもとへ参ります。王子にもその旨をお知らせいたしました」

ジェミスは無言で手近にあった椅子を引きよせ、背凭れ部分を抱えるような姿勢でどつかと座った。しばらくセグランをじっと眺めて黙っていたが、ややあつて口を利いた。

「長かったな」

セグランはちよつと手を休め、ジェミスに視線をぶつけた。

「いや、たった十年で次軍師の地位まで出世したんだ、長くはないか。たいしたもんだよな。あのリユージェル・ダツファリーに認められるなんて、それだけでも大快拳なのに、王の信頼も篤いときてるおまけに王子とは懇意だし、まさに我が国の次世代の担い手 といふところかな」

「それは皮肉ですか？ それとも警告？ やっかみ、とは思えませんが」

「褒めているだけだろう。どうしてそう疑り深いんだ？ おまえ、

もう少し素直になれよ」

「なれません。あなたの前ではこれぐらいでちょうどいい。さ、ちよっと出ていってください。あなたとおしゃべりしていると作業がちつともはかどらない。私は今日中にここを片づけたいのです」

「へいへい。んじゃ、ちよっとその辺見回って来るわ」

ジェミスは片腕を浅く上げて出て行った。

セグランは彼の後ろ姿に一抹の後ろめたさを感じた。そう感じてしまう自分に、まだまだ甘いと感じる。

ここは戦場なのだ。内にも外にも敵はいる。用心するに越したことはない。

ましてや今日からは、自分ばかりか王子の身の安全にも気を配らねばならない。すべてのことに対して、いままで以上に細心の注意を払うのだ。

セグランは逸る気持ちを抑えた。抑えきれず、一言、呟きが口をつく。

「……………ようやくお目にかかれますね……………」

辞令（後書き）

これにて第二章終了です。

ありがとうございます。

第三章は、キルヴァとセグランの再会からはじまります。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

第三章 誰もがひとりでは生きられないということ 夜 (前書き)

区切りがいまいちだったので、この小話と次話は続けてお読みください。

第三章 誰もかひとりでは生きられないということ 夜

本隊と合流して四日目の夜を迎えた。

一日目は待機と嘆願、二日目は交渉と補給と怪我人の収容、三日目は合流し、隊の編成と実地検分、そして今日は周辺の視察と今後の戦略について各隊の指揮官が集まり意見を交わしあった。

体調不良を理由に王が欠席、その傍を離れられぬとの理由で軍師と次軍師も欠席、だが王子が出席したことにより戦略会議も無駄にはならず、それどころか、王子自ら頭を下げ、教えを請う姿勢を示されたため、かえって熱のいったものになった。

キルヴァのもとにその配属指令書が届いたのはその日の午後だった。

以下の者を本日付けで貴下の配下とすることを命ずる。

セグラン・リージュ、階級は次軍師。隊の副指揮官に命ずる。

そして末尾に王の署名と王印が捺されている。

これを持ってきたミシカの知らせでは、身の回りの片づけが済み次第来るとのことだった。

だが夜まで待ってもセグランは来なかった。

第三章 誰もがひとりでは生きられないということ

夜（後書き）

ときおり、ひとは、自分の身の丈以上の物語に手を出す愚を犯します。今の私がそうです。戦記だなんて、戦記だなんて、戦記だなんてええええ！

……おもしろければ、よいのですが。地味でも、ふつつつと、熱がこみ上げるような物語をお届けできれば、と思っているのですが。引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

十年目の再会（前書き）

私の方が泣けてくる……。

親しいひととの十年間の別れは辛い、つらいです。本当に、辛い。
再会の喜びも、ひとしおです。

十年目の再会

「少し外の空気を吸ってくる」

キルヴァはじっとしていられず、立ち上がった。

「お供します」

「俺も」

すぐさま応えたのはアズガルとカズスで、キルヴァは頷きながら長剣を腰に下げた。

「供を許そう。ついて来い」

「どちらへ？」

訊ねたのはミシカだ。半分腰を浮かせている。危険であれば止めるというしぐさだ。

「国境を見に行く。すぐ戻るがなにかあれば知らせてくれ」

「わかりました。お供は二人で大丈夫ですか」

「十分だ。カズス、青角灯をひとつ持ってきてくれ」

「持ちました」

「王子、お待ちください」

引きとめて駆け寄ってきたのはエディニイで、その手には黒いマントがある。

「風邪などひいては大変です。マントくらい羽織って行ってください。さあ、これでよろしいですね。外は風が強いのでお気をつけて。あんたたち、頼むわよ」

「ありがとう、エディニイ」

微笑むと、なぜかエディニイは一瞬怯んだそぶりをみせてから、表情を取り繕い、なにごともしなかつたかのように笑みを返してきた。

「いつてらっしゃいます」

「いつてくる」

外は確かに風が強かった。

見上げると上空を流れる雲の足が異様に早い。

「……嵐になるな」

「結構寒いつすね。マント着てきて正解じゃないですか」

「エディニイに感謝しないと。彼女は本当によく気がつくな」

「王子のことだけです。っと、いけね、喋りすぎ喋りすぎ」

カズスが慌てて口を噤む。

キルヴァにはよくわからない理由であたふたすることがカズスは最近まもある。訊いてもへたにごまかすばかりで埒が明かないため、追及そのものをやめることにした。

キルヴァは天幕の外で歩哨を務める者に「ご苦労」と労いの言葉をかけたあと歩きはじめた。

外は真つ暗で、月が雲に隠れているため尚更暗闇が深かった。

だがこの近辺一帯の山裾にはヒカリゴケが寄生しており、辺りはぼんやりと仄明るい。歩くには不便がなく、遠目からは見えない青角灯さえ手元にあれば道に迷う心配もなかった。

現在、前線基地はふたつにわかれている。

というのも、強襲に遭い国境線での敗北のため前線を下げざるを得なかったのだ。その際、軍師リユージェル・ダツファリーの指示でおよそ半分に編成がし直された。

負傷者と介護兵と護衛兵と、一方は無傷な兵と。

前者をゆるい勾配の山裾へ配置し、後者を反対側の急勾配の崖の上に配置した。真中は見通しのよい谷間で凹凸も少なく、陣を張るにはもってこいの広い空間がある。

キルヴァは崖の上から国境線を眺めた。

荒れる夜風が面を打つ。ここからは視界を遮るものはなく、国境線にいまも赤々と燃え立つ炎の柱が見えた。そして無数の夜営の光。それから視線を移して、こちら側を見た。平地野に無数の光。時折動く影があり、ざわめきがある。

カズスが辺りの気配を窺いながら言う。

「来ますかね」

「来る。私なら動く。補給や援軍があったことはわかるだろうし、救助と隊の再編成が済んだ頃だということもだいたいわかるだろう。ごたごたが片付き、その間にもない。この二、三日は気が緩む一瞬で、叩くならいまだ」

不意に、キルヴァの背後を護っていたアズガルが短刀を抜いて身構えた。ほとんど同時にカズスも振り返り、こちらへ近づいてくる気配に向けて剣を抜く。

「誰だ」

「そこにいるのは誰です」

双方の誰何が重なった。

キルヴァの前に人影が現れたそのとき、ちょうど雲が切れた。円月刀のような細い月が顔を覗かせ、白い幽かな月光が辺りを照らした。

キルヴァは息を呑んだ。

月明かりに浮かんだのは、よく知る者の顔だった。

「……セグラン……」

「……王子、なのですか？」

「え？ 王子？ 王子って、キルヴァ王子？」

聞き覚えのない第三者の声が聞こえたが、キルヴァの耳には入っていなかった。無意識にアズガルとカズスを下がらせ、闇に眼を凝らした。

また、月は陰る。

向かい合ったセグランがじれったそうに手元の青角灯を眼元まで掲げてこちらを様子窺いしている。

「王子」

おもむろにセグランが跪く。

キルヴァはかぶりを振りながら近づき、この邂逅にまだ呆然としながら言った。

「セグランか？」

「はい」

「顔を上げてくれ」

「はい……」

十年ぶりの、再会だった。

キルヴァは言葉を失って、ただ目の前の懐かしい顔を見つめていた。

十年前とあまり変わっていない。

次に会ったら、あれも話そう、これも話そう、と思っていたことがなにも言葉にならない。胸がいっぱいで、声が詰まって、身動きすらできない。

「ただいま戻りました」

代わりに、セグランが言った。

「これよりあとは生涯この命尽きるまでお傍を離れません」

「……立ってくれ」

「はい」

キルヴァは手を伸ばして、セグランの手を握った。

「よく戻ってきてくれた」

セグランは微笑んだ。キルヴァの知る、記憶の中のセグランそのままの笑顔だ。

「ご立派になられました。あまりに大きくなっていたのではじめわからなかつたくらいです。もう私とほとんど変わらないではありませんか」

「本当だ。目線が一緒だな。……これでもう、セグランを跪かせずにすむ」

言ってキルヴァはセグランの手を更に強く握りしめた。

「これからさき、いつも私の隣にいてくれ。もう私に跪くことはない。臣下でもなく、師でもなく、対等な友人として、決して私の傍を離れず、力を貸してほしい」

「……ありがたいお言葉ですが、私はこれでよいのです。友人など、畏れ多いことです。ですがあなたさまが許してくださいるのであれば、多少行き過ぎた振る舞いに出ることもあるかもしれませぬ。その際

は、どうかご容赦ください」

「あー。ほのぼのご歓談中ちょっとすみませんがー、そろそろ俺もご紹介願えませんかー」

キルヴァはそのときになってはじめてその男の存在に気がついた。

「そなたは？」

「はじめてお目にかかります。ジェミス・ウイルゴーと申します。

こいつの補佐と護衛を担当しています。このたびの配置換えで俺も一緒に就いて参りますのでよろしくお願いいたします」

「そうか。私こそ、よろしく頼む。キルヴァ・ダルトワ・イシュリーだ」

次いでアズガルとカズスを紹介しようとした矢先、突然伝令が飛び込んできた。

「奇襲です！」

キルヴァとセグランがほぼ同時に問い質した。

「数は」

「およそ千！」

「わかった、いま戻る。慌てず、申し合わせ通りに配置につくように各部隊に知らせる。行け！」

「はっ」

キルヴァはセグランを見た。

「どう思う？」

「奇襲とはいえ、少ないですね」

「二段構えか？」

「或いは三段かも知れません」

首肯して、キルヴァは踵を返した。アズガルとカズスが無言で従う。

「私は行く。セグランは」

「無論、私も共に参ります。もうお傍を離れないと、申し上げましたでしょう？」

そのとき、雨のはじめの一滴が落ちてきた。

低い雷鳴が彼方で轟き、遅れて鈍い雷光が閃いた。
嵐の中の迎撃戦のはじまりだった。

十年目の再会（後書き）

いよいよ、合戦開始です。

私も掌にはしんと拳を打ち込んで、よっしゃあ！やるかー！

と気合十分ですので、どうかお付き合います。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ノーヴァ戦争・一（前書き）

まずは、スザン軍の突撃よりどうぞ。

ノーヴァ戦争・一

真つ暗闇の中、スザン軍はイシュリー軍の谷間の夜営の灯を目指して突進した。

日暮れから前線基地を出立し、夜半にかけて奇襲の布陣を整え、完全に寝静まるのを待っての突撃である。

騎兵はわずか百騎、あとの九百は歩兵で、それぞれ剣と槍を振りかざし、雄叫びを上げて斬りこんでゆく。

だが氣勢も凄まじく乗り込んだ敵陣には一兵もなく、代わりに、無数の篝火と角に松明を括られた牛や羊、猪の群れがいた。

「なんだ、これは」

「牛だ、牛がいるぞ」

戸惑いのざわめきがひろがる中、眠りを妨げられた獣たちが異様な気配に興奮し騒ぎはじめた。そこへ、間髪おかず頭上から矢の雨が降ってきた。

「盾用意！盾用意！」

夜陰に伝令が飛び交い、すぐさま盾を掲げたので矢襲は難なく防いだ。こんなこともあるうかと全員が盾を携帯していたのだ。

しかし、野に放たれた獣たちはそうはいかない。ただでさえ興奮し右往左往しているのに加え、俄かに危険にさらされて、獣たちは狂ったように暴走をはじめた。入り乱れて行軍の真つただ中に突進したのである。

悲鳴が上がる。隊列が崩れる。折しも勢いを増した雨が視界の暗さに拍車をかける。

更に問題だったのは、スザン軍にとって牛は信仰の対象であり、すべての鳥と同じく、いかなる理由においても殺生が禁じられていた。

「回避、回避　！」

「牛だあ、牛がいるぞおッ」

思いもがけない戦法に出鼻を挫かれて、この襲撃の先鋒を指揮していたアレンジー・ルドルとゲオルグ・ニーゼンの両名は奇襲が失敗したことを悟った。

「敵がいけないのでは話にならん」

「本陣を攻めて左右の高所にいる奴らをおびき寄せるといっておまえの案はどうなったんだ」

「どうもこうもあるか。矢はどちらから降ってきた」

「左右両側」

「ということ、軍を二手に分けているということだ。おまえ、昼間のうちに偵察させただろ、どちらが登りやすい斜面だ」

「左だ。山裾がゆるい、明かりさえあればいけるな。まあこの雨で足場は悪いから多少愚図つくかも知れんが」

「おそらくそちらに負傷兵や補給隊がいるはずだ。怪我人に急勾配の崖を登れとは言えんだろうしな。だから主力は右にいる。ということ、おまえ、そっちいけ」

「どうして」

「若いからだ。若い者は若いうちに苦労しておけ」

「たった二つしか違わんだらう」

「若いことは若い。つべこべ言わずにとつと行け。深追いはするなよ、あくまでも谷に引きずり降ろせ。まあそれができなくとも谷

に目を向けさせておけばいい」

「適当に応酬しとく。じゃあな」

「とちるなよ」

「誰にものを言っている」

鼻で笑って、ゲオルグ・ニーゼンは叱咤の声を上げた。

「全員青角灯用意！ 獣なぞにかまうな。俺の隊は俺について来い！ ついて来られない奴は減給するぞー。知らんぞー」

いまいち迫力に欠ける指令だがそれがいつもの調子だったので、彼の部隊はすぐさま指示に従った。光を封じていた布を取り、腰に下げていた携帯用の青角灯を明るくした。少し辺りの様子が見え

る程度の視界を保ったことでやや落ち着きを取り戻し、指揮官を探したところ、本当に勝手に先に走って行ってしまったので慌てて後を追う。

アレンジー・ルドルは馬首を左に方向転換した。

「全員青角灯用意！俺の隊は俺について来い！ついて来た奴にだけ報償やる。頑張ったらもつとやる。やるったらやるぞー。稼ぎたい奴はとつと来い。あ、動けない奴は帰れよ。あとで見舞金やるから無理するな。人間命あつてのものだからな」

こちらの指令もいつも通り明確だったので、彼の部隊も態勢の立て直しは早かった。怪我人は帰還し、それ以外は報償目的もさりながら、彼らの指揮官の身の上が心配で急ぎついていった。

スザン軍の士気はまるで衰えなかった。

スザンの名だたる豪傑三名のうち二名がこの場において指揮を執っているのだ。闇夜も嵐も恐ろしいものではない。後れを取ってこの両名になにかがあつてしまうことだけが恐ろしい。

いま、スザン軍千名の突撃隊は半分にわかれた。

ノーヴァ戦争・一（後書き）

息継ぎ、息継ぎ。

緊張して、苦しいです。

恋愛もので、あまーく、ばたばたと展開していくものも好きですが、神はくやこの天人くのように、硬質で凜とした姿勢の物語も好き。ギアが入れ替わります。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ノーヴァ戦争・二（前書き）

乱戦です。

キルヴァが凜として格好いいです。成長したなあ。ほろり。

ノーヴァ戦争・二

この有様を崖の上からキルヴァは見ていた。矢かけの攻撃をもととせず、鬨の声を響かせながら、土砂降りの雨の中こちらに向かってくる。

一際激しい稲妻が天地を一瞬白く染める。神々の咆哮のような猛々しい雷鳴が耳を打つ。それにも負けじと重なる人馬の唸り。

キルヴァはじっと待っていた。ぎりぎりまで待つ、それから一気に動くのだ。

また頭上で稲妻が閃く。どこかへ雷が落ちた。

キルヴァの手が持ち上がる。傍にいた面々に緊張が走る。

その手が振り下ろされる。

キルヴァは鋭く叫んだ。

「開始！」

イシュリー軍はキルヴァを先頭に山裾の側面を一気に駆け下った。闇夜の中、ゆるいとはいえ崖であり、それも雨に濡れて岩肌は滑りやすくもろくなっている。

そんな悪条件にもかかわらず、キルヴァは愛馬の本能に任せつつ巧みに手綱を操り、崖の上にいる味方の精鋭五百騎全騎を率いて谷間に降り立った。

「構え！」

疾風の如くすぐさま隊列を整え、一斉に弓矢攻撃に移る。

「射よ！」

次の瞬間、地上から放たれた大量の矢の雨が崖の上のスザン軍に降り注ぐ。

アレンジー・ルドルは完全に意表を突かれた格好となった。

「おいおい。退くか、ここで。非常識な奴らだなー。にしても、ずいぶん機敏じゃねえか。おかしいな、こっちに負傷兵や補給隊がいるはずなんだが。それにどう考えても頭数少なえよなあ。こりゃあ、

どっかに主力を温存してやがるなあ。さあて、どうするか……しかし、予定くるいまくりだな。奇策にハマリ、谷底は無人、優位に立てる崖上は放棄、機動性は抜群、主力は姿が見えず、で、この天気。こりゃあ、こっちの奇襲を見越した迎撃戦だろ。うおっ、下から矢かけかよ。あー、回避、回避。いやいや逃げ場はねえか。じゃ、せっかく登ったのになんだが、降りるか。どっちみちこのまじゃあこっちの本軍と鉢合わせだしな。まあ、予定とは違ったが、結果は同じならよしとするか。おい、合図だ、笛吹け、笛。突撃させる。奴ら挟み撃ちにしてやる。おーい、おまえらー、降りるからついて来い」

間延びした命令を下すのと、一気果敢に崖を駆け降りるのが同時だった。

アレンジー・ルドルはいつもながらに自軍の戦略の甘さを痛感していた。

あまり認めたくないことだが、実際の戦闘には参加しないスザン軍の軍師らは、平気で机上の空論を叩きつける。理論上は筋が通っているのだが、実際にその通りに事が運ぶわけがない。それでもスザン国が内政、外交、戦闘いずれも他国と五分に渡り合っているのは、現場の人間の努力の賜物によるもので、こと戦闘にいたっては、指揮官である人間の器量が作戦を上回るといふ幸運によるものだ。故に、敵方の戦略や敵将の力量次第では、いくらでも負け戦となりうる危険が常にある。

それはもしかしたら、いまこのときであるかもしれない、とアレンジー・ルドルはふと思った。懸念であればいいが、と自らに言い聞かせながら。

そもそも、スザン軍の戦略では、まずスザン軍奇襲部隊千名が敵の本陣を突く。そこでイシュリー軍との乱戦に持ち込み、おそらく待機しているはずの高所からの矢攻撃を牽制する。イシュリー軍は高所に配置した人員を援軍として本軍に加勢させるはずで、そうなたあと、後詰めのスザン軍の突撃があり、形勢逆転、更に、峠を

ひそかに侵攻していたスザン軍の本軍が、夜明けとともに戦闘終了。そういう筋書きであったのだ。

しかしこのたびの戦は、はじめから躓いている。

そしていままた、新たに予期せぬ展開をくらった。

「おいおい、ちよっと待て。なぜ逃げる。まだ戦つてもいない」
イシュリー軍はアレンジの部隊が崖を下つて来た瞬間に敵前逃亡を開始した。その鮮やかな逃げっぷりはあつという間の出来事で、暗闇の中では視認は不可能だったが、遠ざかる馬蹄の轟きがそれを証明した。それも内奥に消えていった。

アレンジの部隊は谷底に再び取り残された。そして少し離れた位置ではゲオルグ・ニーゼンも同じ憂き目に遭っていた。

「……なんだなんだ、奴らこの一帯の権利放棄かあ？俺たちの戦わずして勝利。あ、しまった。そういうことか。まずい。こりやまずい。まずいまずいまずい」

イシュリー軍が姿を消した方角と真逆の谷の入口方面から、突如としてものすごい喚声上がり、地軸をも震わすような馬蹄音と足音、甲冑の擦りあう音が谷間を埋め尽くし、鈍くかすかに光る青角灯の束が一気に押し寄せてきた。

後攻めを担う、スザン軍の突撃部隊である。

止める間もなく、突撃の渦に巻き込まれる。

谷間に潜んでいるのがイシュリー軍に一杯食わされて放置された味方とは知らぬスザン軍は、雄叫びと共にそのまま突っ込んできたのだ。

闇と雷雨が災いした。

それからいまだそこらをうろつく獣の群れが混乱に拍車をかける。場は瞬く間に凄惨な修羅場と化した。あちこちで血飛沫が舞う。

狭い谷間はすぐに血の臭いが充満し、雨に流されるどころか荒れ狂う風に乗れ、逃げ惑う獣や馬の嗅覚を刺激してより興奮させ、ぐずった鼻音や警戒と恐怖の鳴き声を漏らしつつ右往左往させた。

「やめろ！ 待て、待て、待て！ 同志討ちだ！ 同志討ちだ

「！」

アレンジューは声を限りに叫び続け、自身に振るわれる剣や槍のことごとくを右へ左へと受け流し、自ら戦闘停止の角笛を吹き鳴らし続けた。

だがそこへ、いつのまにか方向転換したイシュリー軍が怒涛の迫撃をかけてきた。

「突撃、突撃　　！」

「狼煙を上げろ！　援軍を呼べ！」

「いまだ、いけいけいけ　　」

左右の崖に二手に分かれていたイシュリー軍はいまや合流し、千騎一丸となってスザン軍に襲いかかった。

その統一された的確な行動、勢いたるや凄まじく、ばたばたと次から次へ斬り伏せられてゆく。

更に、計ったような間合いでスザン軍の突撃隊の背後からイシュリー軍の援軍が現れ、混乱し態勢の整わぬスザン軍を挟撃した。

スザン軍が目論んでいた展開そのままをイシュリー軍は実践してのけた。

夜襲攻撃そのものが失敗し、いまや圧倒的優位でなくなったスザン軍は地の利において苦戦を強いられ、急襲に遭い心理的にも威圧され、また天候の悪化と逃げ惑う牛の群れに翻弄され、まったく戦隊の統一がとれないまま、激しい乱戦に突入した。

だがいつまでも力と力の押し合いをするつもりはイシュリー軍にはなかった。

いまのところ攻防は互角以上にこちらに有利に働いているようではあるが、もともとの兵力に大差があるのだ。このままではいずれ力負けする。そしてそれを悟られないよう、なんとか朝までしのがねばならないのだ。

ノーヴァ戦争・二（後書き）

実は、白兵戦を描くのは嫌いじゃないです。ただ、苦しいだけ。ええ、苦しいだけです。剣戟、戦術、兵法。戦記ものは課題が多い……！引き続きよろしくお願いいたします。安芸でした。

ノーヴァ戦争・三（前書き）

最近のお気に入りはアポロチョコ。なぜかクジつき。まだハズレオンリーですが……。いえ、書くのにチョコレートは必須アイテムという余談でした。

ノーヴァ戦争・三

ざあざあと雨が降りしきる中、鈍く余韻を引いて法螺貝の音が戦場に鳴り響いた。

白兵戦では滅法強い英傑の二人、アレンジー・ルドルとゲオルグ・イーゼンは新たな加勢を覚悟した。相手の策に嵌まるかたちとなつてしまった戦いだったが、挟撃されて苦戦はしていても、負ける心地はしなかった。

ぶつかり合いの感触で、兵力を温存しているのでは、という疑いの気持ちがふくれあがったのだ。そこへこの笛の合図である。

ところが、起こったことはまったく別のことだった。

イシュリー軍は谷の入口と谷の内奥の二手に分かれて遁走を開始した。

たつたいままで斬り結んでいた相手が唐突に剣を退き、脇目も振らず身を翻して逃げ出したのだ。追う者、取り残される者、安堵する者、呼び返す者、均衡を失って倒れる者、啞然とする者、スザン軍の反応はまちまちであった。

「やられた」

ゲオルグ・ニーゼンは感嘆もあらわに呟いた。彼にはこの先の展開が読めた。いま一方的に緊張の糸が断たれ、置き去りにされた兵士らは多くが集中力を途切れさせ、弛緩した状態である。この隙を突くのだ。

「おまえらー油断するなー。また来るぞー。うとうと寝ていると減給するぞー。俺の近くにいた奴はこっちに来い、近くにいない奴は適当に周りの奴らとつるめ、固まって攻撃に備えろー早くしろー」
指示が終わるか終らぬかのうちに、再びイシュリー軍が攻めてきた。

同じことがこの夜いくたびか繰り返され、スザン軍は精神的に疲弊した。

この策に応じるには、戦力にものを言わせるのが一番効果的だったが、主力は崖を占拠するため侵攻中である。

この場は我慢比べしかできない。どちらが先に斃れるのか、結束と胆力が勝敗を分けるだろう。

「……さすがだな」

セグランはキルヴァを守りながら戦いの輪の外で主にはぐれ兵のみを相手にしていた。全体の力の拮抗を見極め、退いては取って返し、退いては取って返しの戦術を用いたのだが、やはり容易には崩れてくれない。敵もさるもの、何度かの応酬でじたばた足掻くのをやめ、迎撃に出た模様である。

雨足が弱ってきた。

とうに雷雲は過ぎ去り、雨もじきにやむだろう。間もなく夜明けだが、まだ一バーツ以上もある。おそらく左右の崖上には既にスザン軍が陣取り、弓矢部隊が配置され、明るくなると同時に攻撃に移るに違いない。

「知らせはまだか」

キルヴァがセグランの胸中を計ったように口をひらいた。

「まだです」

「遅いな」

「焦ってはいけません、王子。必ず来ます」

「焦ってはいないが、このままでもいけないと思う。そろそろこちらの思惑も気づかれることだろう。夜明けを待っているのがあちらだけではないと、誰かが気づく頃だ。ここは、私が討って出よう」

「それはいけません」

セグランはびっくりして制止した。

「鬨の声が、一か所すごく大きいところがあるだろう。たぶんあそこに剛の者がいる。確認したところではアレンジー・ルドルとゲオルグ・イーゼンという豪傑が二人参戦しているそうだから、そのどちらか、或いは両名がいるのだろう。いって、お相手を願おうか」「危険すぎます、おやめください」

「じつとしていては返り討ちにあつ。私が行けば、私に眼が向く。ちよつとした時間稼ぎくらいにはなるだろう。うまくいけば、どちらかひとりでも捕虜にできれば、交渉の切り札にもなる。大丈夫、無理はしない。第一私はそんなに強いわけではない。セグランはここに残つて合図があるかどうか引き続き見張つていてくれ。ジエミス、セグランを頼む」

「はっ」

「私だけ残るなんて、そんな！ お供します」

「軍師は戦いの渦中に行くな。セグランは私の軍師なのだからなにかあつては困るのだ。それに、私はひとりじゃない。ダリー、どうだ」

ダリー・スエンディーの返答は簡潔だった。

「ひとりはお任せください」

「頼む。ミシカ、どうだ」

ミシカ・オブライエンの返答は正直だった。

「技量はともかく、力負けしそうです。援護が欲しいところですね」
「私が援護しよう。アズガル、カズスは私の守りに入れ。クレイとエディニイは私たちの戦いを邪魔する者を阻め。よいか、目的は仕留めることじゃない。適当に相手をし、できれば身柄を確保すること、無茶はするな。夜明けまでもてばいいのだ」

アズガル・フェイドとカズス・クライシス、クレイ・シユナルツアーとエディニイ・ローパスはそれぞれ了解した。止める者はいなかった。どうしても戦わなければならない時があることを、全員が知っていたのだ。

キルヴァは抜剣した。細身で切れ味鋭く、重みといい、長さといい、手にしっくりくる優れものである。

「案ずるな」

と、セグランに一言向けて、キルヴァはすぐさま愛馬バレンジーレの手綱を胸元に手繰り寄せた。そして果敢に叫んだ。

「突撃！」

ノーヴァ戦争・三（後書き）

キルヴァは口で言うほどおとなしくしていません。周囲の者は大
変だろうなあ、と思います。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

ノーヴァ戦争・四（前書き）

だらだらと書いているわけではありません、ええ、決して。
天人は情景描写が結構多いので、ちょっと短めに掲載しています。

ノーヴァ戦争・四

キルヴァを中心に守りを固め、七名は一系乱れなく戦闘の最中に分け入った。腰に下げた青角灯の鈍い小さな明かりのみを頼りに、かかってきた敵兵を行儀よく片づけていく。

だが、「派手にいこう」というキルヴァの指示のもと、六名に異存はなかった。

「退け、退け　！」

ダリーは問答無用で斬りかかってくる白刃を一閃し、馬上から強烈な蹴りを繰り出して前にいた兵士二人を斃し、道をあけると、声高に名乗りを上げた。

「我が名はイシュリー国第四領地領主直属近衛兵長ダリー・スエンデー！ “戦場の黄姫”とは俺のことだ。名を上げたい奴はかかってこい」

「同じくイシュリー国第四領地領主直属近衛兵副長ミシカ・オブライエン！ “不屈不拔のミシカ”とは私のことだ。かかってくるなら女と思つて甘く見るな」

「同じくイシュリー国第四領地領主直属近衛兵エディニイ・ローパス！ “隠し武器使い”もしくは“鉤裂きのエディニイ”とは私よ！ さあ、美人に葬られたい男はだあれ？」

「えー、同じくイシュリー国第四領地領主直属近衛兵クレイ・シュナルツァー！ あんまり嬉しくないですけどねえ、恰好よくないんですよねえ、“百変化の影法師”とは私のことです。手加減は得意じゃないので心置きなく死にたい方のみかかってきてください」

「同じくイシュリー国第四領地領主直属近衛兵カズス・クライシス！ 誰がつけたか知らないが“潰乱の疾風”は俺だ！ みんなまとめてかかってきやがれ！」

「同じくイシュリー国第四領地領主直属近衛兵アズガル・フェイド。“屍を積む男”或いは“黒き死神”、“戦渦の申し子”、いずれも

俺だ。来るなら来い、容赦はせん」

闇夜に響いた声明は劇的なざわめきをあちこちにもたらした。

「オウキ、センジヨウノオウキ、って、あの“戦場の黄姫”か？

嘘だろ？ 奴はもう十年以上前に北の戦場で死んだって聞いたぜ」

「……ミシカ、って“難攻不落のミシカ”じゃないか？ 滅法強く
て誰にも落ちないって噂の」

「“黒き死神”だと？ 冗談じゃない！ あんな化け物の相手なん
てできるわけがねえっ」

「ちよつと待てよ、カズスってフェスタルザ “宿命者”じゃね
えの？」

「エディニイ！ 会いたかったぜ！ あんた美人で強くて激しいん
だってな！ ぜひ俺様のお相手を願おうか！」

「“百変化の影法師”って聞いたことがあるぜ。神出鬼没、変装の
名人で、隠密の達人。名うての賞金首じゃねえか。って、まさか本
物？ え、顔見せる、顔！ 誰か、灯りを寄こせ！」

谷間は新たな混乱に満ちた。

脱兎の如く逃げる者、こそこそ避難する者、果敢に挑む者、報告
に急ぐ者、手当たり次第にかかってくる者、大慌てで行く手を阻む
者、それらを貪り食うように蹴散らしていく。

力技で攻めるとみせかけて多種多様な攻撃を仕掛けるダリーに、
変幻自在の剣筋で相手を翻弄するミシカ、眼潰し、喉潰し、針指輪、
全身武器で戦う小技のエディニイとのらりくらり緩慢な動きに徹し
ながらも確実にあらゆる人体の急所を攻めるクレイ、力で押し伏せ、
技で勝り、誰よりも素早い身のこなしのカズス、その一切の行動を
音もなく実行しあとに屍の山を築くアズガル、彼らが一丸となった
突撃を阻める者などいなかった。

「押し通る！」

キルヴァが一喝する。

悲鳴がこだまし、血飛沫が四散する。逼迫する鬨の声、重なる絶
叫。弧を描く白刃、突き出される切っ先、振り下ろされる剣、受け

止め、薙ぎ払われる小さな盾、乱れる馬蹄、足音、繰り返される怒号、風は血を含み、ぬかるんだ土にどうと倒れてゆく兵士たち。

凄絶な展開だった。

功名心を巧みに煽りたてながらの戦術は功を制した。自らの力量を見誤った兵士は熱狂的に参戦し、そして散った。

そこへ、味方の制止の手を振り切つて、アレンジー・ルドルとゲオルグ・イーゼンの二騎が破竹の勢いで現れた。ずぶ濡れであろうに、その甲冑に包まれた身体からは白い熱気の湯気が噴き上がっているのが闇の中でもうつすらと見て取れた。

並みの胆力ではその風格に気押されて思わず平伏するところであるが、名乗りを上げた六名は並ではなかった。ようやく骨のありそうな武人の登場にいっそう戦意を高めるくらいだった。

「灯りを持ってーい！」

ゲオルグ・ニーゼンが命じると次々に青角灯が掲げられた。

その中に浮かび上がった不敵な面々を眺め、睥睨し、血気に逸る馬を抑えながら、中央の人物に眼を据えた。

「そちらにおわすはどなたか」

キルヴァはすぐに切り返した。

「私から名乗るつもりはない」

「なるほど。ではこちらから。我が名はスザン国第二部隊指揮官ゲオルグ・ニーゼン」

「スザン国第一部隊指揮官アレンジー・ルドル」

「勇名は聞いております」

キルヴァはひとつ頷き、二人に比べては静かに名乗りを上げた。

「私はイシュリー国第四領地領主並びにイシュリー国次期王位継承者キルヴァ・ダルトワ・イシュリー」

「王子殿か！」

「いかにも」

「ずいぶん手練を揃えているなと思えば……なるほどねえ……イシュリー国の後継ぎは噂に名高い人たらしと聞いたが、満更誇張で

もなかつたわけだー」

「よしよし、相手に不足なし、と。では参る！」

やにわに、アレンジー・ルドルは攻撃に出た。前へ踏み込むと同時に無造作に構えていた幅広の剣を抜くように突き出す。

まっすぐにキルヴァの首を狙った一撃は、だが、前に躍り出たダリー・スエンディーの剣にて一蹴された。

斜めに受け止めた刃を横に流すように撥ねのけて、ダリー・スエンディーはアレンジー・ルドルと対峙した。

「貴殿の相手は俺だ」

「そうか。では、お相手願おうか！」

ミシカ・オブライエンはゲオルグ・ニーゼンの前に進み出た。

「貴殿の相手はこちらだ」

「……女傑と、あと王子殿にお取り巻き方々、か。多勢に無勢、ありがたいねえ。それだけ俺の首が高くつく、とわかっているということにしておくか」

ひゅっ、と鋭い唸りが生じると同時に繰り出された斬撃を難なくかわして、ミシカ・オブライエンは反撃に出た。

夜明けまで、あと三十八イト。

ノーヴァ戦争・四（後書き）

さて、見せ場。というところで、ぶつぎる私……続きはまた明日にでも。

この地味で決して軽いとは言えない物語におつきあいくださる皆様に、感謝をこめて。ありがとうございました。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

ノーヴァ戦争・五（前書き）

黄姫、オウキ。この読み仮名はお気に入りです。

ノーヴァ戦争・五

時が流れる。

ダリー・スエンディーとアレンジー・ルドルの一騎討ちは音高くはじまり、いつまでも続いた。剣戟が十合、二十合、三十合、四十合という具合に延々と繰り返された。斬り結び、撥ねつけて、押しあいながらめぐるしく立ち位置を変え、ぶつかり合う。

実力はほとんど拮抗している。

英雄同士の戦いとはかくあるものだ、というべく激しく高度な衝突の応酬に、先に馬の体力が尽きそうであった。

「さすがだな、戦場の黄姫！」

「貴殿こそ噂にたがわぬ腕前だ。どうだ、ここは広い心を示して俺に負けてはくれまいか」

「断る」

喜々としてアレンジー・ルドルは答えた。薄暗闇の中での表情は潑刺としている。

「久々に手ごたえのある相手と巡り会えて嬉しいぜー。あー愉しいな、っと！」

一方、ミシカ・オブライエンとゲオルグ・ニーゼンの攻防は精緻を極めていた。

腕力で劣るミシカ・オブライエンの剣がゲオルグ・ニーゼンに圧されれば、すかさず脇からキルヴァの一手が繰り出される。ゲオルグ・ニーゼンがこれを弾き返せば、すぐさまミシカ・オブライエンの強烈な一撃が見舞われる。

ゲオルグ・ニーゼンは数々の修羅場を潜り抜けてきた歴戦のつわものであったが、これほどまでに息の合った二人がかりの攻撃に遭ったのははじめてのことだった。それもどちらも十分に手強い器量を持ち合わせているので一瞬たりとも油断できない。二人共を相手にするのは得策ではないのでどちらかひとりやっつけてから、

と思いきや、キルヴァの振る舞いがそれを許さなかった。ミシカ・オブライエンを狙えばキルヴァが全力で攻撃にかかってくるためそれは容易ではなく、そうかと言ってキルヴァを狙えば、ミシカ・オブライエンだけでなくカズス・クライシスとアズガル・フェイドが絶妙に護り手にまわる。

ゲオルグ・ニーゼンは乗馬をぶつけてきた。ミシカ・オブライエンは手綱を引き、馬を棹立たせて方向を変えこれを避けた。わずかに体勢が揺らぐ。ゲオルグ・ニーゼンの剣がミシカ・オブライエンの首をめがけて水平に薙ぎ払われる。キルヴァはほとんど真後ろからゲオルグ・ニーゼンを襲う。心臓を狙った渾身の突きは紙一重の差でかわされ、ミシカ・オブライエンの首は宙を舞うことなく、ゲオルグ・ニーゼンの刃は空を斬った。

「きりがないな」

ゲオルグ・ニーゼンは懺然として言った。

「おとなしく負けを認めてくれてもよいぞ」

ミシカ・オブライエンは剣戟戦に移りながら囁いた。

「ほざけ」

「一対一なら私の負けだろうが、後ろにこの面子が揃っていても私の負けはない。潔く我が軍門に下るがいい」

「いくら難攻不落のミシカの哀願でもそれはちよつときけないな。なにせ、まだ給料未払いの部下が大勢いるものでねー。俺がいなくなると暴動が起きてしまう」

恐ろしい速さで重ねられた刃と刃が結ばれる。ゲオルグ・ニーゼンとミシカ・オブライエンは額を突き合わせて対峙した。周囲は薄明るくなりはじめ、ぼんやりと互いの輪郭が浮き上がってゆく。

「間もなく夜が明ける。それを待っているのだろうか？」

「それはそちらも同じこと。矢攻めにするつもりだな」

「さあて。どうかな。っと」

キルヴァは取り出した短刀をゲオルグ・ニーゼンの兜めがけて投げつけた。避けられる。だがミシカ・オブライエンが押し負けるこ

とはならなかった。

「ゲオルグ・ニーゼン殿」

キルヴァは二人が適当な距離をおいた一瞬を逃さなかった。よく通る声で、ミシカ・オブライエンの次の行動に制止をかける。

「拝見したところ、あなたは優れた指揮官であるばかりでなく、部隊の信頼も篤い、好かれた方の方のようですね」

「……なんだつて？」

「統制も取れていますし、命令違反もない。あなたの言うことを皆よくきいています。あなたの危機にはいつでも身を投げ出して庇いそうだ」

「それは行き過ぎだ。愚直な行為そのものだ。俺は好かん」

「でもやるでしょう。そういう気配です。皆あなたのことを本気で心配しているようです」

「命のやり取りの最中におかしなことを言わないでくれ。気が削がれる」

「どうでしょう。もし私と一緒に来てくださいとお願ひしたら叶えてくれますか？」

「……それは、捕虜になれということか？」

「違います。どうか、私の味方になっていただけませんか」

「正気か！」

「正気です」

「本気か」

「本気です」

「無理だ」

「なぜです？」

「なぜもなにも、敵同士だろう、俺たちは！」

完全に気を乱されてゲオルグ・ニーゼンは攻撃の手を休めていた。これが心理攻撃の類でないことはキルヴァの真剣な声の調子でゲオルグ・ニーゼンにもわかったのだ。

「私の敵はあなたではなく、スザン国です。我が国を戦に巻き込み、

領土の侵略に乗り出した国主です。その命に従う立場にあるだけのあなたではありません。だからもしあなたさえ私を信用して味方になってくださるといふのであれば、私はとても嬉しい。あなたは我が国にとつても、私にとつても、素晴らしく頼もしい騎士のひとりとなつてくださるでしょう」

「俺に国を、仲間を裏切れと言うのか」

「国は、そうです。ですがお仲間はその範疇にありません」

「どういうことだ」

「あなたの部下もその家族も友達も知人も恋人も皆連れてきてしまえばよいのです。歓迎致します。本当です。なにも心配いりません、私が守ります」

その場にいたすべての者が絶句した。

我知らず、ゲオルグ・ニーゼンは静かなるキルヴァの迫力に気圧されていた。

周囲の彼の部下はひとり残らず固唾を呑んでこの成り行きを見守っている。

「……なるほど。あなたが人たらしと呼ばれる所以がわかりましたよ……いやいや、参りました。つい誘惑に負けそうになりました」

ゲオルグ・ニーゼンは柄にもなく微笑した。自然と口調が改まる。「せっかくですが、お断りします。俺は既に我が祖国に二心なき忠誠を誓った身です。それはできないことです。しかし困ったことにいまはもう……俺にはあなたを攻撃することはできそうにない……」
言つて、ゲオルグ・ニーゼンはおもむろに剣をひいて鞘におさめた。

そのとき、東の彼方に夜明けの曙光が射した。

金色の光が扇状に地平を染め、地上に瞬く間に明るさが満ちてゆく。

「夜明けだ……」

ノーヴァ戦争・五（後書き）

更に、続きます。次回、か、次次回は、スペクタクル描写にのたうちました場面です。脳内映像を、文章に。どれだけ表現できるか、自分との勝負ですね。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ノーヴァ戦争・六（前書き）

カドウサの見せ場？ です。

鳥は天人の使い、ということ、とても神聖な生きものなのです。

ノーヴァ戦争・六

長い夜の終焉を告げる光の鐘は雨上がりの清々しい風と共に場を照らした。

そこにひろがっていたのは戦争の生々しい爪痕そのもので、夥しい死傷者の姿がゲオルグ・ニーゼンの立場や役目、務め、目的といった現実を叩きつけた。

「……だがこのまま引き下がるわけには参りません。御身を預からせていただきましょう」

ゲオルグ・ニーゼンはすっと片手を上げた。

それを合図として、峠に予定通り陣取った味方の本軍が現れる。最前列に整列した弓矢部隊は全員弓に矢をつがえ、攻撃指令を待つのみ態勢であった。

だが、この窮地に動ずることなく、キルヴァはまったく別の方角を眺めていた。

紅と黒の二筋の狼煙が上がっている。

先にそれに気がついたのはダリー・スエンディーをどうしても攻略できずに互角勝負のまま朝を迎えたアレンジー・ルドルだった。

「なんだ、あの叫びは」

「ム王子ご落命！ タルダム王子ご落命！ タルダム・ヨーデル・スザン王子ご落命　！」

「なんだと」

「ご落命！ タルダム王子ご落命！ タルダム・ヨーデル・スザン王子ご落命　！」

「全軍至急帰還せよ！ 全軍至急帰還せよ！」

ゲオルグ・ニーゼンはアレンジー・ルドルとの距離を詰めてそつと耳打ちした。

「どういうことだ」

「わからん。わからんが、あれはスザンの伝令馬に間違いない。タ

ルダム殿下はお亡くなりになられた……襲撃に遭い、打ち滅ぼされたということなのだろう」

アレンジー・ルドルはキルヴァの傍まで馬を進めた。さりげなくキルヴァの周囲をダリー・スエンディーを筆頭に他五名の近衛が囲って防衛態勢を整えている。

「こちらが陽動だったのか」

「はい」

「負傷者や補給隊が見当たらないが、どうした」

「谷には無数の横道があります。そこに隠しました。ここにいるのは少数精鋭の私直属の機動部隊のみです。あとはすべての兵力を本軍として集結させ、国境線の前線基地奪回のためあちらに向かいました。私の役目はあなたがたを迎撃し、夜明けまで足止めすることでした」

伝令の決死の叫びが徐々にスザン軍に浸透してゆく。

急速にざわめきが大きくなり、混乱の様相を呈してきた。

だがアレンジー・ルドルとゲオルグ・ニーゼンの両名は微動だにせず、二人ひとつの彫像の如く頑なな姿勢でキルヴァとじっと睨みあっていた。

「このまま我々がおとなしく退くと思うか？」

「せめて一矢なりとも報いねば殿下の無念は晴れまい。そう、たとえば御首をちようだいでできれば帳尻が合うというもの」

「首でなくとも、死の奏上でもかまわんさ。弓矢部隊、攻撃用意！」

キルヴァに思うところのないアレンジー・ルドルの決断は早かった。

ものものしい気迫のこもった大音声が谷間の岩肌に反響しながら駆け抜け、降ってわいた訃報に動揺し揺らいでいた全部隊の意識を強引に収束させた。

ほとんど一斉に、びいん、と弦が鳴る。

狙いが定められる。

スザン兵はとつと散つて、イシュリー兵は立ち往生していた。キルヴァは腹に力を込めてあらん限りの声もて呼ばわった。

「 来い、カドウサ！」

高みから、まっしぐらに飛来したギイ大鷹の鮮烈な姿に弓矢部隊は慌てて攻撃を中止した。

すべての鳥は神聖なる生き物で、いかなる理由があろうとも傷つけてはならないという掟がある。まして矢を向けるなど言語道断で、万が一にも的中すれば死罪は免れない。

灰色の翼をひろげ、ゆっくり、悠然とキルヴァの頭上を旋回するギイ大鷹は、その存在で、たった一羽でスザン軍の攻撃の手を停止させた。

「 ……なんとまあ」

呆れたように口を聞いたのはゲオルグ・ニーゼンであった。

「 神聖なる鳥の中でも最も強く、稀少で、利口なギイ大鷹を、それも滅多にひとに慣れないオスを飼いならすとは…… 本当に類まれな資質を持たれた方だ、あなたは。いや、実におもしろい。興味深い。ここは潔く我らは退きましよう。だが、ただ去るのも芸がない上、愚直にすぎる。ここは置き土産をしていきましょう。それでよかる」

アレンジー・ルドルはゲオルグ・ニーゼンを一瞥して、そのまなざしの中に敢て言葉にしない提案を憚然とした面持ちで了承した。腕を振り、法螺貝を鳴らすよう合図する。

「 退却、退却 ！」

「 全軍退却、全軍退却 ！」

ダリー・スエンディーとミシカ・オブライエンがアレンジー・ルドルとゲオルグ・ニーゼンの行く手をそれぞれ遮った。

ノーヴァ戦争・六（後書き）

次話がこのノーヴァ戦争最大の見せ場です。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

ノーヴァ戦争・七(前書き)

天人降臨です。

ノーヴァ戦争・七

「あなたがたのどちらか、或いは両方でもかまわないが、残ってくれ。人質とさせてもらう」

アレンジー・ルドルはふてぶてしく鼻を鳴らした。

「ほう、ここは笑うところか？俺を人質だと？できるものなら捕らえてみる！と、言いたいところだが、生憎いまは忙しい。負け戦は引き際が肝心だからな。それにおまえたちも俺たちにかまっている余裕などないだろうよ」

せせら嗤い、両眼に鈍い危険な光が灯される。口元が歪んだ。二言、三言、低くなにごとくか呟くと、間髪おかず、天空に向かって吠えるように高々と声を張り上げ、召喚した。

「我ら偽りなき契約のもとに、ここに来たれ、火の天人！」
ラク・シャーサ

次の刹那、朝の生まれたばかりの柔らかい光を打ち消して、炎の雨が獐猛なる勢いで降り注いだ。

拳大の火炎の飛沫が隕石群の如く襲い来る。

たちまち辺り一帯阿鼻叫喚の騒ぎとなり、一瞬にして形勢逆転に陥った。

あまりに強烈な不意打ちをくらったため、アレンジー・ルドルとゲオルグ・ニーゼンにはまんまと逃げられた。だが、不幸中の幸いというべきか、スザン軍の重要人物たる二人の近くにいたためか、キルヴァたちは炎の第一波を浴びることはなかった。だが事態は切迫しているということはすぐに判明した。

ひらひらと躍り爆ぜる炎を全身に纏って晴れた空から垂直に天人が降下してきた。

六枚の翼をわずかにひろげて、地上には完全に立つことなく、やや浮いている。

白い長い襷のある衣で肌を隠し、短く刈った金色の髪と生気のない整った美貌、尖った顎、平たい胸、均整のとれた長身。間違いな

く男性の天人である。

突如として現れた火の天人は無表情のまま両腕をひろげ、掌を太陽に翳した。すると手の中に炎の球体が一点浮き上がり、ごぼごぼと沸騰しながらあつという間に巨大に膨れてそのまま上空にすーっと持ち上がってゆく。また天人もまっすぐに浮上して、球体よりもやや高い位置にて留まる。

これからなにが起こるのか、誰の目にも明らかだった。

キルヴァはセグランを残してきた方角を振り向いた。瞠目した。

セグランが、ジェミスもそのあとに続いているが、ものすごい勢いで駆けつけてくる。よりによって炎の攻撃の集中砲火を浴びそうなこの場所に。

「逃げる」

キルヴァは必死に叫んだ。

「来るな！戻れ、セグラン！だめだ、危険」

キルヴァの声は途絶した。上空を回遊していたカドウサが不意に身体の向きを変え、攻撃の態勢を取ったのだ。天人に襲いかかろうと尖った爪を武器に掴みかかってゆく姿を眼の端に捕らえる。止める間もなく、カドウサが天人に接触しようとしたまさにその瞬間、炎の球体が炸裂した。

暴れるように宙に飛び散った炎のつぶてを見て、キルヴァは味方の前線基地がなぜやられたのか、父王の負傷の理由がなんだったのか、また国境線に赤々と燃える炎の列柱の意味するところとはなんであるかを一瞬にして確信し、理解した。

誇り高くひとに関わらぬ天人が、ひとの命に従い、参戦している。いけない、と思った。

キルヴァはおぞましい予感に戦慄した。

このままでは、いずれ遠からず天人戦争再来となる。かつて大陸全土を焦土に変え、ひとと獣も天人も、数多の命が失われた古代のそして過去最大規模の戦争。天人の大いなる力を兵器として使用し

た、ひとの行いの最も醜悪な愚行。

このキルヴァの思考はほんの束の間のこと、現実、エディ・イ・ローパスが馬上から有無を言わず飛びかかってきた。地面に倒れた二人をカズス・クライシスとアズガル・フェイドが左右から挟み覆い被さり、クレイ・シュナルツァーが間隙を埋め、ミシカ・オブライエンが上を庇い、ダリー・スエンディーが更に上から庇った。そしてセグラン・リージュが火の天人とキルヴァとの間に突進して、馬上で両腕をひろげた恰好で火炎の弾幕の盾となった。

誰もが死を覚悟したその瞬間は、訪れなかった。

大きな羽ばたき音がして、風が捲れた。太陽の陽射しが遮られて影が落ちる。空気が唸ったかのような鈍い衝撃音のあと、一瞬にして、炎の塊はことごとく消滅した。

その信じられないような光景をただひとり、セグラン・リージュだけが目撃した。

戦場に異様な気配の静けさがみちた。

なにごともし起らないので、キルヴァは不審に思いながらも皆を退かせ、ようよう這い出た。そして振り仰いだそこに、新たな天人を見出した。

美しい。

言語を絶するほどの美しさである。

静寂はこの人智を超えた美に誰ひとりとして例外なく圧倒されたためであった。

腰まで届く長い豊かな金髪、白皙の美貌、脆弱さの欠片もない瘦躯、纏う長い衣は白で金の帯を締めて裸足である。翼の数は、十二十二翼天。長に次ぐ、力ある者。最強の天人の証。

そしてそのうちの一枚の翼に禍々しく浮き上がる、蒼い一条の傷痕。

深い蒼い双眸はまっすぐにキルヴァに向けられていた。

キルヴァもまたまっすぐに十二翼の天人を見つめ返した。

ノーヴァ戦争・七（後書き）

ようやく、再会です。長かった……。
あと一話、続きます。
安芸でした。

ノイヴァ戦争・八（前書き）

次話より、新しい章の開始です。

ノーヴァ戦争・八

十二翼天はひとつ目配せをして、上空の六翼天のもとへいった。
「退け」

「なぜだ。一族を裏切るのか」

「彼の者に敵対する者は許さぬ。それだけさ」

「一族を敵に回すというのか」

「彼の者のためならばそれも仕方ない」

「考え直せ」

「断る。おまえこそ、身の程を知れ。私の相手になると思っているのか」

六翼天は苦痛と悲しみに顔を歪め、十二翼天に言った。

「おまえは俺の親友だと思っていたのに」

「親友だ。だが彼の者は私の命の恩人だ。知っているだろう。掟に則り、私は彼の者に就く」

「このままでは済まされないぞ。おまえは一族の次期長候補だ。勝手が許される身ではない」

「知ったことか。私は彼の者のために十二翼となったんだ。他の都合など私のかまうところじゃない。もしどうしても私を阻止したいのであれば命懸けで来いと長に伝えてくれ」

「行くな、ステラ」

「さらば、エライオン」

物哀しくも甘い微笑を最後に向けて、十二翼天ステラは身を翻した。白い翼が朝日に透けて一際白く輝く。

颯爽と去る後ろ姿を六翼天エライオンは溜め息をついて見送った。黒ずんだ血溜まりと無残な最期を遂げた屍があちこちに転がる戦場に、光り輝く尊き姿で天人が降臨する。それはあまりにも現実離れした光景だった。

キルヴァのもとに音もなく舞い降りて、白い翼を次々と閉じる。

それから十二翼天ステラは、天人が嫌がってしないことのひとつ

をやつてのけた。大地に足をつけたのだ。

天より地へ。天の者より地の者へ。そういう意味合いを込めた振る舞いである。

そして頭を垂れて跪いた。白い衣が泥にまみれる。長い髪が流れて先端が泥水に浸る。

十年の空白の時を経ての邂逅だった。

「ようやく会えた」

天人の言葉で、キルヴァはぼつりと言った。

「顔を上げてくれ」

ステラは従い、ちよつとはにかなだように笑った。

「おまえがいつまでも私を呼んでくれないから勝手に来た。ああいう窮地のときにこそ、私を呼べばいいのだよ」

「まさか。そなたを呼ぶなんて私にできるはずもない」

「なぜ。私の羽をやつたらう。あれはどうした。ジアから受け取っていないのか」

「羽は受け取った」

ジアの鍛えた短刀を納めた箱は二重底になっていて、羽は秘密裏に隠されていた。短刀共々嬉しい贈り物だった。

いまでも、あの羽をみつけたときの気持ちは、忘れられない。

「……大切に持っているよ。でも、あの羽でそなたを呼ぶことができるなんて知らなかった」

「ジアだな。わざと教えなかったんだ。羽を火に炙ればどこにいようと私は来ると伝えておけとあれほど言ったのに。道理で放つておかれっぱなしだと思ったよ。おまえのこと、冷たい奴だと散々罵っていたんだが、そうか、知らなかったのか。いや、あんまり知らんふりするからな、私のことを忘れたいのか、それともなかったことにしたいのか、関わり合いになりたくないのか、どれかだろうと思っていたんだ。それならば呼ばれるまで出ていってなどやるものかと臍を曲げていたんだが　あーあ、十年損したな」

「うん」

「まあその分、これから共にいればよいか」

「私の傍にいてくれるのか」

「おまえがそれを望むなら」

「いて欲しい。ずっと会いたかった。忘れたことなど一度もない。いつか会えると信じて待っていたのだ」

「いまがそのときだ」

ステラは真顔で告げた。

「私はおまえに命を救われた。これからおまえが天寿を全うするそのときまで私はおまえの傍にいよう。おまえの声を聞き、おまえのために働き、おまえゆえに心を尽くそう。私の名はステラ。おまえによって新たな名を授けられし者。火を司り、火を糧とする者。いまここにおまえのものとなることを誓う」

キルヴァは頷いて、そつとステラの手を押し戴いた。

「私の名はキルヴァ・ダルトワ・イシユリー。その誓い、申し受ける」

リアストン暦九百九十三年、トゥーラの月、第一日目、イシユリー国第五領地スザン国国境ノーヴァ付近で起こったこの小規模の戦いは、後にノーヴァ戦争と呼ばれ、第二次天人戦争の引き金になった一戦として史実に残ることになる。

ノーヴァ戦争・八（後書き）

ノーヴァ戦争、終了です。

はーあ、やれやれ。どうにか第一戦の方がつきました。

ま、前哨戦というところですね。

とにかく、ステラのセリフや描写に気を遣いました。おかげでかっこいい、名セリフ連発です。キルヴァを完全にくっつけているくらいです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

第四章 苦しみを見出すところ

戦のあと(前書き)

新章開始です。

頭上に鳥影が射した。

キルヴァは黄昏の空を仰ぎ、緩く旋回する愛鳥を呼んだ。

「来い、カドウサ」

その声をただちに聞きつけて、勇壮な姿のギイ大鷹が舞い降りてくる。伸ばしたキルヴァの腕にしっかりと留まり、一声甘く鳴きながら長い翼を折りたたむ。

「もう大丈夫のようだな。よかった」

カドウサは先の戦で天人に向かって攻撃を仕掛けた折に、炎の球体の爆破の煽りをくらい地面に叩きつけられて怪我をしたのだが、どうやら大事はなかったようだ。

「私のためとはいえ、無茶をするなよ。飛べなくなったらどうするのだ」

「カドウサの調子はいかがです？」

振り返ると、すぐそこにセグランが立っていた。

「問題なさそうだ」

「それはよかった」

スザン国の侵攻を食い止め、第五領地の国境前線基地が復興してから数日が経った。

怪我の具合がおもわしくないディレク・ダルトワ・イシュリー王は、近臣と専属医師の説得により養生のため、一旦王宮へ帰還した。軍師リユージェル・ダツファリーを伴ったのである。

代行で軍を預かったのはキルヴァ・ダルトワ・イシュリー王子で、いまは諸々の戦後処理と新たな人員配置、基地の建て直し、戦略会議など、いくつもの問題を処理するのにここ何日も睡眠も満足に取れぬほど仕事に忙殺されていた。

セグランは文字通り片時も傍を離れずキルヴァの補佐にあたって

いた。

「お疲れですか？」

「大丈夫だ」

「しかし朝からずっと立ちっぱなしでしょう。まもなく食事ですが、少し休まれてはどうですか」

「いや、本当に大丈夫だ。皆よくやってくれているし、セグランもいる。それに、ステラもいる」

姿は見えなくとも、その存在は近くの空に在ることをキルヴァは了解していた。

あの劇的な再会のあと、ステラは空に昇った。近くにいる。必要なきときは呼べ。と言い残して。

その言葉をキルヴァは疑わなかった。

キルヴァはカドウサを腕から放ち、その灰色の翼が夕べの光に浸るのを見た。暮れゆく濃い橙色の地平を眺めた。眼を瞑ると、風がしつとりと重くなるのを感じた。

瞼を開ける。夕闇が深まってゆく。雲が山吹色と緋色と薄紫の斑に染まり、夜の到来が間もないことを告げていた。

キルヴァはセグランに向かい、微笑した。

「……私は嬉しいのだ」

「はい……？」

「嬉しいのだ。セグランと、ステラと、またこうして無事会えたことがなにより嬉しい。だからいまはなんでもできる。どんなことでもやれる。こんな些細な疲れなどなんともない。」

君がいて、ステラがいて、輩ともからがいる……私はなんと幸せ者だろう」

「王子……私こそ、またこうしてお傍にお仕えできたこと、大変嬉しく思っております。なんだか慌ただしい再会でしたのでまだなにもお話できておりませんが、お伝えしたいこと、お訊きしたいことが山ほどあるのです」

「私もだ。でも、焦らなくてもいいだろう。徐々に、少しずついい。セグランのこの十年を聞かせてくれ」

「はい。私も王子の十年をぜひ教えていただきたいものです」

「そうだな。もう少しいまの私を見てもらってから、訊いてみたい
こともあるしな」

「……訊いてみたいこと？」

「あとでいい」

「気になります。なんですか」

キルヴァは言いにくかったが、意を決した。飾る相手でもない。

「……私はセグランの言う“余裕のあるひと”に少しは近づけたか
……？」

セグランの表情が変わった。

キルヴァは記憶にある言葉を胸の内で反芻し、ゆっくりとそれを
なぞった。

「……余裕のあるひとになれば、と君は言った。やがて王になる私は
目先のことにのみとらわれてはいけな。常に先を見て、常に先
を読み、常に先のことを考えると。それには余裕が必要で、余裕の
あるひとだけが他者にも優しくできる……それができれば、立派な
王となれる。そう君は言ったな。私がそうあるうとする限り、いつ
の日にかまた会えると……私はその言葉を信じた。信じて、君を待
った。待つ間、考えて、努力した。セグランの言う余裕がどうい
うものかわからなかったから、まず、身近なひとを信じることから
はじめたのだ。そして自分が信じられるひとを少しずつ増やしてい
くように努めた……私はまだまだ未熟で、力もない。だが周りの人々
に助けてもらうことでなんとかこれまでやってこることができた。
皆には感謝している。一国の王子としては頼りないかも知れないが、
互いに助けあい、補いあうことができれば、どんな局面も支え合え
ると、私は学んだ。少しは成長したと思っってはもらえまいか……？」

第四章 苦しみを見出すといふこと 戦のあと（後書き）

セグランとキルヴァは書いていて楽しいです。

この二人に、キルヴァ命の近衛をまぜると、もっと楽しい。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ひとときの談笑（前書き）

平和が一番、円満が一番。

ただ、束の間のものではありませんが。

ひとときの談笑

キルヴァの見つめる先で、セグランの表情が崩れた。

「……十分でございます」

そう言ったセグランの眼から涙が溢れたので、キルヴァは驚いた。セグランは流れる涙を拭いもせずに微笑したまま片膝をついて、キルヴァと視線を合わせた。十年前に袂を別ったあの日と同じように、キルヴァの手を押し戴く。

「あなたさまは私の王……たとえこれからなにがあるうともあなたさまは私の唯一の王です。私如き者の言葉を真摯に受け止めてくださって、感謝の申し上げようもございません。どうか、どうかいつまでもお傍においてください……」

「……たく、見ているこつちが恥ずかしくなるな」

呟きと言うにははつきりしたばやし声が聞こえて、キルヴァはそちらを見た。

ジエミス・ウィルゴーが宵の明星に眼を止めながらぶらぶらとやって来るところだった。

「おいこらセグラン、いつまで王子を独り占めしているつもりうおっ」

「……邪魔です」

「邪魔です、じゃねえっ！いきなり眉間に短刀投げつけるなんて凶暴にもほどがあるだろう！あーびつくりした。あーびつくりした。いまのは本気で死ぬかと思った」

「狙いましたからね」

「狙うな。いくら俺でも命中していたら昇天していたぞ」

「は、この程度の不意打ちを避け切れない護衛などものの役にも立ちません。要りません。お荷物です。だいたいあなた、存在自体が目障りです。私が王子といるときは近くに寄るなど言ったでしょう」「存在自体が目障りって、全否定かよ。ひでえ。あんまりだ。ちょ

つと王子、こいつになんとか言っておいてくださいよ。俺いつもこの調子で虐げられていて、まったく命がいくつあっても足りませんよー。あいた」

キルヴァはぎよっとした。

セグランが来るなど言っているにも拘らず、平気で隣にやってきたジェミスの額にセグランの手が伸びて、人差し指で強烈に弾かれたのだ。

「王子に馴れ馴れしいです。無礼が過ぎると粛清しますよ……」

「わ、わかった、わかったって。本気になるなよ。ったく、王子のこととなると眼の色変わりやがって……あーすいません、王子。俺馴れ馴れしかったですか」

キルヴァは笑った。

「いや、よい。私はあまり仰々しい態度は好まぬ。普通にいたせ。

私もそうする」

「あれ、いいんですか」

「よい。セグラン、彼をあまり邪険にするな。見ている気の毒だ」

「王子、あまりこの男を凶に乗らせないでください。放っておくとどこまでも凶々しくなります。迷惑千万なことをしでかします。少し厳しいくらいがちょうどいいのです。多少邪険にしようと思捨てようとしぶといので大丈夫です。ですから危険な任務などは全部この男にまわしてください」

「わかった、そうしよう」

「いやいやいやいや、あのですね。話し合いますよ、王子。これは立派な嫌がらせですよ」

「嫌がらせなものですか。あなたのひととしての能力を見込んだ上のことです。ふははは」

冷たい火花が散る二人を見比べて、キルヴァは腕を組み、ちよつと肩をそびやかした。

「セグランとそなたは仲がよいのだな。遠慮がなくて、羨ましい。私も早くセグランとそうになりたいものだ……」

「王子には俺たちがいるじゃないですか」

いままで気配を消して控えていたカズス・クライシスが不満げに抗議の声を上げたのに、キルヴァは腕を解き、訝しげに振り返った。カズスはすぐ背後にこちらに背を向け仁王立ちをしていて、若干ふてくされている。

「俺たちとは遠慮がない関係でしょうか？そうでしょうか？なぜ俺たちじゃだめなんですか。どうしてそんなに次軍師殿ばかりがいいんですか。ここのところずーっとお二人でべったりで、なんだか除け者にされている感じで、正直、俺は面白くないです」

「ぶほっ」

ジェミスが嘔き出す。

いつの間にか姿を現したアズガル・フェイドが無表情のままジェミスに石を投げる。

それをひよいと避けたジェミスの脇腹に痛烈な肘鉄をセグランが加えた。

ジェミスが悶絶する。

誰もが無視を決め込み放っておく。

「……いや、除け者って、そんなつもりはないのだが……それほど長く二人でいたか、セグラン？」

「さあ……どうでしょう。いえ、いたかもしれませんね。仕事続きでしたし、私もなんとなく王子のお傍を離れ難く思っておりますたので……」

キルヴァとセグランが黙り込み、見合ったところで、クレイ・シユナルツァーとダリー・スエンディー、ミシカ・オブライエンが次々と姿を見せた。

「いましたよー。いました、いましたー。二人の世界を構築している感じで近づけませんでしたもの。カズスじゃないけど、確かに放置されているようでつまらなかつたですねえ」

「仕方ないんじゃないか。セグランと王子は久しぶりに会ったことだし……まあ、多少の疎外感是否めなかつたがな」

「それはそうと、王子、エディニーが呼んでおります。食事ができたそうです。そろそろ参りませんか」

丁寧な腰を折って一礼し、そう告げたあと、次にミシカは身体の向きを変えてセグランに視線を向け、微かに笑んだ。

「その席で、よろしければ皆を紹介してください。まあ、私とダリ」とアズガルは今更ですが、他の者はセグランを知らないのです。余計にお二人の仲に妬いてしまうのです。きちんと挨拶さえすれば、皆の苛々も解消されることでしょう。さあ、エディニーが待っております。今日は鹿肉が手に入ったので、鹿肉のツミレ鍋だそうですよ。煮込みすぎて固くなる前に皆でいただきましょう」

ひとときの談笑（後書き）

忠誠。

いい言葉だー。セグランはキルヴァに命をかけてつかえています。引き続きよろしくお願いいたします。安芸でした。

秘められた想い（前書き）

エディニイとキルヴァです。

キルヴァはどうも女心には鈍いようです。

秘められた想い

キルヴァは両の手を握り、拳を作った状態で胸の中央で交差し、踵をつけ、まっすぐに姿勢を正して眼を瞑り、月神ラーク・テアに祈りを捧げていた。

月が冴え冴えと美しく照る夜だった。

天満星が輝き、雲はない。風は微風で、少し肌寒い。

キルヴァが祈り終わるのを待っていた間合いで、そっと忍び寄る気配があった。

「……お風邪を召します。どうぞ羽織ってください」

「……ああ、すまないエディニイ」

差し出された丈の長い黒マントをキルヴァは受け取った。

辺りは寝静まっている。

天幕ごとに小さく灯された青角灯が季節外れの蛍のように点々と瞬いていた。

キルヴァの天幕は夜営のほぼ中央に設営されていた。そのすぐ右隣にダリーら近衛のための天幕がひとつ、左隣に次軍師セグランのための天幕がひとつ、この三つの天幕を囲うように指揮官らの天幕が円状に張られ、更にその外に一般兵の天幕が密集して展開していた。

キルヴァの近衛は交替で宿直に当たるため、二人は常に外で監視の眼を光らせ、ひとり天幕の内側を仕切った中で護衛と雑用を兼務する。

あとの三名は、一人は休み、二人は交代要員として待機する。

今日は、エディニイは休みで自由の身なのだが、一時休戦中とはいえ戦線にいるので自主的に休みを返上し、食事を作ったり、洗濯をしたり、掃除をしたり、キルヴァの身の回りの世話を焼いてくれた。それらを黙って行い、常に見えないところで働いてくれていることを、キルヴァはちゃんと知っていた。

「いつも君には世話をかける。ありがとう。今日の夕食のツミレ鍋も、とても旨かった」

「お口に合ってよかったです。では、私はこれで」

「エディニイ」

「……はい」

キルヴァは眼を伏せて畏まっているエディニイに顔を上げるように言い、笑いかけた。

「皆で囲む食事は、いいものだな。楽しくて温かい……腹も膨れるが、なにか心も満たされるような感じがするのだ」

エディニイの口元がやわらかく綻ぶのを見て、キルヴァの気持ちもよりほぐれる。

「さつき、カズスがな、食事の前に私がセグランを鼻屑にしているとむくれていたが、それは違う。私は君たちもセグラン同様、大切に思っている」

言って、キルヴァはエディニイの瞳をじっと見つめた。その眼には笑みがこもっている。

「私が孤独であったとき、助けを必要としていたとき、いつも君たちがいてくれた。その都度私がどんなに心強かったか……先だつての戦だつてそうだ。私ひとりではあのような無茶はできなかつた。君たちが支えてくれたから、被害も最小でスザンの侵攻を食い止めることができたのだ」

「……身に過ぎるお言葉です」

キルヴァは小さくかぶりを振り、笑みをひそめてエディニイを見つめた。

「君は、最近なにか悩みでもあるのか」

唐突な問いに、エディニイは怯んだ様子で表情が強張った。

「普段はなんでもないようだが、私の前では以前よりよそよそしいような気がするのだ」

「それは……」

言葉に詰まり、適当な言い訳を探しあぐねているように不自然に

眼を泳がせていたが、ややあつて、エディニイは暗いまなざしを伏せて俯いた。

「……それは、お気のせいですわ」

「気のせいか」

「はい」

「……そうか」

「……はい」

わかった、と嘯いて、キルヴァはそれ以上の追及を止した。ひとには誰しも言いたくないことだつてある。それをむやみに暴くのはよくない。

だが、そうとわかつていても釈然としない気持ちが残つて、胸に燻る。月を振り仰ぐ。薄い月光を浴びて、しばらく。心を決めた。それから後ろを振り返る。

「皆、いるな」

特別招集する必要はなかった。

呼応にはほとんどすぐに全員が現れた。最後にセグランが天幕の入口をついと手で除けて、無言で出てきたが、既に外出用の支度を済ませている。

キルヴァは黙つてついて来いというしぐさをして、人目につかぬよう、野営地を抜けた。

ここいらは起伏のある丘陵地帯で、地形さえ覚えていれば人目を避ける場所をみつけることは容易であつた。

青角灯を手を下げて雑草を踏みしだき、辺りに一切の生き物の気配がないことを確認し合い、なだらかな丘陵に立つ。風はわずかに湿気を孕んでいる。空気は澄んでいて、軽い。

きらめく月の光がかすかに互いの輪郭を浮き上がらせる深い暗闇の中、キルヴァは夜に身を委ねるように静かな声もて告げた。

「君たちに私の秘密の友人を紹介しよう。ステラ！ 我がもとに来たれ」

秘められた想い（後書き）

今日は短め。

次回、人物紹介も兼ねて、天人へのご挨拶？ です。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

真夜中の密会（前書き）

次話に続きます。一度にまとめるには長かったので、二分割です。

真夜中の密会

ほどなく、頭上で大きな羽ばたきが聞こえた。

月光が遮られ、不穏な影に覆われる。瞬間、キルヴァは囲われた。セグランと、彼のあとからひよっこりついて来たジェミスを除いたダリーら六名が所定の位置に守護に就く。それぞれ武器を備えて殺気を放っている。

ゆっくりと降りてきて、白い十二翼を広げたまま少し離れたところにふわりと浮く。片一方の手を腰にあて、もう一方の手では長い髪を掻きあげて、ステラは憮然として言った。

「……なぜ私は敵視されねばならんのだ」

「すまぬ。まだ皆、そなたのことを信用していないのだ」

「私はおまえ以外になんと思われようと構わん。で、なんの用だ」
「私は構うのだ。そなたには皆とも仲良くしてほしい。皆、私の大事な輩だ。きちんと紹介したくて、だからこんな夜分だが呼んだのだ」

「仲良く、だと？ なぜだ」

「私はどちらも大事だからだ」

ステラは面白そうにくすくすと笑った。闇の中でもその微笑はたえようもないほど美しい。

「おまえは私が大事なのか。なぜだ」

「なぜって……」

改めて訊かれるとキルヴァは答えに窮した。確かな答えが見当たらない。だが。

「……そなたはずっと私の憧れだったから……」

記憶にあるよりも遥かに美しいステラにキルヴァの胸は脈動を速めた。

言葉を失ってしまい、黙りこんだとき、横からセグランの声があった。

「王子、天人語では皆にわかりませんよ。紹介するのでしょうか？」
キルヴァははつとした。迂闊にも見惚れてしまっていた。

気恥ずかしさにややしどろもどろになりながら、キルヴァは皆の
武装を解かせ、向き合って言った。

「紹介しよう。火の天人のステラだ。ラク・シャーサ さっきは私の秘密の友人と言
ったが、本当のところはまだ友人ではない……だが大切なひとだ。
私の……いや、よそう。とにかく、今後ステラに警戒の必要はない。
すぐには無理だろうが、ゆっくりでいい、どうか皆にも信用してほ
しいのだ……」

だが、次々に上がったのは反発の声だった。

「……信用？ 天人を？ まさか本気ですか」

クレイがびつくりしたように大袈裟に手をひろげる。

「大切なひとなどと、お戯れを。あまり軽々しくそんなことをお
つしやいますな。余計な誤解を招きます。我々の前とはいえ、迂闊
な物言いは控えた方がよろしいのでは」

厳しい口調で窘めたのはミシカで、視線はさりげなく新参者で素
性の知れぬジエミス・ウィルゴーに向けられている。

キルヴァを遮るように、エディニイがちよつと押し強い調子で
口をひらいた。

「いったいどうして、王子が天人とお知り合いなのですか？ いつ
どこで会ったのです？ どういった関係なのです？王子の 王子
のなんなのです」

「まあ落ち着け」

興奮するエディニイをおさえるしぐさをして、ダリーがキルヴァ
とステラを見比べる。

「あー。確かに。この前の戦場でいっぺんお目にかかった顔だなあ。
あのときは命拾いした。なあ、皆そうだろう」

話の矛先を振られて、カズスが相槌を打つ。

「ああ、うん、そうだ。火のつぶてが頭の上から飛んできて も
うだめだと思ったな」

不承不承といった面持ちで、アズガルも頷く。

ダリーはおもむろにステラに向き直り、頭を垂れ、両手を胸において、そのまま掌を下にしたまま肘を伸ばし、脇へゆっくりと下ろし、左足を浅く引いてお辞儀した。

「遅くなつたが、礼を申し上げる」

義を重んじるダリーの振る舞いに、はじめぐずっていた他の者も折れて、次々に彼に倣って頭を下げてゆく。

キルヴァはほっとした心地でこの旨をステラに通訳した。

だが、返答は素っ気ないものだった。

「あれは、おまえを助けたのだ」

「しかし皆も助かったのは事実だ。素直に彼らの感謝を受け取って欲しい」

ステラ曰く、

「ひとは、妙な生き物だな」

キルヴァは、むっとして返す。

「天人は、へそ曲がりなものの見方をするのだな」

二つの視線がぶつかり合う。

と、不意にステラが大口を開けて、大声で高く笑った。

「ははははは！ この私に意見するとは、なんとも豪胆に育ったものよ！ 気にいった、その強気な気性は気に入ったぞ、キルヴァ。

どのみちおまえに仕える身だが、どうせ傍にいるならば気が合うに越したことはない。よかろう、おまえの輩だと言ったな。紹介してもらおうか」

ステラは空中で身を丸めた。片足は無造作に前に投げ出し、もう一方の足は抱え込み、膝頭に顎を乗せて斜めにキルヴァを見上げている。

とても人の話を真面目に聞く姿勢ではないが、天人の礼儀作法はひとのそれとはまた異なるのだらう、と正すことをキルヴァはこの場は諦めることにした。

薄い笑みを浮かべながら、ステラが左の手を伸ばし、カズスの持

つ青角灯に向かい、軽く手首を捻る。すると中の炎が揺らめいて火力を増した。

「さあこれで顔が見える。いつでもはじめていいぞ」

真夜中の密会（後書き）

続きをすぐにあげますので、ぜひ連続してどうぞ。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

我が輩（ともがら）を（前書き）

紹介内容をまとめるのは、一苦勞でした。

我が輩（ともがら）を

そこでセグランが横いった。

「では、もしよろしければ、私が通訳をいたしましょう。王子が紹介するのは天人語の応酬になつてしまい、皆にはわからないので窮屈な思いをしたいと思います。いかがですか？」

「セグランは天人語がわかるのか」

「この十年、勉強いたしました。会話と読み書きも、不自由しない程度にはできます」

「そうか。ではすまぬが、皆への通訳を頼む」

「はい」

キルヴァは首肯し、まだ畏まったままのダリーの傍へといった。

「彼はダリー・スエンディー。肩書は第四領地領主直属近衛兵長だ。ダリーは剣の腕も相当なものだが、強いだけじゃなくて思慮深い。行き当たりばつたりでは動かない。人にものを教える指導力や、意見をまとめたり、まとめた力を引っ張ったりする牽引力に優れている。それにすごく信義や礼節を重んじていて、私も彼にはいつも教えられるばかりだ」

次に、ミシカの横に立つ。

「彼女はミシカ・オブライエン。肩書は第四領地領主直属近衛兵副長だ。ミシカは慎重で警戒心が強いから滅多に間違わない。危険に對しては厳しくて、特に私に關してはちよつとでも危ないと思うと一度は必ず制止してくれる。だがそれは私に限らず皆の身を案じてのことだ。人にはなにかと誤解されやすいが、ミシカは強くて優しくて親切だ」

次に、エディニイのところへ行く。

「彼女はエディニイ・ローパス。肩書は、あとは他の皆と一緒に、第四領地領主直属近衛兵だ。エディニイは誰とでも親しくなれて、どこへでも入り込める才能がある。情報を収集する能力が抜群に秀

でているのだ。それに家事が得意で、料理もうまい。私は彼女の食事が一番好きだな。明るくて、面倒見がよくて、気が利いて、楽しい女性だよ」

次に、クレイの肩を叩く。

「彼はクレイ・シユナルツァー。肩書はもういいな。クレイは潜入が得意で情報の拡散と攪乱が専門なんだ。口が上手で記憶力が確かだからなにかと援護に役立ってくれている。もう何度助けられたかわからないくらいだ。いつも私を笑わせて、場を賑やかにしてくれる。彼がいなかったら私の生活はだいぶ重苦しいものになっただろう」

次に、カズスに笑いかける。

「彼はカズス・クライシス。カズスは剣の使い手としては最強だ。私を知る中で最も強靱な腕と身体捌きと馬術を備えているから戦場では頼もしいことこの上ない。頑丈で、体力もあるから、護衛の任や寝ずの番も安心して任せられる。人柄が率直で明朗快活だから誰からも好かれるし、常に前向きな姿勢は私も見習わねばならないと思っているよ」

次に、アズガルに視線を移す。

「彼はアズガル・フェイド。アズガルは私の切り札だ。攻守どちらも優れた技で幾度となく私の命を救ってきた得難い存在、それが彼だ。寡黙で、忠実で、辛抱強く、決断力、判断力、行動力、戦闘力。他の皆を凌駕している。彼が常に傍らにいてくれるので私はいつでも安心してどこへでも赴くことができるのだ」

キルヴァはジェミスを一瞥したが、結局、名前を唱えるだけにとどまった。

最後に、セグランを見る。思わず、笑みがこぼれる。

「……セグランは、セグラン・リージュは、そのままだな。紹介するまでもない。だってステラはセグランとは既に顔見知りなのだろう？ 私には秘密にして黙っていたようだけど、それが理由のあることなら、私は特には尋ねない。だけでもし教えてくれるのなら、

いつか聞かせてほしい。そう、私は知りたい。知りたいのだ、ステ
ラのこの十年を。いや、ステラのこととは、なんでも
「

我が輩（ともがら）を（後書き）

次はセグランとその友人関係を。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

久しぶりに（前書き）

こつこつ他愛のない話をもっと書けたらと思います。

久しぶりに

国境線に特に動きは見られず、戦線基地は迎撃態勢を崩さないまでも、一応は平穩の中にあつた。

それが束の間の休息であることは兵の多くが知るところであつたが、ここ数日は交代制で訓練し、各隊別に見張りや見回りの任に就き、身体が空いた者は思い思いに過ごしていた。

昨夜キルヴァの計らいで、ステラと二度目の遭遇を果たした翌日である。

「セグラン、いるか」

言つて無造作に天幕に入ってきたのはダリー・スエンディーとミシカ・オブライエンだつた。

セグランは二人の次軍師補佐官といくつかの懸案事項を検討していたのだが、二人の姿を見て一時中断した。

「続きは午後にしましょう。食事が済んだらまた私の許へ来てください」

「はい。では失礼いたします」

補佐官二人が退出する。

セグランはダリーとミシカに適当に腰かけるように言い、秘蔵の果実酒を用意して杯に注ぎ、勧めた。

「なんです、二人で珍しい」

「王子に追い出されたんだ。若い奴らだけを集めてなにか企んでいるみたいでな、俺とミシカは邪魔なんだと。な？」

「人聞きの悪い。今日は特に出かける用事もないから少し休息してくればいいと、王子は我々に気を使つてくださったんだ。おかしな勘繰りをするものじゃない」

「俺とおまえだけ暇を出されたんだ、なにかあるだろう」

「私とおまえだけ暇を出されたのは、懐かしき知己との再会のひと

ときをわざわざ設けてくれたんじゃないか。それぐらい察しろ」

「あれ、そうだったのか」

「……もういい。おまえ、いなくともかまわんから帰れ」

「まあそりゃあ俺はお邪魔だろうが、少しくらいの邪魔はかえって燃えるだろうから邪魔させてくれ。いいところでの邪魔はしないから邪魔と思わず、ひとつ頼む」

「わけがわからんこと言うな!」

セグランは二人の進歩のない掛け合いに苦笑した。

「二人とも相変わらずですね。私の知っている友のままだ　　変わらぬにいてくれて、嬉しいよ」

「十年やそこらじゃ人間なんてそうそう簡単には変わらんよ。おまえだって変っちゃいない。まあ、この顔ぶれでの酒は久し振りだ。

乾杯といこうや」

三人は杯を掲げた。

「無事に再会できたことに」
そして一気に呷る。

「　　うまい!　こりゃ極上の代物だ」

「あと一杯だけ差し上げます。酔っ払って任務に支障が出ては困りますからね、あと一杯だけです」

「このぐらいで酔うかよ」

「だめです。あなた方は底なしに飲むでしょう。憶えていますよ。

アーゲルとあなた方二人の三人で酒問屋に押し入って店の酒すべてを買い占めて酒盛りをしたでしょう。それを一晩で飲みきって武勇伝になったこと　　まあ、昔の話ですけど」

セグランは、いまは亡き友の名を口走ったことに遅ればせながら気がついて、すぐに口を噤んだ。話題を変えることにする。

「王子は、とてもいい青年になりましたね」

「どう思った?」

お代わりを要求するダリーに二杯目の果実酒を注ぎながら、セグランは少し考えて言った。

「……見た目の繊細さにそぐわぬ大胆さがありますね。作戦の組み立てや人員の振り分け、戦闘配置、兵士の掌握、指揮の采配、流れの読み方、戦い方　まったく申し分ない。我々の助言があったにせよ、判断、決断、英断、行動、どれも迷いなく速かった。そしてひとの助言を素直に聞き入れる度量がある。また、助力を自ら請うことができる。これは優れた資質です。高い地位にある者はなかなかできません」

「そつだ。まっすぐで、素直で、澁みがない。真面目だが堅苦しくなく、回り道も寄り道もできる。肝っ玉が太いから多少のことでは揺るがない」

あとを引き取ってミシカが続ける。

「人を信用するから、信用され、頼るから、頼られる。訊くから、答えを得られ、求めるから、求められる。優しさには優しさを、厳しさには厳しさを、規律を順守し、法規を正す。だめなものはだめで、いいものはいいとはつきり言い、過ちに私情を挟まない」

「で、給料をきちんと支払う、と」

真面目くさつて、ミシカは頷く。

「重要だな。人は情と同じくらい、金でも動く」

セグランは違くないですね、と相槌を打ちながら、二人に改まつて頭を下げた。

「……王子は苦難の十年を過ごしたようですね。でもあなた方がいたから乗り越えてこられたのでしょう。礼を言います。長きにわたり、王子を護ってください、ありがとうございます」

「おまえがいない間、おまえの代わりに王子は俺たちが守ると言つた。約束は果たしたぞ」

「十二分に」

「これから先は、私たちは好きで王子にお仕えする。強制されたわけでも義務でもない。だから、セグランに止める権利はないからな」
「頼みます」

セグランは険しい面持ちで、即座に言った。脳裏に、まだ王子に

も誰にも告げていない、ある光景が過っていた。

「……王子はこれから先も大変なめに遭うでしょう。行く道は急勾配の狭い困難な道で、孤独との戦いが待ち受けているはずですよ。どうかお願いします。私と一緒に王子を支えてください」

無言で、三人は二度目の杯を交わした。

その直後だった。

急に外が騒然となった。

久しぶりに（後書き）

セグランとダリーとミシカは旧友です。もうひとり、名前だけア
ーゲルとできましたが、まあ、おいおいに。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

我がもとに来たれ（前書き）

美しきもの。
それは天人。

我がもとに来たれ

三人は即座に得物を構えながら表に飛び出した。

そこで目の当たりにしたものは、天幕の正面に押し殺した表情で身動きもせず立っキルヴァとその傍らにびたりと添うアズガル、昼食の支度にとりかかろうとした矢先の光景と、血相変えて空の一点を指差し怒号飛び交う兵士らの大わらわな姿だった。

「弓持て弓！」

「敵は上空！ 射よ射よ！」

「王子を護れーい！ 王子を護れーい！」

間髪おかず陣地の上空、ほぼこの指令本部真上に位置する空に矢の雨が解き放たれた。

そこには幾重もの白い翼をひろげたひとりの天人の姿があり、セグランは息を呑んだ。

間違えようもない、天人はステラだった。

「撃ち方やめー！ 撃ち方やめー！ 皆の者、控えよ！ 皆の者控えよ！」

セグランが大声で命を下すのと、真横でミシカが攻撃停止の法螺貝を吹き鳴らすのが同時だった。

しかし既に解き放たれた矢はどうにもならない。的確にステラを捉えた無数の矢は吸い込まれるように襲いかかり、一瞬にして、焼失した。一矢もステラには届くことなく、

その翼から発した眩い金色の光芒で焼き払われ、はらはらと、矢の残骸とも言い難い微塵の屑が地上に散った。

圧倒的な力の優劣の前に兵士らの反応はまちまちだった。ただちに第二射にかかるもの、キルヴァの前に盾とならんがため身を投げ出すもの、呆然とするもの、見惚れてあっけにとられ動けない者、セグランの命令と法螺貝をきちんと聴いて従う者が右往左往する。

セグランはいま一度声を張り上げ、皆を制した。

「撃ち方やめー！ 撃ち方やめー！ 皆の者、控えよ！ 皆の者控えよー！」

ようやくこの呼びかけに不本意な面持ちで指揮官らが従い、動揺しながらも逃げ惑うことなく攻撃の一手に出るといふ不屈の闘志を見せた配下の兵を抑えはじめた。

ややあつて陣内がかすかなざわめきを残すのみとなつて静まつた頃、キルヴァがゆっくりと歩を進め、前に出た。無言のまま上空を仰ぎ、その手を光に翳すように持ち上げて、誘う形に指先を整えた。そしてほんの小さな声で呼ばわつた。

「我がもとに来たれ」

それは、なんと威容にみちた眺めだった。長い豊かな金髪を靡かせ、白い肢体をゆるく旋回させながら、地上にいる獲物を狙う鳥の如く頭部を下にして頸を伸ばした恰好で、天人が降りてくる。

細く優美な腕を伸ばし、その真白い指先をキルヴァのそれに重ねるようにして、突如、ふわ、と身体の向きを変えた。足の爪先を地上に向けて、翼を折りたたみながら、ほんの僅かに宙に浮いたまま、キルヴァの横に舞い降りる。

それからカドウサも異様な気配を察してか、どこからともなく現れて、キルヴァの肩に留まり、威嚇の声をもたらした。

カドウサを小声で宥めながら、キルヴァは兵らに向き直つた。

「この者の名はステラ。ラク・シャーサ、火の天人である。ステラは既に私と契約を交わし、私のものになっている。今後、この者への無礼は私への無礼と見做す。ステラには常時私の傍にいてもらう所存であるゆえ、皆もよく見知ってくれ。ただし、必要以上に近づくことのないように。火傷をする羽目になるぞ。セグラン」

セグランは身を正した。

「は」

「ステラの面倒を君に任せる。不自由のないように計らつてくれ」

「承知いたしました……」

「それから、はじめ問答無用でステラに矢を放つた者が幾人かいる

な。エディニイ、クレイ、カズス、どうだ、わかるか」

セグランの視線の先で、三名が順に応えた。

「はい。既に身柄を抑えてあります」

「こちらもです」

「こつちもです」

「よし。ではその者たちを除いて他は解散、昼食時に騒がせてすまなかった。皆、持ち場に戻ってくれ。ああ、君もここに残るように」
キルヴァが最後に引き止めたのは、身を呈してキルヴァを庇った若い兵士だった。

「私の天幕に集まってくれ。ステラ、そなたも一緒だ」

セグランも行きかけたところへ、四名の指揮官が急いでやってきて陳情した。

「どうか情状酌量ください。すべては王子を護るためにやったこと、反逆とかさういった意図はなかったのです」

「あいつは正義感の強い腕の立つよい兵士です。なんとか許してやってください」

「私の部下の不始末は私の責任です。処罰は私にくださるようお願い申し上げます」

「除隊にはならぬよう、どうかどうか、ご配慮を！」

セグランは必死に懸命に言いつのる指揮官らを宥め、善処することを約束して、キルヴァの天幕を最後に潜った。

中にはキルヴァと六人の近衛、隅にジェミスとステラ、そして畏まった姿勢で膝をつく九名の兵士がいた。どの顔も、厳罰を覚悟した厳しい眼をしている。

キルヴァは一同を見渡して言った。

「面を上げよ」

我がもとに來たれ（後書き）

このエピソードも好きですね。

まだもうちょっと先があります。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

近衛任命（前書き）

キルヴァの決して型にはまっ
ているわけではない、性格の一端と
いふことだ。

近衛任命

セグランは彼らの身が強張るのを見た。

なんとか減刑をお願いせねば、と口を切ろうとした矢先、キルヴァがなんと嬉しげに微笑んだ。

「ここにいる皆を、いまこのときより我が次軍師セグラン・リージュの近衛に任ずる」

セグランは意表を突かれた。それは彼らも同じだったようで、皆一様にぽかんとしている。

キルヴァは屈託ない調子で続けた。

「昼食時でつい油断しているひとときに、素早く行動を起こした君たちを評価する。どうかその力をセグランのために貸してほしい。」

近衛兵長は一番の年長者に任せようと思う。皆、年齢を言いたまえ。そうか。うん、では君だ。名は？」

まだ面食らったまま、兵のひとりが答えた。

「ルゲル・エギーユです」

「ではルゲル・エギーユ、そなたを次軍師近衛兵長に任ずる。受けてくれるな」

「は……ははっ」

キルヴァは首肯し、次に眼を向けた。

「兵副長は私を護るため身を挺した君だ。名を聞こう」

いきなり視線をぶつけられ、若者は戸惑いした。

「お、俺は、ラージャ・ミクルスです。でもあの、近衛兵副長なんてそんな」

「嫌か？」

「まさか！ 光栄です！ ただ、俺はまだ入隊して日も浅いし他にもっと相応しい人がいるのではと」

「相応しいか、相応しくないかは問題じゃない。不測の事態に遭ってもどのように行動できるのか、それが肝心なのだ。誰か、ラージ

ヤ・ミクルスが近衛兵副長で不満のある者がいるか？」

沈黙が返ってきた。

ほら、とキルヴァは笑い、

「君を近衛兵副長に任ずる。受けてくれるな」

「は、はいっ！ 謹んで拝命賜ります」

「というわけだ。セグラン、この九名の者たちが君の命を護ってくれる剣となり盾となるう。よく傍に置くように。よいな」

セグランは深々と身を二つに折った。キルヴァの自分の身を案じてくれる気持ちがただただ嬉しかった。

「ご厚意、感謝いたします」

「あのー、王子、俺の立場はどうなるんですかねえ？」

横から口を出したのは思ってもみない展開に眼を白黒させていたジエミスで、セグランは彼に面と向かい、きつぱりと、用済みだ、と断言した。

「うわ、ひでえ。ちょっと王子、そりやないですよー」

「そんなわけがなかるう。君はそのままで。セグランの補佐と護衛しっかり頼む。近衛兵をつけるのは今後君ひとりでは対処に限界があると見込んでのことだ、ルゲル・エギーユと協力して、どうかセグランを護ってくれ」

それにしても、と苦渋の表情でいままで黙っていたミシカが抗議の声を上げる。

「私とダリーを除け者にすることはないでしょう」

「すまぬ。だが言ったら止められたらう。危ないことはするなつて」

「それは、まあ。こぼれ矢があたらないとも限りませんし、どさくさにまぎれて不穏なことをやらかす者がいないとも限りませんからね、反対はしたでしょうけど」

「まあいいさ。大事には至らなかつたわけだし。でも王子、俺に黙つてこんなことはもう二度としないでくださいよ」

「わかつた。しかしこれで、ステラを堂々陣中に置いておける。皆、

はじめのうちは色々支障があるだろうがうまくやってくれ。よろしく頼む」

そう言うてにこやかに笑んだキルヴァが最後に自分に向けた一瞥を、セグランは見逃さなかった。

あとで話がある、とそのままざしは告げていた。

そしてそのことがなんであるか、セグランには既に察しがついていた。

円満な雰囲気は漂う中、待ったをかけた者が出た。

近衛任命（後書き）

昨日一日掲載お休みしてしまいました。えへ（寝ちゃったー）。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

意外な一面（前書き）

この小話のキルヴァも好きです。地味格好いい。

意外な一面

「しかし王子、急に近衛といっても、彼らだけじゃあなにをどうすればよいのか分らないのではないですかねえ」

「ごく当然の懸念事項を指摘したのはクレイで、よく言った、とばかりに頷いたのはキルヴァである。

「そうなのだ。誰かが指導しなければせっかくの近衛兵も隊としては機能しない。だから、早急に、是が非にでも、優秀な指導役が必要なのだ、クレイ」

「そうですね　って、え、ちょっと待ってくださいよ、まさか私にその役目をやれとおっしゃるんですか？」

「君が言い出したのだから、君がやりたまえ。君ならば適任だ」

「適任と言うより適当でしょ、それじゃあ。だいたいこつというのはダリーかミシカが務めるものじゃないですか。なんで私がそんなこと」

ダリーとミシカは口を揃えて言った。

「俺は兵長の仕事で忙しい」

「私は兵副長の仕事で忙しい」

「うわ、やる気なし、まるでなし！」

キルヴァはささやかな陰謀に勝利した笑みを向けて、クレイの肩を叩いた。

「頼むぞ、クレイ」

セグランから見えてちょうどキルヴァの影になり姿の見えないアズガルが珍しく口を利いた。

「……無駄に口数が多い奴もたまには役に立つ」

そしてすつと身を退いて天幕の外に出て行った。気配もなく音もなく。ほとんど誰にも気づかれぬまま。

本当に黒い影のようだ、とセグランは思った。

「あーよかった、言わないで。言ったらやらされるかなって思った

んだよな。俺、ひとにものを教えるってできないからさ、向いてねえんだよな、そういう仕事」

「そうねえ。代われるものなら代わってあげたいのだけれど、私じやか弱いから大の男を九人も面倒みるなんて無理なもの、ここはクレイに頑張ってもらうしかないわね」

カズスとエディニイは気の毒そうにクレイを見たが、どちらも任務を代わろうと言う気はないらしい。

セグランは神妙に頭を下げてお願いした。

「すみません。しばらく力を貸してください。よろしく願いします」

クレイはようやく諦めたようにおおげさに手をひろげて、全身で溜め息をついた。

「わかりましたよ、わかりました。王子たつてのご要望ですし？

やりますよ、やります。やらせていただきます。それで、いつからはじめます？」

「いまからだ」

澄んだ瞳に整った容姿で、いかにもひとの善い育ちの良さそうな青年であるのに、時々手加減なく非情であるらしい。

と、セグランが新たな評価を付け加える中、キルヴァは後ろ手を組み、眼を眇め、小首をちよつと傾げて、じつとクレイを見やった。

「明日からだ、明後日からだと、悠長に構えていられる余裕がどこにあるのだ……？」

「あ、ああ、そ、そうですね。はじめましょう、いますぐに」

「よし」

爽やかに笑って、キルヴァはくるつと横を向き、カズスとエディニイを名指しした。

「とはいえ、はじめからクレイひとりでは苦しいだろう。二人とも手伝ってやってほしい。まず九人を二手に分けて、体力測定を兼ねた面接をする。こちらはクレイが担当だ。もう一方は表でカズスが戦力の具合を実力判定する。エディニイは九人の所属する指揮官の

もとに行ってこちらの事情を説明し、異動届の提出と離隊届の作成と手続きを完了させてほしい」

「は！」

「はい」

かくて、一斉に行動開始した。

意外な一面（後書き）

登場人物整理、できていますでしょうか？
気になるなー。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

旧友への謝意（前書き）

ちょっと短め。区切りがいいので。

旧友への謝意

それからキルヴァは手持無沙汰に控えるダリーとミシカを振り向いて、

「君たち二人は休息の続きだ。と言っても、私の周りをこれ以上手薄にするわけにはいかないから、すまぬがここにいてほしい。私はステラと少し話してくる。セグラン、ダリーとミシカの相手をしてくれるか」

「はい。そうですね、体力測定の様子を見ながら三人で雑談でもしていきましょう」

キルヴァがステラのもとに行ってしまうと、ダリーがその後ろ姿を眺めながら言った。

「要するに、邪魔をせず近くにいろ、というわけだな」

「強かでないじゃないか。あれぐらい気丈でないと困るだろう」

セグランは感心したように言った。

「なかなかどうして、怖い一面もありますね。それに鞭も飴もお上手だ。思った以上に剣筋も冴えているし、出陣には縁がなかったはずなのに戦場慣れしていらした。兵法はまあ学ぶ機会が多いでしょうが、机上の空論と実践ではまるで違います。ところが見事に采配してのけた……あんなことは素人では無理です。ではどこでどうしてあのような技術を身につけたのでしょうか……？」

ダリーとミシカは顔を見合わせた。

ダリーは言いにくそうに眼を泳がせ、いったんは口をひらく。

「あー、それはだな」

「はい」

「いや、だから、その」

「はい？」

後が続かない。

口ごもる兵長に嘆息して、ミシカは助け船を出した。

「王子に直接訊くがいい。セグランなら教えてくれるさ」

ダリーはぱつと顔を明るくしながら、手を打った。

「そうだな、うん、それがいい」

セグランは怪訝そうに二人を見やったが、追及はよしておいた。

「……そうですか。では、そうしましょう」

目の前では五名の男たちが腕立て伏せの速さと回数を競っている。限界で倒れたものから面接をはじめるということで、クレイは様子伺いに余念がない。

セグランは、そういえば、と切り出した。

「……ミシカ、弟さんの容体は……？」

途端に、ミシカの形相が険しいものになった。

まずいことを訊いたようだ、とすぐに察して、セグランが話の矛先を変えようとしたとき、ミシカは取り繕った表情で薄く微笑した。

「……ん、まあ、変わらないよ。つまり全然良くなるなんてことだけどね……」

半端な同情を示さぬよう、セグランは苦心した。

次にダリーに訊ねる。

「……ダリーは？ 報復の目処はまだ立たないのですか……？」

「……捜しちゃあいるけどな。相手が相手だ、そう容易には尻尾も掴めんだろう」

セグランは押し黙った。

この十年は旧友にとっても決して平穏無事な十年ではなかったらしい。

それでも、誠心誠意、自分との約束を守り、王子を護ってくれたのだ。

セグランは旧友二人に頭を下げた。

「私にできることがあったら、どうか遠慮なく言ってください。いつでも、なんでもいい。次は私があなた方の力になる番です」

旧友への謝意（後書き）

思わせぶりな会話の断片がちらほらと。のちほど、のちほど。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

ダリーの話（前書き）

閑話休題。

近衛たる彼らのちょっとした個人的裏事情。或いは表事情。

ダリーの話

風の強い夜だった。

キルヴァは外で見張り番をしていたエディニイとカズスを天幕の内に呼び、内幕の中にいたミシカも加えて雑談に興じた。

夜は空で休むと言ってステラは日没と同時に姿を消し、セグランはクレイと一緒に新しい近衛の人事などを決めるため自分の天幕にこもっている。

思い立ってアズガルとダリーにも声をかけると、二人ともすぐに来て来た。久しぶりに、クレイを除いてだが、ゆっくり寛げるひとときを設けることができキルヴァは嬉しかった。

「あたたかいお茶でも淹れましょう」

エディニイがてきぱきとお茶を用意し、魚の燻製をつまみに添える。

時折天幕が風に煽られ大きく揺れたが、支柱がしっかりしているため、倒れたり吹き飛ばされる心配はないようだ。

他愛のないやりとりをしながら、キルヴァはお茶を啜り、燻製を筆って頬張る。自然と笑みがこぼれてくる。皆が無事で、揃っているのを眺めるのがなにより好きなのだ。

「そうだダリー、改めて訊くのもおかしな話なのだが、なぜ君は“戦場の黄姫”なんて通称がついているのだ？」

「げほ」

ダリーはちょうどお茶のお代わりを口に含んだところだったらしく、苦しそうに噎せた。

「げほ……あー、それは、あれですよ。なんとですかですねー」

「オウキ、即ち黄姫と聞くと、こちらの言葉ではなんだか雅やかな印象ですが、北の国ではオウキは前触れのない砂嵐、砂漠から来る死の黄色い風を意味します。まあそれだけ恐れられていたということですね」

ダリーに代わって答えると、ミシカは旨そうに燻製をゆっくり咀嚼した。

「そうなのか？」

「はあ、まあ」

ダリーは頭を掻いた。

「自慢できることじゃないですがね、北の国ではお尋ね者ですよ、俺は」

「え、なんで？」

カズスが即座に追及する。

その眼は興味津々で、明らかにもつと聞きたいと輝いていた。

キルヴァもカズスと同じ気持ちだったので敢えて止めなかった。

長い付き合いではあるが、個人的なことや過去のことまではなかなか深く話を聞いたり知ることが少ないのだ。

ダリーは胡坐をかいて、燻製を細かく箸りながら淡々と話しはじめた。

「……昔、ある組織に妻と子供を殺された」

カズスが仰天する。

頬張った燻製の欠片が口の端からポロリと落ちる。

「えっ。妻？ 子供？ ダリー結婚してたんだ！ それで、殺

された、だって？」

「……ああ。すぐに反撃して組織を壊滅に追いやったまではいいんだが、その中のひとりが北の情報部の首脳陣に在籍していたらしくてな、すぐに手配書が回って、首に高額賞金を賭けられた。まあ俺のことなどどうでもいいが、よくないのは、ひとりだけ討ち漏らした奴がいたことだ。俺は、そいつを追ってこの国まで来たんだ。しかし、地下に潜られて所在不明 誰か奴を匿う大物がいたらしくてな、かなり手こずっていた。なにせ土地勘はないわ、言葉も通じないわ、常識は違うわ、情報は足りないわ、金は尽きるわ、恨みは増すわ、腹は減るわ、喧嘩は売られるわで八方塞りよ。そんなときに、偶然知り合ったセグランと王子に助けられたんだ」

「嘘をつけ」

即座にミシカが話の腰を折った。

「道の真ん中で強引に王子の近衛に加えると迫ったんだろうが。それも、王子の目の前で」

「ああ、あのときはびっくりしたな」

キルヴァは当時を思い出して苦笑いをした。

「いきなりセグランに決闘を申し込んだな、君は」

「そうですね。それも、勝ったら近衛兵長に、負けたら近衛兵として雇ってくれとは厚かましいにもほどがあります。まあ、それをあっさり承諾してしまう王子も王子ですが」

「えええ？ 王子、承諾したんですか？ 俺がいま聞いても無謀で無茶苦茶だと思うのに」

キルヴァはカズスを見つめ、次いで手元のカップの中に視線を落とした。

「あのときは、私も母を亡くした直後で……近衛は腕の立つ者が欲しくてな、ちょうど探していたときだったんだ。それにダリーはセグランと互角で勝負がつかなかった。ミシカも文句は言っていたが技量は認めたようだったし、私に断る理由はなかったのだ」

「とまあ、人間成せば成る。俺は職と衣食住と身分と報復するための情報を集められる立場を手に入れた。いやほんと、心の広い王子に感謝しなければならんなあ」

ダリーは明るく笑い飛ばしながらも、その眼には暗い光が瞬いている。

不意にアズガルが小さく訊ねた。

「……奥方と子供はどんなふうになされた……？」

「……焼死だよ。家屋に火を放たれた。逃げ出さないよう、妻も子供も足首をへし折られて、妻の首には短刀が刺さったままだった。全身焼け焦げて顔なんてわからない有様で、妻は子供を抱きかかえたままだった」

ダリーの声が深く沈む。眼は虚ろ、但し闇をみつめているかの如

く暗澹としている。

「熱かつたろう、苦しかつたろうと思う。変わり果てた二人を見たあのとき、一度、俺も死んだに違いない……いまでも、あの夜のことを考えると凶暴な気持ちになる。絶対に許さない、絶対に報復してやる、たとえこの俺の全生涯を費やしてもな」

アズガルは無表情に頷いた。

「手を貸す。俺の力が要るときは呼べ」

カズスが真剣な顔で身を乗り出す。

「じゃあ、結局まだ仇討ちはできていないのか」

ダリーがかぶりを振る。胡坐の足を組み直す。

「俺が追って来た奴は殺した。だが、あとでわかったことだが、そもそも雇われただけで、黒幕が別にいるらしい。だからいまはそいつを探っているところだ。とまあ、なんでこんな暗い話になったんだ？俺の打ち明け話などつまらんだろう。え？」

それまで黙っていたエディニーが遠慮がちに訊いた。

「奥さんと子供さんの名前、なんて言うの？　どんなひと？」

「妻はイヴリン、子供はアルマディオ。妻は、そこそこ美人。勝ち気で鼻っ柱が強く、やんちゃで、手がかかる女だった。子供は俺に似た男の子でな、まだ二歳になったばかりの悪戯盛りで　あーやめやめ、辛気臭くなる。他の奴の話を聞こうぜ。そうだな、えーと、カズス！　おまえはなんで入隊したんだ？　前にちらっと聞いた限りじゃあ、おまえの家って代々続く豪農で、金には困ってないはずだろう」

「え、俺？　急に俺の話なの？」

「そつだ。働かなくても食っていけるくらいの田舎のいい家の息子が、なんで安い汚い辛い割に合わない兵士なんかになるうと思っただんだ？　出世欲か？　それとも世直し願望でもあったのか？」

ダリーの話（後書き）

戦乱から戦乱への中の、束の間の休息です。

次は、カズス。

二日間、更新さぼっちゃった。すみません。寝てしまいました。引き続きよろしくお願い致します。

安芸でした。

カズスの話（前書き）

意外に重い身の上でした。

カズスの話

キルヴァを別に、誰もたいそうな返事を期待してはいなかった。

だが戦場にいるときはまるで違う、天真爛漫を絵に描いたようなカズスから返って来た言葉は、意外なものだった。

「俺の身代りで友達が殺されて……俺は逃げただけで、なにもできなくて。そのとき味わった無力感とか絶望、後悔、惨めさ、あとはなんていうか、んー、世の中の理不尽さ？　そういうのがいつぺんに頭にきてさ、気がついたら郷を飛び出していたんだ」

カズスは燻製の最後の一片を口に放り込み、もぐもぐしたあと飲み込んで、立て膝に肘をつけて手首に顎をのせながら、ふと遠い眼をして続けた。

「あれは、王子と会うほんの少し前のことだから、十七くらいの子だな。あいつに天人を見に行こうって誘われたんだ。天人がよく来る場所がある、とっておきの穴場だと、そう言っただけで俺をいまも活動中の火山に連れて行った。二人で岩場を登って、火口を覗いた。でもそこで見たものは、天人数名と、十余名の武装集団だった。武装集団は天人を襲っていた。たぶん魔法で天人の力を抑えていたんだと思う。力づくで、無理矢理拘束している真っ最中だった。そのとき、俺がヘマをした。手元の岩を崩して転がしたんだ。案の定、すぐに奴らに気づかれた。俺たちは逃げた。でも追いつかれそうになっただけで、あいつが俺だけを逃がしてくれた。俺はひとり郷に逃げ帰った。あらましを説明して助けを連れて現場へ戻ってみると、変わり果てたあいつの亡骸があっただけで、その横に“他言無用”の立札があった。そのあと、俺がどうなったかと思いませんか？」

不意にカズスに訊ねられたが、咄嗟のことでキルヴァは返事ができなかつた。

「俺は褒められました」

言っただけで、自嘲気味に笑う。その眼は普段の彼からは想像もつかな

いほど苦痛に満ちていた。

「よく逃げた、よく無事だったって。俺は誰からも責められなかった。あいつの両親さえも俺の無事を喜んだ。理由はただひとつ、

俺が“宿命者”だったから」

「“宿命者”か」

アズガルが相槌を打つように呟く。キルヴァは背中合わせに座するアズガルの身体が熱を帯びたのを感じた。

「“カズ”を冠する者 罪と罰により責と業を負いし者。遙か古代より継がれし血脈と契約の楔。おまえもその使命を科せられたひとりなのか」

「アズガルは知っているみたいだな。あとは王子には以前ちよっとお話したことがありましたっけね」

「私は知らないわよ。“宿命者”ってなに。“カズ”が名前につくからなんだっていうのよ」

「……ま、そうだよな。“宿命者”っても、いまは知る奴の方が少ななか。まあ簡単に言うとき、余った寿命を身体に蓄える者ってことなんだけど」

「意味わからない」

エディニイは冷たく一蹴した。

「まず余った寿命ってなによ」

「天命以外で死んだ奴に残された命のことさ」

「それをどうやって身体に蓄えるのよ」

「力で」

「ふざけているわけ？ あんたね、それで説明したつもりなの？

温厚な私も終いには怒るわよ」

「ほ、本当なんだって！俺は大真面目だって！」

「だったらもつとわかるように言いなさいよ。省かないで、きちんと一から説明しなさい！」

「えー」

説明とか苦手なんだけどなあ、とぶつぶつ言うカズスをエディニ

イが激しく睨み脅す。

キルヴァはくつと笑った。

深刻な打ち明け話のはずなのにカズスにかかると思えば緊迫感が緩んでしまつのは彼の特性のなせる技なのか。それとも、そう見せかけているだけなのか。

「フェスタルザ宿命者」とは、まだ寿命が残っているにも拘らず死んだ者や生きる見込みのない瀕死の者から命の断片をその身に集めて溜めていく力を持った者のことだ」

キルヴァはカズスに代わって口をひらいた。

「昔からそうして命を集め続けてきた一族、それが“カズ”の血脈を継ぐ者。その溜めた命を地中深くに眠る怪物に注ぎ、命が満ちてはじめてそれは覚醒する。自らの復活のためにひとに知恵を授け、ひたすら眠りの中で目覚めの時を待つもの。覚醒しなければ封じることできないその古の遺産、かつて大陸を分断するほど壊滅的な被害を与えた創世の種のひとつ。緑を食い散らし、土を食い散らし、あらゆる生物を食い散らす。あまりにひどい所業のため天人が成敗に乗り出したものの、それは成らず、ようやくのことで地中深くに封印した長命のもの。それが」

「バル・パロイ緑の巨人」

あとをうまく引き取って、カズスが言った。感謝のまなざしをキルヴァに向け、勢いよく頭を下げてから先を続ける。

「大罪を犯した償いのために“カズ”の一族は大昔から連綿と契約と誓約の繰り返し、先祖が巨人殲滅目指してひたすら頑張ってきたから、残る“バル・パロイ緑の巨人”はあと二体なんだ。だけど、一族の血が薄れてきたせいかな適応者が　つまり命を集めて身体に溜めるだけの力を持つ者が　少なくなってきたいて、肝心の命もなかなか集まらない。まだ当分かかるだろう。あれ、微妙に話が逸れたな。まあ要は俺がその数少ない適応者のひとりだったことで、重宝されていたってこと。その俺を失うよりはあいつが死んだ方がましだったって言われて、俺が頭にきて、郷にいたくなくなつて、出奔して、腕

を見込まれて、徴兵されたところで、王子と会ったんだ」

カズスの話（後書き）

また一日お休みしてしまつた……。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

信頼（前書き）

和気あいあい。

信頼

「もしその話が本当ならば」

と言ったのはミシカで、瞳孔は開き、形相が凄まじく険しいものになっている。

「カズス、おまえ危険なんじゃないか。王子にもしものことがあったら、その命を吸うということだろうが。違うのかい。え、どうなんだ？ 返答如何によつては斬つて捨ててくれる」

「えーと、まあそうなんだけど。うわっ、待った、待った！ 早まるな！ だつて王子がそれでもいいつて言つたんだ！ それでもかまわないから傍に来いって」

「王子、本当ですか」

「本当だ。ミシカ、剣をしまいなさい」

ただごとではない剣幕で身を浮かし、抜剣したミシカを窘めて、キルヴァはエディニイにお茶のお代わりを所望した。

「バル・パロイ 緑の巨人”は我が国土に眠っている。だつたら、カズスに協力するのも王子たる私の務めだ。違うか」

「えっ」

「そういうことだ。それに、私としては、この中の誰が何者であってもかまわない」

キルヴァは真顔でひとりひとりを見つめ、美しい翡翠の瞳を細めて無防備な微笑を浮かべた。

「私の傍にいてくれればそれでいい。ただそれだけでよいのだ」

「……なにか、気懸りなことでもあるのですか」
言ったのはミシカだった。

キルヴァはミシカを見た。

「最近とみに我々のことを大切だの傍にいてくれだのとおっしゃいますが、なにかあったのですか？」

「なにかとは？」

「さあ、私ではわかりかねますが。ただ随分と心もとないようなお言葉を口にされるので」

キルヴァは自分の言動をちよつと振り返ってみて、ミシカの指摘をなるほど、と納得した。

「……確かにそうだな。私は少し神経質になつていようだ……実を言うと、先の戦でも参戦する前から君たちを失いやしないかと、ひやひやしていた。天人に襲われたときだって、真つ先に私を庇つただろう。あのときはステラに助けられたが、もしあの攻撃の直撃を受けていたらとてもただでは済むまい。そう思うとぞつとする。

私のために君たち全員が死んでいた可能性だつてあるのだ……だから、こうして皆が無事な姿がとても嬉しい気持ちがして　やはり女々しいかな」

ダリーは手持無沙汰だつたようで、おもむろに懐剣の手入れをはじめながら、おかしく真面目くさつた顔で述べた。

「そんなに心配されずとも、俺たちはちよつとやそつとじゃ死にやしません。なにせこう見えても何度も修羅場をくぐつてきているもんで、危険には免疫と回避能力がついてるんです」

「そうそう。俺なんて王子のためならたとえ火の中水の中どこへでもお供しますけど、死ぬつもりなんてまるでないですつて」

「あんだ、殺しても死にそうにないしね」

エディニイがびしつと茶々をいれると場に笑いのさざめきが起こつて、雰囲気緩和いだ

「……そうだな。私の杞憂が過ぎたか。もう少し君たちを信用しなければいけないな」

「そうしてください。私たち、いつも王子の声の届く距離におりますから」

エディニイの眼も声も優しく、キルヴァの背を撫でるように安堵感をもたらした。

だが、その反面、どこか憂いを含んでいるようでキルヴァの心を僅かに搔く。

この前訊ねたときははぐらかされたが、いまならば皆もいるし答えてくれるかもしれない、と思いき口を開こうとした矢先、天幕の入口で声がかかった。

「失礼します。セグランです。入ってもよろしいですか」

「よい。入れ」

セグランが遠慮がちに姿を現した。

「クレイはどうした」

「有能な近衛になるために”講座の指導を熱血続行中です。ジェミスが助手をしています。私はいないほうがよさそうなので抜けてきました。よろしければこちらにお邪魔してもいいですか？」

「もちろん。君にはちょうど話があった」

キルヴァはちらとエディニイを見た。しかし既にエディニイの注意は自分から逸れて、また薄い壁を張られたことを感じた。

仕方なく次の機会を待つことにして、ミシカの隣に腰をかけたセグランに眼をやる。

「訊きたいことがあるのだ」

「はい」

「天人のことだ」

「……はい」

キルヴァはセグランが著しく緊張するのを目の当たりにして、急に周囲の気配が気になった。

「エディニイ、カズス、外を見張ってくれ。私がいいと言うまで誰も近づけるな。アズガルにもそう伝えて警戒しろ。ここでの話は後できちんと話す」

「はい」

「は！」

ただちにエディニイとカズスが出ていく。残った四人は車座になった。

信頼（後書き）

友達はいますけど、仲間はいない。

そういうひとは多いと思います。

ちなみに私は仲間がいます。友達は少ないけど、信頼できるのが、二人。これは、自分的にはちょうどいい数です。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

天人狩り（前書き）

最近、4ステラの出番がないですね。すみません。

天人狩り

「単刀直入に訊く。スザン軍では天人が戦闘要員として参戦していた。あれはどういうことだ」

「……“天人”が、軍用武器として投入されているのです」

予測していた答えとはいえ、キルヴァの心は重く沈んだ。

「それは、スザンだけなのか。それとも我が国も同様なのか」

「同様です。おそらく、どの国も多かれ少なかれ、天人を保有していることでしょう」

「保有？もの扱いではないか！」

「おそれながら、左様でございます。さすがに公になってはおりませんが、水面下では激しい天人捕獲競争が行われております。それも昨日今日の話ではありません。もう何年も前、いえ、もつとずつと以前からなのです」

十年前のシュイの湖での出来事がよみがえる。蒼い血を流して死にかけていたステラ。では、あれはやはり人為的な罠だったのか。それも天人が最も忌み嫌う誇りと自由を奪う行為に他ならない。あまつさえ、命すらも。

キルヴァは握りしめた拳を震わせた。ステラの翼にいまもなお残る青い傷痕、あれをつけたのは。

「父上の、命なのか」

「はい」

「どうして」

「陛下のご心中を私如きが勝手に憶測するとはおこがましい限りですが、この件の背景には各国間との軋轢があるかと存じます。度重なる侵略戦争は世界各地で絶え間なく引き起こされ、七年前を境に我が国もその渦中に巻き込まれました。私は、この十年軍師リユージェル・ダツファリーに師事し、自国のことのみならず、他国の国政や軍閥、軍備規模なども学んでまいりました。そうして見えてき

た現実の一面に、歴然たる国力の差があります。地下資源が豊富で農地開拓に向いている土壌を有する国は豊かで強いです。一方、資源に乏しく、土壌に恵まれぬ国は貧しく、弱いです。ぶつかり合えば、勝敗など火を見るより明らかです。しかし、この負け戦を五分にまで持ち込める方法があったとしたらどうです？ それも余計な国費をかけず、国民に増税の負担もなく、命の危険もない」

「天人兵か」

「そうです。まさしく一騎当千、弱小国が大国と張り合うのにこれほど相応しい武器も他にはない。捕まえて、名を奪い、契約を交わせばよいのです。数も種族も羽の数も多いほどいい。強い天人を捕獲すればするほど強みとなる、と、そう教えられてきました。おそらく、陛下も同様の進言を受けたことと思います……」

「リユーゲル・ダツファリーか」

「はい」

「ばかな！」

キルヴァは声を荒げた。セグランに掴みかかりたい衝動を、ぐつと堪えるのが精いっぱいだった。

「そうして天人を集めて互いに相争えば大昔の天人戦争の二の舞になるであろう。大陸全土が焦土と化して何十年も草一片も生えぬ荒地となる。人も獣も餓えて死に絶え、国家としての存続はおろか、文明そのものが衰亡するだろう。そんな自明の理が、なぜわからぬ父王も、軍師も、他な国の王たちも、人民を導く立場にある方々らが、わからぬはずがあるまい。なのに、なぜだ。なぜなのだ、セグラン！」

「欲ですよ」

答えたのは、ダリーだった。磨いた懐剣の刃を矯めつ眇めつしながら、抑揚のない声で先を続ける。

「なにかを望む心が正しい眼を曇らせてしまう……別に珍しいことじゃありません。古今東西、連綿と繰り返されてきたことです。自分の持ち物でないものを欲してしまう、他人のものがよく見えてし

まう、正しくないと知ったうえでも諦めきれず間違った判断を下してしまう。すべて、ひとの欲のためです」

「僭越ながら……ダリーの申すとおりです」

キルヴァはミシカを見た。ミシカは苦渋に歪んだ瞳を床に伏せた。「お立場が上ならば上なだけ、より高いものを望んでしまうのでしよう。領土拡大、国益の増加、希少資源の確保、新たな農地の開墾……どれひとつをとっても戦争を起こすだけの大義名分になります。そして、他国が兵力の増強に少しでも乗り出そうものならば、それを脅威に思うのは仕方のないことでしょう。戦々恐々とただ怯えるよりは、自らも負けぬだけの軍備を整える、そうして軍備にかかる防衛費がかさみ、国庫を圧迫し、国民に税が加算され、それでも賄えぬ場合はどこからか補填せざるを得ないため、手っ取り早く、他国の侵略を目論む。これでは戦争の悪循環がやみません。やむわけがありません……そしていまダリーや私が申し上げたことなどは、どなたさまも先刻承知のはず……それでも、天人の登用が有効な武力手段であることが紛れもない事実である以上、もはや手を引くわけにはいきますまい。少なくとも、他国に後れを取るまいとする姿勢は、単純に是か非かの答えは出せないものと思います」

「つまり、天人狩りをやめさせるにはすべての国家を止めなければならぬということか」

「そしてそのようなことは不可能でしょう。王子ならずとも、他のどなたさまでも」

「たとえ不可能でも誰かがやらねばなるまい。事態は急を要する。気づいた誰かが動くのだ。さもなければ、ライヒエン国とスザン国だけではない、大陸全土の国家間で血で血を洗う争いが起きてしまう 第二次天人戦争の勃発だ……！」

「それは、起こるでしょう。起こるべくして起こるのです。それも遠い未来の話ではありません。事実、もう止められないところまで来ているのです」

ようやく、セグランが重たい口をひらく。

「スザンとの先の交戦で戦場であったことは既に各国に知れ渡っております。これまで暗黙の掟で天人の存在は秘したものであったのに対し、それが明るみに出たとあつては、いままで秘密裏に行われていた天人の暗躍もこれからは表立ったものとなるでしょう。すべての国家は威信をかけて天人兵の増強に乗り出し、天人狩りはますます活発になります。近いうちに国民全員に天人捕縛の指令が降りても、私は驚きません。むしろそうなる公算の方が高いです」

「……だが、そんな暴挙を天人がいつまでも黙って見ているわけがない……！」

「そうです。国家間の戦争などは序の口です。それから起こる戦争は、まさに天人対天人、ひととの契約に縛られたものたちと同士討ちなど本意ではないものたち、ひとを憎悪し、恨み、怒るものたちそして我ら人間も渦中のもとなる。一度はじまってしまえば取り返しのつかない、ひとと天人、双方どちらかが滅びるまで戦いは終わらない……そして我らひとは、天人に太刀打ちなどでできやしません。なにをどうしたところで勝ち目などないのです。私は　私は、何度も陛下に天人と関わり合いにならぬよう進言申し上げました。天人狩りをやめるよう、捕らえている天人を解放するよう、お願いも致しました。戦争回避のための手立てを文書にもしたためました。平伏して、何度も何度も平伏して、危険を訴えました。しかし……ついに聞き入れてはいただけませんでした」

セグランはキルヴァに深々と頭を下げた。

「力及ばず、申し訳ございません……」

「頭を上げよ。そなたのせいではない」

「　王子、王は次のライヒエン国との一戦は天人のみを出陣させるつもりです。勝つための戦ではなく、自らの力を誇示するための戦、速やかなる和睦を優位に結ぶための戦です。ライヒエンに、イシユリーの天人兵の強さを見せつけるおつもりなのです」

「我が国に囚われている天人はそれほど多いのか」

「細かい数字はのちほど申し上げますが、多いです。そして強いで

す。しかし、強ければ強いほど目の敵とされるでしょう。ライヒェンと和睦を結ぶのが目的であるのなら、天人の力など借りてはなりません。いえ、できれば武力などないほうがいい。王子、お願いします。王をお止めください。このままではライヒェンと手を結ぶどころかそのまま天人との開戦にも繋がりがねません」

セグランの必死の訴えに、キルヴァはただ一言で応えた。

「わかった」

そして、セグランの頭を上げさせた。

「……しかし、こんなに急で大切なことをなぜ黙っていたのだ？」

「急な事態になりそうだと判別したのが、ついさきほどでした」

「そうだったのか。そしてすぐ知らせてくれたのだな。ありがとう、セグラン」

「しかしながら、この情報は機密でして、本来次軍師たる私の耳には届かないものなのです。ですからこのことに関しては知らないふりで、この企みを阻止しなければなりません」

「よし、では、いまから作戦開始といこうではないか」

キルヴァは一同を見回して言った。

「さて、皆の知恵を貸してくれ」

天人狩り（後書き）

この物語は頭をつーかーうー！

現在、次なる戦の前の頭脳戦へ向けて展開中。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

誓いの言葉（前書き）

キルヴァとステラです。

意外に接点の少ない二人のエピソード。どっぞおつきあいください。

誓いの言葉

翌日、早朝。

クレイ・シユナルツァーがライヒェン国に発った。

「近衛教育は取りあえずジエミスに引き継ぎました。戻りましたら、また私がびしびしと飴と鞭を振るいます。私が留守でも、どうか身辺にご注意を。では行って参ります」

次いで、エディニイ・ローパスがスザン国に発った。

「しばしお暇いたします。お身体にお気をつけて。くれぐれも薄着で外出なさったり、おかしなものを召し上がったりなさらないでください」

「私のことはよい。エディニイ。絶対に無茶をするな。ただでさえ危険な敵地だ、加えて君は女性で美しい。私は心配だ……君になにかあつては、私は自分を許せないだろう。だから、無理はよせ。必ず無事で戻るのだ。よいな」

エディニイは一瞬泣き崩れそうな表情を浮かべたが、すぐに唇を引き結び、無言で礼をして背を返した。

たちまち、朝靄の中に消える。

「……王子は天然で口説かれるからあいつも大変だなあ」

「なにか言ったか、カズス？」

「いえいえ、なにも。俺、クレイとエディニイの分まで頑張りますから」

「ああ、頼む」

「王への使者も発ったんですか」

「いしましたが。一両日中には戻るだろう。それまで色々やらねばならないことがある」

「なんでも言ってください」

キルヴァはカズスの懐に半歩深く踏みいって、小声で命じた。

「鍛冶職人と鎧職人ですね。わかりました。ただちに腕のいい

のを手配します。アズガル！俺ちよつと外すから、王子を頼む」
アズガルは既に陰に控えていた。無言で、さっさと行けというし
ぐさをする。

陽が昇った。やわらかで透明な光が射す。いくぶん冷気を含んだ
風が面を撫でる。

清々しい朝の空気を深呼吸して、キルヴァは天空を振り仰ぎ、一
声かけた。

「ステラ」

ほとんど真上から、火の天人が頭を下に、長い髪をたなびかせな
がら、垂直に降りてくる。キルヴァの近くまで来ると反転して、翼
をたたむ。

「なんだ」

「おはよう」

「『おはよう』？」

「朝の挨拶だよ。朝がおはよう、昼がこんにちは、夜がこんばんは、
だ」

「……では、おはよう。それで？私を呼んだのは挨拶指導のため
か？」

「少し話をしたい」

「またあの狭い中か。外ではならんのか」

「天幕がいやならば、外でもよい。そうだな、ちよつと視察にでる
か。アズガル、来い」

キルヴァはセグランとダリーにその旨を告げてから、朝食の支度
や見張りの交替で忙しい陣中をよぎった。ふわふわと漂いながら
あとに従うステラへの視線が熱い。あからさまな敵意、反感、興味
本意、困惑と、さまざまな心中を物語っている。

そして、およそ戦場には不似合いな美貌が男たちの眼を惑わすこ
とにも、否が応にも気づかされる。

キルヴァは、なぜか胸がうずいた。周囲の視線が疎ましく感じら
れた。

「ステラ、手を」

「なんだ」

「手をひく」

「なぜ」

「ひきたいのだ。いけないか」

「……ひとに触れるのはまだ慣れぬ。まあ、おまえなら……どうか
な」

「いやだったら、離せ」

キルヴァは手を差し伸べ、ステラはためらいがちにほんの指先だけを重ねた。キルヴァはほとんど温もりのないステラの白い指先を握ったまま、足早に陣地を抜けた。

スザンの領地が彼方に見渡せる丘陵の頂まで登る。野生のゴールデン・ツリーの巨木が一本しなやかに立ち、鮮やかな黄色い花をブドウの房の如くたわわに咲かせていた。

キルヴァはステラの手を離さぬまま、木の根元に座り、朝の光に滲む地平を眼を細めて眺めた。ステラはすぐ隣に寛いだ恰好で宙に留まっている。

「こうして……二人だけでゆっくりと話すのははじめてだな」

「おまえはいつも大勢に囲まれているからな。私の出番などないのさ」

「そんなことはない。私はずっと夢見心地で考えていた……そなた
ともしも再会できたらあれも話そう、これも話そうと。だが、いざ
再会してみると、胸が詰まってなにを話せばよいのやらわからなく
なってしまった。　　ジアが亡くなったことは、知っているか？」

「ああ。あれは頭の固い、面白みのない、鍛冶職一筋の男だったが、
分別はあったな。よく私の面倒を看てくれた。おかげでこのとおり
だよ。……あれは、私と風ので葬った」

「『風の』？……金髪蒼眼、短髪で、十翼の……風の天人のことか
？」

「おまえ、奴を知っているのか？」

「一度、ごく最近少し話をしただけで、名は知らぬ。だが、ジアを看取ったと話されていた。口ぶりからすると、ジアとは旧知の仲であつたような気もするな」

「ああ。奴も、あれには世話になつたようだ。まあそういうわけで私と奴は二人であれを火葬にし、風葬にした。胸を患つて長く寝たきりだったが、最後はそう苦しまなかつたぞ。おまえとセグランの心配をしていた……そうだ。あれからおまえ宛に託されたものがあるのだが、その件についてはなにか聞いているか？」

「少し」

「その分だと、まだ受け取つてはいないようだな」

「……風の天人は、それは、天人とひとの運命を左右する力を持っている恐ろしいものだ。私の手元には届かぬように願つていて、言つていた。それがなんであるか、私は知らない。正直、少し気後れしている……十翼の天人にさえ恐ろしいと言わしめる“もの”など尋常な代物ではない。そなたは、それをどう思うのだ？」

蒼眼が、キルヴァを直視する。サファイアそのものの如く、美しい双眸だ。

「あれは、打つてはならぬものを打ち、造つてはならぬものを造り、完成させてはならぬものを完成させたのだ。おまえだろうと、誰だろうと、手にしてほしくはない」

「……ではやはり、いまはまだ、私は知らぬままにしておこう。おそらく、いずれ遠からず知るはめにはなるだろうが、そのときが来るまで私は訊くまい。それでよいか？」

ステラは判然と答えなかつた。

眼が逸れて、繋がれたままの手に視点が向く。だが振りほどこうとはしない。

「話とはこのことか？」

「いや、すまない。これからが本題だ」

「もつたいぶらず、さつさと言え」

「そなたに頼みがあるのだ」

「なんだ」

「私の、七人目の近衛になってほしい」

キルヴァは少し強く、手を握りしめた。

「私のために、私の近くにいてほしい。これは、強制ではない。そなたさえよければ、受けてほしいのだ。私は、できる限りそなたの自由を尊重したい。誇りを傷つけない。だがその役職に就くことで、そなたを一部とはいえ、束縛することにはなるだろう。

そなたを私の近衛に置くという名目があれば、誰も他にそなたに手が出せない。そしてそなたが私の傍に在ることを否定もできない。どうだろう、考えてみてもらえるか」

「私はおまえのものだ」

ステラは、ためらいがちにキルヴァの手を握り返した。

「何度も言わせるな。私はおまえゆえにすべてを委ねると誓っただろう。おまえの近衛だと？ よかろう。自由などいらん。誇りはおまえゆえにある。束縛がどうした、望むところだ。私はおまえの傍にいられば、ただそれだけでいい」

「……本当に？」

「天人は嘘をつけぬ」

「……ありがとう、ステラ」

ステラはキルヴァの心の裡を読んだかのように、付け足した。

「たとえいつか、私の天人としての力を必要とするときが来たとしても、おまえは私を好きに使えばいい。私がいいと言っているのだから、それをおまえがうしろめたく思うことはない。私がおまえを恨みに思うこともない。その結果、なにがどうなるかと、なにものをも敵にまわそうと、すべて私が望んだこと。それだけは憶えておくがいい」

ゴールデン・ツリーの甘い芳しい薫りが胸に染みだ。

繋いだ指先から伝わる命の脈動が、なんとも尊く思われた。

キルヴァはそのままステラの手を胸に引きよせ、心臓にあてた。そして言った。

「覚えておこう。そなたも、覚えていてくれ。私は、そなたと離れない。そなたを裏切らない。私は決して、そなたを放さない」

誓いの言葉（後書き）

次話、新章開始です。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

第五章 戦場に咲き狂うといふこと

軍議（前書き）

いよいよ新章です。まず、軍事会議から。

第五章 戦場に咲き狂うということ

軍議

イシユリー国王デイレク出席のもと、軍議は紛糾の極みにあった。いわば、公然の秘密であった天人兵の存在がいに明らかにされ、その兵力を持つてライヒエン国を急襲し、従属させ、一気に属国化を計るという強攻案が軍師リューゲル・ダツフリーにより提出されたのだ。

丸二日の討議を経て採決には至らなかった。

賛成派、反対派、ほとんど互角の言い分が軍議の進行を妨げ、停滞させていた。

「リューゲル軍師、あなたは天人兵が強い強いとおっしゃるが、私どもにしてみれば寝耳に水　その存在すらもいまはじめて知った次第なのですぞ。ましてや天人を隷属させ兵士に仕立てるなどと、一概には信じがたい事実です。そんな突拍子もないことをすぐに信じる、信用しろ、と言われて納得できるわけがないではありませんかか」

「そうですね。ただでさえ天人はひととは慣れ合わぬ種族です。意志の疎通すらままならぬ相手に、どうして服従などさせるのです。どうやって契約を結び、味方にしたのです。いえ、そもそも天人兵の種族は？　何翼で、何人構成で、どんな攻守をみせるのですか？」

「そんな細かいことはどうでもよからう！　我らが軍師殿がやれるというのだ、やれるに決まっておる！　なぜそうまで強弁に反対するのだ。別によいではないか。俺の部下は死なずに済む。天人兵でもなんでもいい、目障りなライヒエンとスザンをとっと黙らせてほしいものだ」

「確かに。いまは目先の勝利を優先させたいな。長引く戦争で民が疲弊しきっている。徴兵制で若い労働力はみんなそっちに持っていかれて耕地は荒れてきたし、収入減で消費は低迷、国益も下がっている。一日も早い終戦は民の待ち望むところ、それも自分の旦那や

息子が犠牲にならずに済むならば、言うことなしじゃないか」

「方々、お待ちなさい。問題はそれほど単純なものではありませんぞ。あちらも天人兵を用意してないと断言できますのか？ 万が一にも、こちらが先に手出しして、報復されたとして、あとで文句は言えますまい。第一兵力が僅差の場合はどうするつもりで？ 軍を出勤させる？ 和平会談を設ける？ その前にスザンが攻めてきたらどう迎え撃つと？」

「これこれ。皆、ちと喧しくはないか。王の御前であるぞ」

「思うになぜライヒエンだ？ いま攻めるべきはスザンだろう。先の小競り合いでスザンの王子の首も取ったことだ、内政も乱れているに違いない。天人兵でも我軍でもなんでも、とにかく、相手にするならばライヒエンより先にスザンだ」

「スザンよりライヒエンだ！ スザンとは国力が違う。我が国とあまり差が出ると手出しするのも困難になるだろう。とかくライヒエン王は曲者で知られている。いまはまだ静観の姿勢を崩していないが、我らがスザンの攻略にかかった途端に背後をつくというやり方は常套手段だ。叩くならば、やはりライヒエンが先決だろう」

そこへ、ディレクのもとに伝達があった。

「……そうか、わかった。皆の者、一時休会とする。リューゲル、ついて参れ」

そして、さっさと退席した。

国王不在により議会は中断を余儀なくされ、出席者らはしばし解散した。

ディレクは紫紺の長いマントをたなびかせながら、大股に回廊を渡っていく。あとにはリューゲルと専属護衛の近衛でジレフ・マリベスが続く。

王宮でもごく限られた人間のみ出入りを許された居住区と国政の中枢である政務区の境にある中庭に出た。

余計な技巧を施していない、緑も花もない、ただ四角く切り取られたかの如くぽっかりと口を開けた空間に、片膝をつけて丁重に頭

を垂れた人間が四人、黙して控えていた。

「面を上げよ」

今年四十五になるディレクの顔が綻ぶ。亡き妃におもぎしのよく似た息子は彼の掌中の珠であると同時に唯一の弱点でもあった。

「キルヴァ、息災だったか」

「はい。父上も思ったより随分とお加減が良さそうので安心いたしました」

「リユーゲルが大袈裟に騒ぎすぎなのだ。私は平気だと申ししたのに」

「なにが平気なものですか！ 王のおっしゃる『平気』が平気であつたためしなどございませぬ。王子の前だからと言つてとぼけるのはよしてください。しばらく絶対安静の告知をされたほどの負傷でしたでしょう。もっとも、いまは本当に良くなりましたが。お久しぶりでございます、王子」

「ああ。そなたも元気そうだなによりだ」

「セグランはお役に立っておりますか？」

「無論だ。よく私を助けてくれている。そうだ、まだこの件では礼を言つてなかつたな。遅くなつたが セグランを私のもとへ返してくれてありがとう、リユーゲル」

「いえいえ。十年かかりましたが、なんとか形になりました。もうひとりの私の弟子 次軍師アニエル・オースターと共に、どちらを王子が選ばれるにせよ、私のあとを継ぐには相応しい次代の担い手です」

「そのような話はあとでよからう。それで？ 戦線を離れてまでわざわざ近衛の認定に足を運ぶとは、今度はどのような素性のものなのだ？ ダリー、ミシカ、アズガル、そなたたちの眼にはかなくなつたのか？」

ディレクはダリー・スエンディーに口答を許した。

「十分に」

「ほう？ それで、そのものはどこにおるのだ？ 連れて参るがよ

い

「ただちに」

しかしキルヴァは天空を浅く仰いだきりで、動こうとしない。

ディレクは息子を訝しげに見やり、キルヴァはやや間を溜めて微笑む。

「ステラ」

第五章 戦場に咲き狂うということ

軍議（後書き）

軍事会議。この頭の痛いもの。そして避けては通れないもの。会話力、センス、臨場感が問われるもの。あああ。自分で言っておきながら自爆。軍議はまだ続きます。精一杯の筆力がかかっていますので、生温い眼で見てください。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

十二翼天の近衛兵（前書き）

軍議、控え目な第二回目。あと一回で軍議は終了です。

十二翼天の近衛兵

そして、一瞬のちに、音もなく不意に舞い降りた至高の天人を目の当たりにした。

白皙の美貌、蒼い双眸、甘やかな金色の美しい長い髪、白い軍服に蒼い鎧を纏い、蒼い鞆に納めた蒼い柄の剣を腰に佩いている。だが、なによりも眼を奪うのはその純白の翼である。

ディレクもリユーゲルすらもしばらく絶句して硬直していたが、ややあつて、喘ぐような眩きが絞り出される。

「……十二翼天……！」

「はい。私の天人です」

「なんと　なんと　」

「私の剣となり盾となることで契約いたしました。以後、私に従っております」

突然、リユーゲルがキルヴァの足元に跪いた。

「王子！　どうか、この者を私に頂戴したい！　この者がいれば

十二翼天がいれば　我が国の天人兵団は完全無敵、史上最強のものとなる。そうすれば世界制覇、すべての国の統一も夢ではない。あなたさまのお父上が大陸の初代統一王として君臨するもそう遠い未来の話ではなくなります。どうか、どうかお願いです王子、キルヴァ様……！」

「待たれよ、リユーゲル。父上、天人兵団とは　いったい、なんのことですか？」

ディレクは、長年ひた隠しに隠してきた最高機密を、ついに明かした。

「そのまま、言葉通りのものだ」

「言葉通り……まさか。では、天人を兵士として登用したのですか」「そうだ」

ディレクはキルヴァを正視した。キルヴァもディレクを正視した。

父と息子は長い間沈黙を挟んで見つめ合い、互いの眼の中に色々な感情が入り乱れるのを眺めた。そしてついに、キルヴァがいったん眼を閉じ、ゆっくりと、ひらいた。

「……水を差すようで申しわけありませんが、ステラは兵団に参加はできません」

「なぜだ」

「私とステラとの契約事項に反します。私たちは、自由を束縛せず、誇りを傷つけず互いを尊重し、傍を離れない、この三点で合意しております。ステラを兵団に所属させるというのであれば、この三点すべての契約に反しているので、勝手に破棄され、そればかりか、私の命を契約履行の代償に求められるかも知れません」

「なんだと」

「十二翼天との契約です。そのくらいの危険は当然でしょう」

「しかし そなたは王子なのだぞ！」

「十二翼天が私のものになると言うのです。この世にも美しく強いものが。断れません。断るなんてあり得ませんよ。迷うことだってしません。父上だって、そうでしょう？」

ディレクはぐつと返事に詰まった。

突然、リユージェルが弾けたように笑声を上げた。

「はははははは！ さすがです さすがですよ、王子！ やはりあなたさまはディレク王の血をひく御方だ。いままでも驚かされたことはたびたびありましたが、まさか十二翼天までも従えるとは嬉しい誤算です。本当に、なんとという大器だ。まったく計り知れない…… よろしいでしょう、十二翼天の身柄は王子預かりのものです。私に異存はありません」

「父上は？」

ディレクは渋い顔でいかにも不服そうに訊ねた。

「……あのようなものを近くに置くなど、危険はないのか？」

「完全に。天人の誓いは絶対不可侵です」

「だが、所詮ひとに非ず。信用などおけるものではあるまい」

「お言葉ですが、天人の矜持は並々ならぬ強固なものです。そして公平さはひとのそれをしのぎます。私はこの者に命を預けること、一抹の不安もありませぬ」

「そなたがそうまで言うならば、認めねばなるまい。よい、わかった。そなたの好きにいたせ」

キルヴァは深々と一礼した。

「ありがとうございます」

ディレクはステラを一瞥したがなにを言うでもなく、キルヴァの肩を抱いて踵を返した。

「軍議の途中であった。そろそろ戻らねば。いまからでもよい、そなたも参加せよ」

ディレクがキルヴァを伴って会議場に戻ったときには既に席は埋まっていた。十の領地の領主と軍師と次軍師、それに議事進行役と書記、政務官と庶務官、内務大臣二名と外務大臣二名が円卓を囲んでいる。

皆、キルヴァの姿を認めると一斉に起立して礼を尽くした。議事進行役がディレク王の隣に席を設けようと、小さな動作で席の移動を申し送ったところ、内務大臣のガストロ・マテーシスが鼻を鳴らして異議を唱えた。

「いくら王子と言えども、儂より上座とはおかしな話ですなあ。いまは軍議の場ですぞ。王子は第四領地の領主なのでから第三領主と第五領主の間と席が決まっております。いまは副領主殿が代替えで出席されておりましたなあ。その者を後ろに立たせて、王子はそちらに座るのが正しかろう」

「ガストロ殿！ 王子に対して無礼でござろう！」

「そうですね。このたびのスザンとの戦においても功績があり、いまなお戦線に立っていらっしゃるのです。その王子に向かってなんといい草ですか！」

喧々囂々、非難の嵐が吹き荒れそうになった、その一瞬の間をとらえて、ディレクが制するより先に、キルヴァが手を差し上げた。

「よい、内務大臣の申す通りだ。私はあちらの席に就く」

憤懣やるかたないといった様子でガストロを敵視する者々を一瞥したものの、デイレク王は特になにを言うこともなく、黙って席に着いた。

全員がこれに倣い、着席する。

そしておもむろに軍議の続きを開始した。

デイレクがなにも言わずとも、キルヴァは副領主であるリュトリユス・アルモニーからそれまでの進行過程を小声で報告を受けているようだった。

その間、天人兵団の参戦の余地や流用についての成否、勝率の確立、被害状況の予測、国家としての面目問題などなど、様々な憶測を含むやりとりが激しく応酬された。

デイレクはじつと沈黙を吞んでいた。

天人兵団を秘密裏に鍛え上げていたとはいえ、実践に用いるとなると、軍議で了承を得なければならぬ。その軍議において賛否両論の論争があることも、思うように流用させられないことも、予測できたことだ。だが、最終的には認めさせるつもりでいた。

その討議も今日でいい加減出尽くして、明日には採決を迎えられるだろう。

それまで余計な口を挟むことはしないつもりでいた。重要な案件は、口数が少ないほど発言に重みが出る。

デイレクは大勢を見極め、多勢無勢の人間を束ねるという至難の技の術を心得ていた。即ち、沈黙の価値を学んでいた。経験上、沈黙こそがいざというときに効力を発するのだ。

口出しするつもりはなかった、キルヴァが拳手するまでは。

十二翼天の近衛兵（後書き）

次話、キルヴァ討議参戦。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ライヒェン攻略の策（前書き）

軍議終了。

次話、いざ、敵地へ。

ライヒェン攻略の策

「議長、発言の許可を願います」

「発言を許可します。第四領主キルヴァ王子、どうぞ」

「ありがとうございます」

王子の発言とあって、場は静粛になった。皆の注目をさりげなくやり過ごしながら、キルヴァが口を切る。

「ライヒェンかスザンか、というのであれば、スザン攻略が先決かと思えます。なぜならば、現在はライヒェンよりもスザンの国力が劣っているからです。とはいえ、我が国が安易に独力で制圧できるほど弱体化しているわけではなく、たとえ攻めても、ライヒェンに横から茶々をいれられるかもしれませぬ。ライヒェンを牽制しつつ、スザンを征服するということは、非常に困難です。しかし、リユール軍師の申すように天人兵団を動かすには時期尚早である気がします。もし万が一にも、他国が同じように天人兵団を所持秘匿していれば、どうなるのでしょうか。国家間の非難は一番にそれを登用した国に向けられることは必至です。我が国としては、避けたい問題です。私は、天人兵団は切り札として最後に取っておくのが相応しいと思います。とはいえ、スザンをこのまま黙って放っておく手はありません。少しでも弱まっているいまが、叩く好機ではありません。戦争が長引けば、既に長引いておりますが、国庫にも国民にも負担がかかります。ここは、スザンを叩きましょう。ライヒェンと和議を結ぶのです。一時的なものでもよいのです。ライヒェンと共に、まずスザンを黙らせましょう」

あまりにも決然たる強い口調に、デイレクは懸念を示した。

「ライヒェンと和議？ それは七年前に開戦時に突っぱねておる。今更承諾するまい」

「させるのです。それに七年前とは事情が違っております。こんなにも戦が長引くとは両国とも思っておりません。少なくとも

もライヒェンはそろそろこの三つ巴の状況を打破したい、もしくは停戦したいと考慮して条件を審議中でしょう。そうでなければそれほど長い期間の休戦を設けなかったはずです。まあ、こちらがスザンと揉めて力を使い果たすのを待っているという狙いもあったかとは思いますが……ぐずぐずしてはおられません。先のスザンとの一戦でタルダム・ヨーデル・スザン王子を討っていますからね、報復に燃えたスザン王はそれこそライヒェンと和議を結び、我が国を攻め滅ぼしたいと言っております」

「なに。『言っておる』だと？」

「はい。スザンに潜入させた私の手の者からその旨の報告がありました」

場は俄かにざわめいた。

「ライヒェンとスザンが手を組んだら我が国はどうなるのだ」

「兵力では到底太刀打ちできません」

「待て待て、天人兵団というものがあると聞かされたばかりではないか」

「またも紛糾しようかという間際、キルヴァはすつくと起立した。

「ですから、私がライヒェンに参ります。直接行って、和議を結ぶことができます。どうかお許してください」

「そなたが直接ライヒェンに乗り込むだと？」

「はい」

「敵地なのだぞ」

「わかつております。大丈夫です、ちょっと行って、すぐに戻って参ります」

出席者の面々は戸惑いしながら、二の句が継げなかった。王子は正気なのか、という危惧がありありと顔に出ているものも少なくない。

ディレクでさえ、平生ではいらなかった。

「ならぬ。王子であるそなたをそんな危険な目には遭わせられぬ」

「しかしこれは、私でなければできないのです。どうか十日の猶予

をください」

「十日だと？ たった十日でなにができるというのだ」

「ライヒェンと和議を結んでごらんにいれます」

デイレクに向かい、キルヴァは微笑んだ。屈託ない笑みは場違いであることこの上なかったが、逼迫した空気を若干和らげた。

「それで、お願いがあるのですが。もし私が無事にライヒェンと和議を結べたならば、先の戦いで出動要請がないまま現地に赴いた軍紀違反の件については、どうかお咎めなしということにしたいだけませんかでしょうか」

デイレクはまじまじとキルヴァを凝視した。

気づかぬものは気づかぬだろうが、これは戦略だ。地位向上のための功績や褒賞が目的で動くのではなく、あくまでも自分の失態の尻拭いをするのだ、と見せて周囲の納得を説得に変え、自らの意見を通すつもりなのだ。

事実、苦笑するものが後を絶たなかった。

「なるほど、王子とて王の叱責は恐ろしいというわけですね」

「王子がこれほどまでおっしゃるならば挽回の機会をさしあげてもよろしいのではないですか？」

「そうですね。なにぶん十日ということですし、十日くらいならば待つてみてもよいではありませんか。ただし十日経つても王子がお戻りになられぬ場合は、それこそ天人兵団を送り込む、ということではどうでしょうかね」

その意見に、王を除いて満場一致した。

デイレクはキルヴァを穴のあくほど見つめた。キルヴァは沈黙で返した。

ついに、デイレクが折れた。

「五日の猶予をやるう。五日経つてそなたが戻らぬ場合は、天人兵団を差し向ける。それでよいな」

「はい」

キルヴァはにこやかに応じた。デイレクは察した。十日も必要で

はなかったのだと。五日あれば十分なのだ。はじめから半分の猶予しかもらえないことを想定していたのだと。

なれば、とキルヴァは気迫のこもった声もて告げた。

「キルヴァ・ダルトワ・イシュリー、行って参ります。必ずや、吉報を持って帰還致しますよう」

ライヒェン攻略の策（後書き）

思ったより、掲載まで間があいてしまいました。すみません。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

手の塔（前書き）

出陣、なりませんでした。
はは。もう少々、お待ちを。

手の塔

深夜、キルヴァは駐屯地へ戻った。

半日とはいえ、ただひとり基地に待機して、スザンに潜入したエディニイとライヒエンに潜入したクレイからの連絡待ちという中継役を務めていたカズスは、キルヴァの無事な姿に大袈裟なほど喜びをあらわに出迎えた。

「あーよかった！ ご無事でしたかー。お帰りなさい、王子！ あとダリーとミシカとアズガルとステラもおかえりー」

「大の男が諸手を振って飛び跳ねるなというのに。みつともない」
手厳しく叱咤するミシカを「まあまあ」と宥めながら、ダリーは馬を降り、駆け寄ってきた馬番に手綱を預けてカズスに軽く手を上げる。

「おう、ただいまー。王子は無事だぜ」

「いま戻った。留守居役、ご苦労だったな」

「心配しましたよ。俺がいないときに限って襲撃に遭ったりしないかなーとか。あー、なにこともない道中であつたあ。ええと、交渉はうまくいきました？」

「ひとまずな」

「さすが王子！ じゃ、まず飯でも食って休んでくださいよ。アズガルもお疲れー。あとは俺が王子番代わるよ。おまえも少し休めて。どうせろくに食ってないんだろ。軽い夜食を用意したからさ、それ食ってから寝ろよ」

「任せるぞ」

「任せとけ。つてわけで、王子、俺が今夜の番兵です。なんでも言うてくださいよ。あ、そうだ。カドウサが、王子がいないって騒いで喧しかったんで天幕に入れとききました。入るとき気をつけてくださいね、顔に吹っ飛んでくるかも」

「ただいま」

キルヴァを筆頭に、その場にいた全員が耳を疑った。
視線がステラに集中する。

カズスが思わず訊き返す。

「……なんだって？」

「『ただいま』と言ったのだ。間違っではおるまい」

「あ、うん。間違っではねえよ。合ってる、合ってる。けど、あれ？ あんた、イシユリー語を話せたわけ？ いや、その前に、天人って人間のこと嫌いなんじゃないやねえの？ あんただって王子以外は、俺たちなんて相手にしたくなかったんじゃないやなかったっけ？」

どんなに言いにくいことでも率直に切り出せるカズスの性分は近頃ごく頻繁に発揮の機会に恵まれる。

少しぐらいは見習いたいものだ、とキルヴァは感心するのだが、嫌味にならずに済むのは一重にカズスの人徳ゆえで、自分ではこうはうまくゆくまいともわかっていた。

「気が変わった」

「へー。どんなふうだよ？」

「おまえたちは、仲がよい。キルヴァも愉しげで、見ていて私も混ぜてほしくなったのだ。天人など、いやか？」

「いやじゃねえよ。むしろ大歓迎だぜ。だつてさ、あんた、王子の七番目の近衛になったんだろ？ だったら俺たちと同輩だ。あーよかった。いままで周囲はがちり固めてたけど、上はカドウサ任せだったからいまいち不安だったんだよな。でもあんたが上にいてカドウサと一緒に王子を護ってくれたら心強いぜ。これからよろしくな」

カズスが手を差し出す。

ひとに触れることにはまだ慣れぬステラはさすがにためらうようで、反応しあぐねている。

キルヴァが弁明するより先に、ダリーの手がカズスの手に無造作に重なり、次いでミシカの手が無遠慮に重ねられ、無愛想なアズガルの手が重なった。すると、ダリーがもう一方の手も「エディニイ

の分だ」と言つて重ねたので、ミシカもまた「じゃ、これはクレイの分だ」と応じる。

団結の手の塔。

ふと、脳裏を過ぎる詩文の一節。キルヴァはそれを口にした。

「戦火は消えることなく、いまこのときも命は失われてゆく。

この混迷の時代に生き抜くことは、苦しく、難しい。

だが君よ、隣を見よ」

ミシカが仏頂面をやや崩して続ける。

「我がいるではないか」

ダリーがあとを引き取る。

「そうだ、我がいる。

我はこの命のある限り高き志を持つて君と共に戦おう」

アズガルが力みのない声で澱みなく諳んじる。

「我が輩よ。

たとえ明日この身が散るうとも、わが魂は君と共にある」

カズスが強引にステラの手を引いて手の塔の頂にのせる。

「忘れるな」

そしてキルヴァがステラの手の上にそつと優しく手を重ねて、括つた。

「我は永遠に君と在る」

ステラはキルヴァを見つめ、次いで全員顔を順に眺めていった。最後には笑っていた。

「よろしく、頼む」

それで充分だった。手の塔はたちまち解かれる。

そこへ、夜の闇の中から青角灯を手にかけて、足早にセグランが現れた。斜め後ろにはジェミスもぶらぶらとついてきている。

「申し訳ありません、王子！ ちよつと呼ばれて席を外していただきます。お帰りなさいませ。ご無事でなによりです。ステラも一緒ですね。ああ、本当によかった……とにかく、心配だったので。あちらには私の師がおりますので下手をすれば拘束されるかもしれな

いと、もっと悪ければ軟禁されるのではないかと危惧していたのです。杞憂に終わってよかった」

「ステラは七番目の近衛に任命された。その身柄は私預かりでいいと、父上とリューゲルに言質を取った。天人兵団登用には待ったをかけた。ライヒェン攻略の猶予も五日を貰った。私の方はざっとこんなところだ。こちらはどうか。なにか動きはあったか？」

「ありました。いくつかご報告があります」

「聞こう」

「では中へ」

アズガルとカズスとジェミスを見張りに立てて、キルヴァが天幕に入るなり、カドウサが騒ぎたてながら飛んできた。肩の定位置に留まったまま、離れようとしない。

「……置いていかれたのを根に持ったな。いい、このまま進めよう」
早速セグランはキルヴァに筒状の書状を差し出した。

「ライヒェンから、非公式会談の申し込みが何度もありました」

「クレイがうまくやっているようだな」

「いかがしますか」

「他の問題がなければ当初の予定通りいこう」

「では、公式会談の申し入れがあるまでこのまま丁重にお断りし続けます」

「何日かかるだろうか」

「おそらく三日。それ以上でも以下でもないでしょう」

「三日か……では、スザンの情勢はどうなっている？ エディニーから連絡はあったのか？」

「それが、まだ」

キルヴァは厳しい顔で押し黙った。ややあつて決意をした眼で、セグランを振り仰ぐ。

「最後の伝達があつてもう五日経つ……彼女が五日も無連絡とはあり得ない。なにかあったのだ。ライヒェンとの会談まで三日の猶予があるならば、その三日のうちにエディニーを捜し出せ。どんな手

を使ってもいい、必ず救出するのだ。すぐにスザンは戦場となる

「

手の塔（後書き）

日々忙殺。なんたる忙しさ。疲労困憊。おかげで間が空いちやいました、すみません。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

よく似た顔の男（前書き）

ドッペルゲンガー、というものに、人生で一度は遭遇してみたい。
でもやっぱり怖い。笑。

よく似た顔の男

エディニイはなぜこんなことになったのだろう、と疑問を禁じ得なかった。

この三日というもの、ほとんど不眠不休で見知らぬ男の看病をしている。

さいわい欲しい情報の収集をほとんど終えた後だったので任務放棄の罪には問われないうが、三日も無連絡とあつては王子が心配しているに違いない。

早く帰還しなければ。この情報はライヒエンと共同戦線をはるために、是が非にでも開戦前に必要なものなのだ。

だけども。

洗濯が済んだので、部屋の中に干したあと、時間を確認し、医者から処方された薬を水に溶かす。熱に浮かされている男の上半身を抱え、薬入りの水を飲ませる。ついでに身体を拭き、着替えさせ、また寝かせる。

本当になぜこんな真似をしているのか。

「……声と、顔のせいね。まったく、なんでこんなに似ているのよ……？」

エディニイは悪態を吐いた。

男の枕もとの小卓の上を見る。鎖が切れて男の首から外れた指輪が眼に入る。手に取って眺める。指輪の内側には、文字が刻まれている。どうも北の国の言語らしいが、読めなかった。念のため、形を記憶する。

思い返せば、三日前

「お姉さん、ひとり？」

イシュリーへの帰還途中だった。

エディニイはスザン軍の現地の情報収集が任務だった。隊の編成、規模、指揮官、駐屯地、糧食の確保、保管庫、運搬ルート、武器の選択、馬の総数、砲丸台の台数など、知り得た情報は随時、定期報告として逐一秘密裏に伝令を走らせた。

あとは少し人民の様子や噂話を探りつつ帰るだけ、というときに、声をかけられたのだ。

宿場町の玄関先、パーソ川にかかる橋の上だった。すれ違いざまに声をかけられたのだが、普段は聞き流すにとどまるものを、その声がかんなどころにいるはずもない知り合いの声によく似ていたものだから、つい振り返ってしまったのだ。

「お姉さんみたくないなきれいな女のひとが独り歩きなんて危ないよ。

どこへ行くの？」

その声。そして、顔。

エディニイは眼を瞠った。似ている。年の差があるので生き写し、とまではいかないが、他人とは思えない酷似ぶりだ。驚きのあまり二の句が告げずにいると、

「この辺も最近は何騒なんだよ。近いなら、俺、送ってあげるけど。あ、でも別に変な下心があるとかじゃないから。本当、全然そんなつもりな　っ、危ない！　伏せる　　！！」

突然飛びかかれて、押し倒される。このとき周りには往来する人々が絶えず行き交っていたのだが、ほんの僅かな風圧を感じた瞬間、ごとごとつ、と異音がして、真つ二つに分断された上半身と下半身がそれぞれ崩れ落ち、鮮血が噴いた。

誰かが恐怖の悲鳴を上げる。

「ウィア・シヤーサ風の天人だ」

「天人来襲だ！　殺されるぞ！」

「逃げる、逃げる　　！」

エディニイは空の中に六翼天ふたりを認めた。問答無用の第一撃を放ったあと、風を自在に操るその手は持ち上げられ、凄惨な殺戮

がいままさに開始されようとしていた。

「逃げよう」

「こっちよ」

言つて、エディニイは男の胸倉を掴み、そのまま川へと放り投げた。すぐに自分も飛び込む。風斬りの攻撃の前に万全ではないにせよ、水は最大の防壁となるのだ。

そして暫時、水から上がって、男がはじめの一撃を背に受けていたことを知る。

医者を呼び、宿屋に運び込み、手当を受けさせた。傷から雑菌が入り、高熱に倒れるのは

すぐのこと。なしくずしのまま看病をする羽目になってしまったのだ。

三日目の夜も更けた。

月が中空に昇った頃、男がふつと意識を取り戻した。

「……なぜ俺に親切にしてくれるんですか？」

「あら、ようやく眼が覚めた？ 気分はどう？」

「痛いけど、悪くないです」

「そうでしょうね。背中への傷は結構深かったわよ。あと少しで脊髄まで届いていたらしいわ。そうなっていたら下半身不随で一生歩けなくなっていたかもしれないって」

「それはいやだなあ」

「食欲はある？ なにかもらって来ましょうか」

「……あなたに助けられたんですね」

「はじめに私を助けたのはあなたよ」

「でもあのあとすぐあなたが俺を川に放り込んでくれたから助かったんです。あなたこそ俺の命の恩人なのに、赤の他人の俺の看病までしてくれるなんて……親切なひとだ」

「いいから食べて寝なさいよ。熱が下がるまでは傍にいてあげるわ」
「だったら、しばらく熱はさがらないでもいいかな。あなたが傍に

いてくれるならこんな役得はないもの」

「ばか言ってるどぶつわよ」

エディニイが睨むと男はくすくす笑ってまたすぐに眠りに落ちた。

更に二日経って、ようやく男は回復の兆しを見せた。熱は下がり、顔色もよくなった。

「帰るわ」

「どこへ？」

「家に決まっているでしょ」

「ああ、そうか……そうですね。普通のひとは家に帰るものですよ
ね」

「なによ。あなたは違うの？」

「俺は帰る家なんてありません」

「なぜ」

「待っていてくれるひとがいないから」

「寂しい人生ね」

「あなたが慰めてくれるわけには？」

「男は間に合っているの」

「つれないなあ。じゃあもう会えないのですか」

「あなたね、年上の女を口説くのは早いわよ。だいたい幾つなの」

「二十歳です」

「嘘つき。まだ十五、六でしょう？」

「……十七です。でもあなただって俺とそう幾つも変わらないでしょ
よう」

「女に歳を訊くなんて失礼ね。さてと、そろそろ行こうかしら」

「待って下さい。また会えますか」

「そうねえ。あなたがビンボウじゃなければ治療費を請求してあげ
てもいいけれど」

「ビンボウじゃないです。いいですよ。請求して下さい」

「そう？　じゃ、連絡先を教えて。署名入りで一筆書いてよ」

「あつはははは。本当にしつかりしたひとだ。じゃあついでに担保もつけます」

男は指輪を差し出した。

「それ、俺の唯一大切なものなんです。次に会うときまで預かっていてください」

「いやよ、そんな大切なもの預かるなんて。失くしたらどうするの」「失くさないでください。だってこうでもしないといつあなたの気が変わるかわかったものじゃない。そうだ。まだ俺、名乗ってもしませんでしたよね。俺はアルマディオ・ベルシアーノです。色々と助けていただいてありがとうございます。俺、待っていますから」

よく似た顔の男（後書き）

私は外国が好きです。

言語もそうですが、人名にもさまざまな癖があって面白い。

なので、ひとつの物語をつくるにあたっては、世界観に沿った名前を選択していくのですけど、天人は混沌としていますね。

さて、あと少し伏線を張ってから、ライヒエンへ赴きます。キルヴァの見せ場です。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

風雲急を告げる使者（前書き）

カーチス・ゴート登場。

実のところ、だらけきった、ものぐさな、やる気なさそうな彼のような男を描くのも楽しい。特にキルヴァの周りにはいないタイプでしたので。

風雲急を告げる使者

エディニイは、即、キルヴァのもとに帰還した。

入れ違いになつてしまつたものの、アズガルを除く全員がスザンに潜入して自分を搜索してくれているのだと聞いたときは、不覚にも涙が出た。その涙をキルヴァの指が拭い、そつと抱き寄せられ、強く抱きしめられてはじめて、自分がどれほど心配をかけてしまつていたのか思い知つた。

「君が無事でよかつた」

「申し訳ありませんでした……」

「よい。無事ならばよいのだ。なにか相応の理由があるのだろうか？」

「はい」

エディニイはスザンでの数奇な邂逅を思い巡らせ、言うならばいましかないと思つた。

アルマディオ・ベルシアーノと名乗つた男。

ダリー・スエンディーによく似たおもさし、よく似た声、よく似た体格、笑い方。

そして、ダリーが肌身離さず嵌めている指輪と同じ細工の指輪を所持していた。

「内密のご報告があります」

エディニイはスザンであつたことのすべてを子細漏らさず話した。聞き終えたあとのキルヴァの行動は素早かつた。

「次軍師近衛兵長ルゲル・エギーユを呼べ」
ルゲル・エギーユがただちに参上した。

キルヴァは一般兵の中でも腕が立ち、隠密行動に長けた人選をさせ、医学の心得のあるものを加えて、即刻スザンへいくように命じた。

「アルマディオ・ベルシアーノなる男の身柄を確保せよ。年は十七、中肉中背で赤茶に近い金髪に紫がかつた藍色の眼である。パーソ川

沿いのムズボーンという宿屋に逗留中のはずだ。背中に怪我を負っている。可能な限り穏便に、だが万が一抵抗されるようならば力づくでもよい、とにかく連れて来るのだ。一刻の猶予もない、急げ」「はっ」

ルゲル・エギーユが天幕を飛び出してゆく。

キルヴァはエディニイのため、温かいワインを持ってこさせた。

「座って、少し休むがよい」

「いえ、あの……」

「休むのだ」

「……はい」

エディニイはどことなく落ち着きを欠いた様子で、毛皮の敷かれた一角に座りワインを啜っている。

キルヴァは執務机に寄りかかって、エディニイが提出したスザンの最終報告書に眼を通していた。

二人きりで、アズガルの姿はない。

「ダリーは、奥方共々二歳で息子と死に別れたと言っていたな」

「はい」

「その男の身の上がどうあれ、君が救った命を無駄にはしたくない。とりあえず身柄を押さえて話を聞き、一段落したら、ダリーに会わせよう。それまでこの指輪は私が預かっておく。それでよいか」

「はい」

「よし。だが、それにしても」

「はい？」

「君につきつきりで五日も介抱されたなんてその男は果報者だな。少し妬けるくらいだ」

「な、なにをおっしゃるのです」

エディニイは傍目にもおかしいくらいしどろもどろになった。

「もし……それがあなたさまでしたら、五日どころか、完全治癒するまでお傍を離れません」

「そうかな」

「そうです。ずっとお傍に、ずっと、ずっと、おります。片時も離れないで……私は、あなたさまのお傍にいられば、ただそれだけで……」

「エディニイ？」

はつとした顔で、エディニイは取り繕う。

「いえ、あの、つまり、わ、私だけじゃなくて、皆も同じです。特にカズスやセグラン様は血相変えてお傍に馳せ参じて懸命に看病いたしますよ」

「はは、そうだな。だが、せつかくちやほやかまわれるなら、やはりカズスやセグランよりは君がいいな。その際は頼むよ」

明るく笑うキルヴァに、エディニイは胸が詰まったような燻った微笑を返した。

「承りました。でも……御身は大丈夫ですよ。ステラも……新たに加わったことですし、たとえ戦になってもあなたさまは私たちが必ずやお守りいたします」

キルヴァはいつときエディニイを見つめた。エディニイはキルヴァの沈黙に戸惑いしながらも、じっとしていた。互いの鼓動が聞こえるような、束の間の平穏だった。

不意に、天幕が揺れてアズガルが顔を出した。なにも言わぬまま、キルヴァの背後に就く。問答無用で、エディニイもキルヴァの横にびたりと就く。追ってすぐ、セグランも現れる。

「失礼します。王子、セグランです。ディレク王より使者が来ています。一緒に連れて参りましたが入ってもよろしいですか」

「よい、入れ」

「失礼します」

天幕が開く。

セグランが連れてきた男は、上背があり、筋骨隆々でありながらも、身なりかまわず、無造作にひつつめた灰色の髪と精彩を欠いた灰色の瞳のどこか飄々とした風貌が貧相に映った。

だが、腰には重たげな長剣二本を佩いている。単なる飾りもので

はないことは柄や鎧の傷み具合で見て取れた。なにより、この男からは血の臭いがした。

緩慢な動きで頭を掻きながら跪いた男の顔に、見覚えがあった。キルヴァはあつと声を上げた。

「そなた　カーチス・ゴートではないか」

「カーチスをご存知なのですか？　しかし、なぜ王子が？　彼は遊撃隊の指揮官で戦線の最前線から滅多なことでは離れない男です。ここ数年は第二領地と第三領地のライヒエンとの国境線におりました。第四領地におわした王子とはまったく接点などないはず……：そっういえば、王子は出陣にはまったく縁がなかったはずなのに随分戦場慣れしていらつしやいましたね。ダリーに訊いても王子に直接訊けと教えてはもらえなかつたのですが、それは、カーチスととにかく関係があるのですか？」

キルヴァはきちんと答えるべきか否かためらつたが、セグランにはなにも秘密事をつくりたくないという思いが働いた。

「……：父上には秘密だが、以前幾度か彼の遊撃隊に加えてもらったことがあるのだ。単なる一兵士としてな」

「　　なんですつて。王子たるあなたさまが、い、一兵士として遊撃隊に？　ゆ、遊撃隊は、戦場で最も過酷な任務を請け負う部隊ですよ。死亡率は平均五割、二人に一人が命を落とすのですよ？　その、遊撃隊に　それもカーチスの遊撃隊といえれば特攻が主な任務なのに　幾度も参加だなんて……：つ、あなたさまは！」

「怒るな。声も大きい。仕方なかつた。兵法は実戦を経験しなくては戦い方も戦術も己のものにならないではないか。戦の呼吸は戦の中でしか学べない」　そなたの持論だつたな、カーチス」

「カーチス。あなたもなぜ止めないのです。この御方を知らないとしても言うのですか」

「いや、さすがに知っているさ。でも仕方ねえだろう、強くなりたいつてんだから。まあ一応止めたぜ？　あまりに危険だからやめて

おけ、とな。なあ王子」

「無礼者！ その口の利き方はなんです。だいたい」

「カーチスを責めるな、セグラン。私が無理を言っただけなんだ。それに私はこの通り生きていないか」

「結果論で事の重大さをはぐらかさないでください」

「……へえ。冷血な次軍師殿も王子の前では血の通った人間になるわけだ。軍師の横に立っていたときのあなたは血も涙もない指令を次々と下してくれたものだが、もうああいう真似はやらないのか？」

「相手次第ですね」

「その相手とやらは、俺じゃ不足か？」

「それは自己申告として受けましょう。あなた、死地がお望みでしたね。存分に働いていただきますよ。私としても、命を惜しまずして戦いを買って出てくれる人間は願ったりかなったりです」

「……セグラン、人相が変わっているぞ。非情な眼は似合わないからよせ。カーチス、そなたも。戦場に立っているときと異なるとは顔つきがまるで違うな。はじめわからなかった。なぜそんなにものぐさそうにしているのだ」

「戦場に飢えているもので。最近、戦らしい戦がなくて俺は暇で暇で。先のスザン戦なんてあんなもんは戦ったうちには入らなくてね、まるで物足りん。軍師にそう言ったら王子のもとで働いて来いと言われて、厄介になりしてきた。これ、辞令書なんで。俺と遊撃隊の奴ら千百名全員分ある。こきつかって来てかまわんで、まあ、よろしく」

「そうか。そなたがいてくれれば心強いな。ちょうどスザンとの一戦を控えている。いつでも参戦できるよう準備して、待機してくれ。ジェミス！ いるな、そこに」

天幕の外に控えていたジェミス・ウィルゴーが相変わらず呑気そうな面持ちで現れる。

「お呼びですか」

「カーチス・ゴートだ、面識はあるだろう。このたび私の指揮下の

もとに配属になった。彼と遊撃隊全員分の衣食住の手配と現在の作戦状況の説明を頼む」

「こりやまた一気に仕事が増えたなあ。っと、はいはい、やりますとも。お任せください」

そこへ、ラー ज्या・ミクルスが駆け入ってきた。

「ライヒェンより使者が参りました！」

「来たか」

「来賓客用天幕にてお待ちです」

「わかった。すぐに参る」

ラー ज्या・ミクルスが踵を取って返して駆け出ていく。

カーチスが奇異なものを見る眼でキルヴァを眺めて言った。

「……なんでも、たった五日の間にライヒェンと和議を結ぶ約束をしたそう。王宮の人間は所詮王子の見栄のたわごとだと、誰もあまりあてにはしていないようだったが、しかし、使者が向こうから来るなんてなあ。……いったいどんな手を使ったので？」

「スザンがライヒェンに休戦の締結を求めているのは偽りで、その真意は、目の敵にしていると見せかけてイシュリーと秘密裏に同盟を結び、左右挟み打ちをしかけて一気に攻め滅ぼす魂胆だと触れまわったのだ。更にスザンは、この申し出を断られた場合天人を用いて攻撃に出るつもりだともな。だが肝心のイシュリー側はスザンの申し出をまだ検討中であり、立場を明確にはしていない。しかしそれも時間の問題で、近日中に前向きに処理されるだろう、という噂を撒いたのだ」

「たかが噂で、ライヒェンの上層部が動くとは思えんが」

「その上層部にたきつけたのだ。クレイは、それができる男だ」

キルヴァはエディニイが用意したマントを羽織りながら、愉快そうにセグランを見た。

「確かに、三日だな」

「そう申しましたでしょう？」

ひとつ首肯ののち、キルヴァの眼が凄みを帯びた。身を翻す。セ

グランが天幕の入口を開き、キルヴァは表へ出た。

日没が間近に迫っていた。紅い西日を面に浴びながらキルヴァはライヒエンの使者が待つ来賓客用天幕へと赴いた。

風雲急を告げる使者（後書き）

はい、更新です。またひとり人員が増えました。戦記ものは登場人物が多くて大変ですね。はい。

次話、いよいよライヒエンへ乗り込みます。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

真昼の謀りごと（前書き）

ライヒエン国ウージン王とその軍師パドウニーです。

少し肩の力の抜けた王、を描きたいものですが、これ、いかに。

真昼の謀りごと

ライヒエン国、首都バルーチイより北北西　　イシュリー国との
国境。

ここに、総勢五万ほどの軍勢が駐屯する国境線基地があり、その中央部に、慌ただしく整えられた大天幕があった。

イシュリーとの公式会談のため首都にある王城より遙々遠征し、数日前から滞在を余儀なくされているのは、ライヒエン国王ウージン・マルスカーヤ・ライヒエンである。

ライヒエンとイシュリー間の交渉権利は第一王位継承者キルヴァ・ダルトワ・イシュリー王子が一任されており、王子はいまスザン国との国境線の前線基地に待機中との知らせを受けて、ライヒエン国王ウージンはこの国境線での公式会談を申し入れた。

そしてついさきほど、会談を了承する旨の報告を携えた使者が帰参した。驚いたのは、その日時だった。

今年齢四十九のウージン王は凄じい憤怒の剣幕で大天幕内を忙しく行き帰した。その口腔からは唾が飛び、罵倒の声が延々と紡ぎだされる。

「今日の正午だと？　ふざけおつて。あと一バーツと二十ハイトでどうやってここまで辿り着けるといふのだ。こちらの使者と共に出立したというならばともかく、そうでなければ、この距離ではどうやってもその三倍の時間がかかるだろうに、ええい、くそ、はじめからこの会談を蹴るつもりだな。愚弄しおつて。若造が嘗めてくれるわ」

脇に控える、ライヒエン国軍師パドウニー・グシカールは冷静な姿勢を崩さなかった。

「しかし、そうなればそうだったで、国境侵攻の名目を得られるというもの。王子に事の真偽を糺すという大義名分があれば、首尾よ

くすればその身柄を押さえられるかも知れませぬ。身柄を押さえられずとも、我が国が接触を図り軍の一部でもイシュリーに入ってしまったらよろしいのです。スザン側からしてみれば、それだけでも休戦条約を締結したように見えるでしょう。とにかく、スザンとイシュリーが手を組む事態を避けねばなりません。それには、とりあえず申し出通り、正午までは待つことが得策かと存じます。しかしながら、お相手が王子であるならばなにも我が君ご自身が出向かれずともよろしいのではないですか？」

ウージン王はうつむ、と唸って、どさつと椅子に腰をおろした。肘掛に肘をつき、頬杖をついて少し物思いにふけたあと、ぽつりと呟いた。

「……昔、イシュリーのデイレク王とは一時懇意にしていたのだ。デイレクのはじめの妃シュリトウは私ともよしみがあつてな……シユリトウがデイレクのもとへ輿入れして……そうか、あれからもう二十一年も経つたのか。大きくなつただろうな……」

「キルヴァ王子は、この会談において戦闘の意志がないことを示すために、従者は近衛をひとりだけ就けて来られるようです」

ウージン王は眼をつむって美しき故人を　他の男の妻となつたシュリトウの面影を回想していた。

長い時を経て尚、甘い痛みにも胸を搔かれる。あの若き日の思い出は、いまもまだ輝かしいままだ。

美しく、優しく、儂げなのに気丈な一面を持ち合わせたシュリトウには、大勢の求婚者たちが群がった。かくいうウージンもそのひとりで、一途に恋い焦がれた日々を過ごした。

しかし、シュリトウが選んだのは。
「デイレクの倅か……あの阿呆な男の血をひいているのだ、さぞや間抜けな面に違いあるまい。そうだな……もし予定通りに参上したならば、一目ぐらい、顔を見てやってもよいな。うむ。シュリトウに免じて私が直々に会談に臨んでやってもよい。ん？　なんだ、まだなにか申したか？」

軍師はいま述べた事柄を繰り返した。

すると、ウージン王は烈火の如く顔を赤く染めた。

「なに？ 従者は近衛ひとりだと？ 豪胆を示すつもりか？ ならば私も供はひとりだ！ パドウニー、そちが来い」

「おおせのままに」

「生意気で命知らずで無礼なところは父親そっくりだ！ デイレクもそうだった！ 破天荒で礼儀知らずで大雑把で誰かれ構わず敵にまわしては揉め事三昧、仲間内では馬鹿騒ぎ三昧、あれでよくシリトウが嫁にいったものだ」

「我が君」

「なんだ」

「お許しただければ、キルヴァ王子の身柄を取り押さえますが」
ウージンの顔から温さが拭われる。すう、と瞳が細められて瞳孔が尖った。

「……なんだと？」

「王子を捕らえてこの際イシュリーに無条件降伏を促してもいいですし、それでデイレク王が王子を廃嫡なさるような処分を下されるならば、聡明で人たらしと名高い王子を貰うことにいたしましょう。王子にはもれなく六名の手練がついてきます。“戦場の黄姫”こと ダリー・スエンディー、“不屈不拔のミシカ”こと ミシカ・オプライエン、“隠し武器使い”ことエディニイ・ローパス、“百変化の影法師”こと クレイ・シユナルツァー、“潰乱の疾風”こと カズス・クライシス、“黒き死神”ことアズガル・フェイド。いずれも百戦錬磨のつわものです。他にも王子を慕い、つき従う者が出てくるかも知れませんか。そうなれば、しめたもの。イシュリーは弱体化し、我が国は戦力増強となります」

ウージン王は半ば呆れたようにパドウニー・グシカールを見やっ
た。

「そちはまったく抜け目のない男だな」

「では、ご了承いただけますか」

「許す。但し、王子に傷をつけることはまかりならぬ。無傷で捕らえるのだ」

「承知いたしました。では、弓矢部隊を待機させます」

生き生きと企みに奔走する軍師パドウニー・グシカールにあとを任せて、ウージン王は表に出た。

太陽は中天に昇りつつあった。降り注ぐ光は白濁し、眩く、ウージン王は額に手を翳した。空は高く、蒼く澄み、分裂した雲がゆっくりと流れている。

ウージン王は腕を組み、空を眺めた。まだ見ぬ敵国の王子を思い、その父たる友人だった男を思い、かつて恋をし、憧れたひとを思った。

正午まで、あと僅か一バーツである。

真昼の謀りごと（後書き）

どこで区切ろうかなあ、と思っていたら、中途半端な感じ。ちょっと短めでしたね。キルヴァ出番なし。次回持ち越しました！引き続きよろしくお願いいたします。安芸でした。

二ヶ国会談（前書き）

いざ、ステラを従えて、静かなる戦場へ。
武器なき戦争、頼りは己ひとりのみ。

二ヶ国会談

「王子はまだか」

「まだにございます」

「時間は」

「正午まであと十八イトほどです」

「やはり来るつもりなどないのではないか」

「いましばしお待ちを」

「どこにも姿形が見えんぞ」

イシュリーとライヒェンの国境、岩石砂漠に僅かな植生、生き物は少なく、見通しだけはよい。会談のためにならされた土地に緑と金糸で密に織られた豪華な敷物が敷かれ、その上に、椅子が二脚と小卓、小卓の上には塗りを重ねた朱色の箱、そして筆記用具。日除け幕は風が若干強いためかえって危険とみなされて撤去された。

ウージン王がパドウニーとの会話にも飽いて黙りこみ、苛々が頂点に達したそのとき、一羽のギイ大鷹のオスが突如飛来したのを眼に捉えた。太陽を背に、疾風の如く現れたそれは、黒い頭部をぐつと伸ばし、灰色の翼を力強くひろげたまま、大きく宙返りを打った。その更に上空から 雲を突き抜け 一一気下降してくる白い影。ウージン王もパドウニーも、待機する五万の軍勢も、度肝を抜かれて一点を凝視した。

幾重もの純白の翼で垂直に風を切り裂き、腕にはひとを掻き抱き、金色の髪を帯のようにゆらめかせている。勢いは途中翼を抑揚させたことで失速し、地上が間近に迫る頃にはその姿形がくつきりと見分けられた。

十二翼天。

最強の称号を有する天人。

そして傾国の美を、それも絶世の美を併せ持つ 静かなる来臨であった。

風が逆巻き土埃が立つ。地上より拳ひとつぶんも浮いたまま、ひろげた翼はそのままに、天人の腕がゆるりと解かれる。天人の背にまわされていたひとの腕も名残惜しげに解かれる。ひとの爪先が大地を踏みしめる。

どちらもゆっくりと互いの距離をとって、いつとき見つめあったあと、ライヒエン側へと身体をひらく。毅然たる態度で爪先の向きを変える。

午後の光を燦々とその身に浴びながら、まっすぐにこちらにむかってくる青年。清冽な白い軍服に白帽、白い手袋、白い徽章、白い履物。踝まで届くほどの長い白いゆったりとしたマントをふわっと風にたなびかせた姿は気高く清々しい。その背後には、翼に蒼い一条の傷を負った世にも稀有な十二翼の蒼い甲冑を纏った天人を従えている。

正午よりちょうど五八イト前に、青年は国境線へと到着した。

ウージン王の真向かい、手を伸ばせば届く距離ながら、イシュリとライヒエン、国土は別である。

ウージン王は一目見て、シュリトウの面影を見出した。柔和で控えめ、万人に優しくも、心根は頑固でいったんこうと決めたら一歩も退かぬ強さがあつた。強いものより、弱いものに惹かれる傾向があつて、それゆえディレクを選んだとウージンはみている。眼を離し、手を放せば、いつでもどこかへ行ってしまう。物怖じせぬ代りに、自分の命も省みぬ。シュリトウがいなければ、即位はおろか、とつくにどこかで無駄死にしているに違いない。

同じ眼をしている、と思った。シュリトウにも、ディレクにも通じる。善悪はどうあれ、自分の心を曲げない眼だ。

青年は翡翠の眼を伏せて控えめにお辞儀して訊ねた。

「ウージン王でいらっしゃいますか」

「そうです」

「はじめまして。キルヴァ・ダルトワ・イシュリーでございます」

「ウージン・マルスカーヤ・ライヒエンだ」

「お待たせしたようで申しわけございません」

「それよりも、なにゆえこんな突拍子もない方法で参ったのだ。危うく天人の襲撃かと思ひ、天人諸共撃ち落とすところであつたぞ」

実際のところは、待機させた弓矢部隊も茫然としていたため対処は間に合わなかつたに違ひないが、そこはそれ、威信にかけても馬鹿正直に打ち明けるつもりなど毛頭ない。

青年の答えは簡潔だつた。

「お急ぎとのことでしたので、最速最短距離で参りました」

「他意はないと、申すのか？」

「はい」

「……左様か」

「はい」

「座らぬか」

「せつかくですが、我が国土より一步たりとも出ること罷りならぬ身でございます」

「なればそのまま立っているがよい。私は座る」

ウージンはどうつかと椅子に腰かけた。腕を組み、背もたれに横柄に寄りかかる。もつたいぶつて口を開きかけたとき、キルヴァが機先を制して言った。

「早速ですがあまり時間もございませんので、お話を伺いたく存じます」

「麗しい姿に似合わず、せつかちだの。まあよい、時は金なりだ。話を進めるとしよう。スザンに同盟協定を持ちかけられているそうだな」

「これは異なることです。スザンが休戦の締結を求めているのはライヒェンだと聞き及んでおりますが、なにぶん、タルダム・ヨーデル・スザン王子を死に至らしめた罪により我が国は相当スザン王には恨まれておりますことは、周知の事実。その我が方と同盟など、あり得ますまい」

「だがタルダム王子は国きつての浪費家で国庫の金を湯水のように

使い果たし、おまけに女好きがたたつて揉め事が絶えず、スザン王も近従たちも手を焼いていたというではないか。跡取り王子とはいえ眼の上の瘤、然らずんば、王子の仇であると見せかけて、その真意は、秘密裏に二国間同盟を結び、我が国ライヒエンに左右挟み打ちをしかけて一気に攻め滅ぼす魂胆なのであるう？ もしこの申し出をイシュリー側が受け入れぬ場合は、全国土に天人を用いた攻撃をも辞さぬと、脅迫もあつたはず。どうだ、違うか？」

ウージン王はキルヴァ王子からひた、と眼を離さずに一気にたたみかけた。その間、王子の眼は急速に温もりを失い、あとには感情を排した冷然たるまなざしが残った。

「……それだけおわかりで、私になんの御用なのです？」

ウージン王の眼が光る。獲物の喉笛に食らいついた蛇の眼さながら。

「そなたを呼び立てたはほかでもない。スザン王の一方的な申し出などに耳を貸さず、我がライヒエンと手を結ぼうではないか」

キルヴァ王子の冷めた眼に炎が点つたのを、ウージン王は見た。

驚きと警戒、打算と計算の感情がめまぐるしく踊っている。これをつぶさに眺めながら、ウージン王は待った。

だが、返つてきた答えは望ましいものではなかった。

「ありがたいお言葉なれど、お断り申し上げます」

「なんだと」

ウージン王は呆氣にとられた。

キルヴァ王子は非の打ちどころのない一礼をして、踵を返した。

「お話が以上であれば、私はこれにて失礼させていただきます。御免」

「いやいやいやいや、待て、待てというのに！」

慌ててウージン王は椅子から立ち上がりキルヴァ王子を引き留めた。

「なぜだ。なにゆえじゃ。なぜ我が手を払いスザンに就こうというのだ。答えよ王子」

キルヴァ王子は振り返り、またも簡潔に述べた。

「見返りがあるからです」

「……見返りだと？」

「はい。スザン王の申し出は一方的なものではございませんでした。二国間の戦果の利益は等分配分、それどころか、過去我が国に与えた被害損益の全額を負担、また戦死者については見舞金を給付、更に、これより先十年の不可侵条約の締結が条件として提示されたのです」

「そんなうまい話があるか！」

「と、私どもはじめは信じませんでした。ですが、スザン側の要求はそれだけではなかったのです」

「……というと？」

「十年の不可侵条約の期間、我が国の農耕技術、土木建築技術の伝授をといたことでした。つまり、双方に利のある契約を申し入れられたのです。ご承知の通り、我がイシュリーは小麦とトウモロコシと大豆の生産・出荷においては大陸随一、過去五十年、旱魃や水害などの飢饉にあっても蓄えにより国民が飢えたことはありません。スザン王は、そこに眼をつけられたのです」

ウージン王は言葉を失った。

キルヴァ王子の口調は淡々としていたが、舌鋒鋭く続いた。

「一方的である申し入れは、ウージン王よ、あなたさまの方です。目先の危機に怯んで、なんの具体的な休戦条件も示さずこの七年に及ぶ戦に終止符を打とうとは、虫がよすぎやしませんか。そもそもこの戦は、ライヒエンとスザンの開戦に我が国が巻き込まれたのです。スザン王の申し入れは妥当なものであり、また、国の未来を考えたものでもあります。我が国に支払う金は莫大な金額でしょうが、我が国の技術がもたらす利益もまたそれを上回るほど価値があります」

いまや立場が逆転し、ウージン王はさきほどのキルヴァ王子より忙しく思考を回転させた。

キルヴァ王子は再び背を返した。

「近く、我がイシュリーはスザンと正式に同盟を結ぶでしょう」

二ヶ国会談（後書き）

一対一の激突は、まだ続きます。

この会談が済み次第、また戦場へ。そう、またまた戦闘場面です。頭いたっ……。なぜに戦記ものなぞに手を出したのか。それはある意味ファンタジーでは避けて通れない道ゆえに。そして自分の限界にチャレンジなんて大げさな。ま、書くのは好きなんですけど。戦略も謀略も伏線も好きなんですけど。でも、うまく書けるかどうかはまた別の話でして。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

盟約（前書き）

キルヴァ対ウージン王の決着です。

盟約

「待たれよ」

キルヴァの足が止まる。だが拒絶を示すかの如く背を向けられたままだ。

ウージン王はいま一度キルヴァの注意を引くべく告げた。

「ではこちらはスザンの休戦条件に加えて、戦死者への見舞金を二倍にしよう。更に、我が国自慢の製鉄鍛錬施設を直にお目にかけてうではないか」

「まさか」

さすがに驚いて、キルヴァは振り返った。

ウージン王はキルヴァがようやく見せた青年らしい若い青臭さの残った表情に満足がいつて、口を横に伸ばしながら大きく頷いた。

「左様。但し、人数はある程度制限させていただくが。いかがかな？」

「……製鉄鍛錬施設と言えば、軍事機密の中枢。武器の設計から製造までを担う重要拠点。その心臓部を披露とは、少々過剰にすぎる申し入れのように思えますが」

「なに、そなたを侮り見くびった、せめてもの詫びよ」

あっけらかんとウージン王は言いきつて、パドウニーに手を差し出した。軍師は王の掌に羽扇を載せ、ウージン王はそれを緩慢なしくさで煽いだ。

「とはいえ、このままでは公平を欠いている。そこで新たに要請をひとつ、付け加えたい」

やはり、奸智に長けた王である。転んでもただでは起きぬ、と評したのは父王ディレクで、わざわざ転んでは高い拾いものをする、と評したのは軍師リユーゲルだった。

キルヴァは姿勢を崩さず、油断なく訊き返した。

「新たな要請とは？」

「我が末姫マリユカの夫に、ディレク王が第二子キャスザイン王子をお迎えしたい」

それは事実上の人質要請であった。

好条件と引き換えに、娘婿という地位を与えつつも身柄を押さえられ、いざという場合はまさに命を盾に取られる。

キャスザイン・ダルトワ・イシュリーは義母エリフェア妃の産んだキルヴァの腹違いの弟である。現在は第八領地の領主を拝命しているものの、まだほんの六歳であった。

「悪い話ではあるまい。我が姫は九歳、キャスザイン王子は確か六歳であったな。若干姫の方が年上であるが、たかが三歳差、似合いだと思っただが」

餌と脅しを常套手段とする、まさにライヒエン式の交渉術である。キルヴァはウージン王の背後、後方に待機するライヒエン駐屯軍を眺め、それより手前の荒野を眺めた。ここからでは、なにも見えない。だが、さきほどから、カドウサはずっと同じ高さ、同じ場所を巡回している。時折発する声はまぎれもなく警告で、注意を呼びかけているのだ。

おそらく、塹壕でも掘って兵を潜ませているのだろう。あの位置からすると、弓矢部隊に違いない。だとすれば目的は、この身の確保か。

ステラに一瞥を向けると、微動だにしない美貌で首肯された。案ずることはないようだ。

状況整理をした思慮の結果、キルヴァはにっこりと笑った。

「それは良案です」

ぱっ、とウージン王の顔が綻ぶ。イシュリーとスザンを裂くための懐柔策として苦肉の提案であったが、もし実現すれば、スザン征服後もイシュリーとの融和を図るためには最良の切り札になる。血を見ずして、絆が保たれる。優位はライヒエンにあり、子供が生まれば尚更、両国間の関係は強化されるだろう。

万が一、キャスザイン王子が血筋に見合わないうつけだった場合

は、ひそかに始末してしまえばいいだけのこと。そしてしばらくのちに病死の知らせを届けなければいい。そこでおそらくイシュリーとは戦争になるだろうが、それでも少なくとも十年の安全条約が結ばれる。当面の危機は回避できる。そこが肝心なのだ。

ウージン王は意気揚々とパドウニーに合図した。

「では正式な婚約の儀はあとで執り行うとして、口答約束の他に一筆いただけるかな」

「お待ちを。私の話はまだ終わっておりません」

キルヴァは姿勢を正した。瞳が悪戯っぽくきらめく。

「姫君のお相手は私では不足でしょうか」

「……いま、なんと申した」

「私は恋人も婚約者も無論妻もおりません。女性に関してはまったくの潔白の身。もし姫君を私の妻にいただけるのであれば望外の喜びというもの。婚姻を通じてライヒエンと恒久的な同盟を結ぶことができるとは光栄至極、なんたる僥倖、さいわいにして最善願ったりかなったりです」

微笑むキルヴァとは反対に、思惑が方向性を欠いてしまい、すっかり面喰ってウージン王はしどろもどろの体になった。

「いや、しかし、姫はまだ九歳で」

「あと七、八年待つくらい、私はどうってことありません。のんびり、国を整備してお待ちいたします」

「そなた、本気か」

「本気です」

ウージン王はまた考えた。若造相手になかなか思い通りにことが運ばぬのはなぜなのか、理解に苦しむところである。しかし、この申し出は悪くない。比べるまでもなく、第二王子より第一王子、次期王位継承者であるキルヴァ王子の妻である方が身分も地位も保証され、いいに決まっている。

人質を取り、担保にする。

だがそれよりも。

正式に婚姻が結べるのであれば。

その相手がシュリトウの息子、あの美しく優しく、ついに手の届かなかったひとの忘れ形見であるならば……。

ウージン王はほんの束の間、昔に思いを馳せて、眼を瞑った。瞼があいたときには、心が決まっていた。

「そなたになんの不足があるう、キルヴァ王子よ」

「では」

「よかるう。我が末姫マリユカが十六の誕生日を迎えた折にそなたに嫁がせる。それまでは我がもとで健やかに育て、良き妻、良き母となるよう教育することを約束しよう」

「ありがたき幸せ」

「なれば、いまを限りにイシュリーは我がライヒェンと同盟を結ぶことに相違ないな？」

「はい」

「共にスザンを打ち滅ぼすことを誓うか？」

「はい」

「我が姫との婚約を受諾するか？」

「はい」

「では、誓いの血の証を」

キルヴァは齒で指先を噛み切つて、ウージン王の胸元めがけてさつと手を振った。血が迸る。またウージン王も同じしぐさをした。キルヴァの白い衣装に赤い鮮血が散る。

二人は静かに正対して、両者深く礼をした。

それから公約の誓書を互いに交わし、読み上げ、印を捺し、複製をつくり、交換し、すべての手続きを滞りなく完了させた。

認めた証書を箱に納めてパドウニーに預け、ウージン王がくつくと笑つ。

傍ではパドウニーが出番のなかった弓矢部隊へ撤収の合図をしたところであった。

「どうもこのたびはそなたのいいように手玉に取られた感があるな

誰の入れ知恵だ？　ディレクではあるまい。リユーゲルか？　それとも、そちらの白き十二翼天か……？」

「私の軍師、次軍師セグラン・リージュの策です」

「ふむ。落ち着いたら、紹介してもらおう必要があるそうだな」

「では酒宴の席でも設けましょう」

「楽しみにしている。だがその前に、スザンを滅すぞ」

「完膚なきまでに」

既に日は傾き、風が冷たさを増す中　夕焼けに、珍しく大きな半円の虹がかかっていた。

吉兆か、凶兆か。

空の？族であるステラでさえももの珍しそうに眺めていた。

この夜、キルヴァは陣地に戻って帰りを待ち侘びていた皆に無事な姿を見せ、交渉の場の一部始終を話した。

翌日。

約束通り、五日目にして王宮へ帰還を果たしたキルヴァはライヒエンとの条約の締結を告げ、その証書を提出し、また自らの婚約に基づき恒久的同盟の正式認可を主張した。

かくて事態は一気にスザン討伐へと動き出す。

ひとまず天人兵団の投入は見送られたものの、いつでも出征できるよう待機を命じられた。

そしてキルヴァには、王命により、正式に出陣要請が下った。

怒涛のスザン戦のはじまりである。

盟約（後書き）

記念すべき五十回目で一区切りとは、我ながらいい配分でした。
はい。

次回より、また戦場です。はい。ガンバレ、私！。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

第六章 喪失の意味を知るということ 戦さの前に（前書き）

新章スタート。また戦場へ。ま、その前に、色々諸々をやってっけねばなりません。まずは、ミシカとカーチスから。

第六章 喪失の意味を知ること 戦さの前に

リアストン暦九百九十三年、ノーレッサの月、第十八日目、イシユリー国第五領地スザン国国境に設けられた前線基地に、イシユリー軍は続々と集結しつつあった。

先のこの前線基地奪回を目的とした戦と異なり、このたびはディレク王よりスザンを総攻撃の上、国王ドロモス・ヨーデル・スザンの首を奪取するよう王命が下っている。だが戦隊の指揮については怪我の具合がおもしろくないことを理由に断念せざるを得ないとして、軍師リユージェル・ダツファリー共々 王宮にて待機する通達があった。

代わりに、総指揮官をキルヴァ王子に委ねることを表明し、その笏杖を手渡すことによつて、指揮権を譲渡した。

事実上、キルヴァ王子の近い将来の戴冠をも視野に入れた、国を背負つての初戦であった。

前線基地及び周辺一帯は緊迫した空気に包まれていた。

開戦間近、号令以下いつなりとも出兵できるように各隊待機の命が下つて幾日か経った。

緊張と高揚と倦怠と不安と悲哀が混濁として澱む中、イシユリー兵の多くは自主訓練、武器の整備、体力温存に努め、小隊長以上の役職に就くものはよく自分の隊の面倒をみるため全力をかけていた。細かな指示が明日の命を左右するとあつて、視察や情報管理の面でも徹底して報告を義務付けた結果、隊として機能する不具合はほぼ解消されつつあった。

キルヴァは多忙を極めていた。

故に、キルヴァ直属の近衛兵七名、加えてこのたびの作戦では参謀を務める次軍師セグラン、その近衛兵九名と筆頭近衛兵ジェミス・

ウィルゴーも全面的に忙しかった。

いまして、一時的に留守を任された第四領地副領主リュトリス・アルモニーより伝言を預かって基地を訪れていた使者が返信を携えて領地へ帰っていった。

ミシカ・オブライエンは使者を基地の外まで見送りついでに配給の不足がないかとあちこち声をかけながら、内通者が潜んでいないか眼を配り、ひそかにその報告を受けつつキルヴァのもとへと戻る途中、カーチス・ゴートと出くわした。

「ひとりか。王子の警護はどうした」

「アズガルとステラが就いている。あんたこそなんでこんなところでふらふらと……飯は食べたのかい？」

「いや」

「まだなら一緒においで。食いつばぐれて夜更けに出陣だなんてことになつたら大変だろう。腹が空いては戦なんてできやしないよ。さいわい今日の食事当番はエディニーだから私が作るより断然まし
さ」

「飯はありがたいが、あんた、いくら味方の陣とはいえこんな暗く
なつてから女がひとりで出歩くな。危ねえだろう」

「危ない？ なにが」

きよとんとしてミシカは首を傾げた。

「襲われたらどうする」

「は？ 私が？ ばかを言うな、私を襲う物好きな男がどこにいる
つてんだ。エディニーならともかく、ありえんよ。そんな心配は無
用だ」

だが、言っている傍から「ミシカー」と声援やら口笛やら秋波やらがとんでくる。それらの大半は決して野次ではなく、嘘でもなく、真剣な気持ちがかもっているのだが、問題は、ミシカがそれらをまるで歯牙にもかけておらず、本気にしていないという点だった。

「……不用心すぎる」

カーチスはぼそつと言った。ミシカの耳には届いていない。

ミシカはほとんど無防備にカーチスに笑いかけた。

「正直、あんたがいてくれて心強いよ。あんたを寄こした軍師殿にも感謝しなきゃならんね。あんたの戦器量は私らもよく知っているからさ、王子のために働いてくれるならこっちの負担もだいぶ軽減されるってもんだ。だから、いまあんたに倒れられたら困るんだ、飯と睡眠はできるだけきちんととって 聞いているのかい」

「ミシカ」

「ん？」

「俺の嫁になってくれ」

沈黙。

「……なんだって？」

「このスザン戦が一段落したらでいい。俺の嫁になれ。いいな」

ミシカは眼をぱちくりさせた。口を開けては、閉じて、また開けては、閉じた。

「冗談」

「あいにく、本気だ」

カーチスの向こう、既に西の方に日は没し、紺青の色が深まりを増す中、一切のざわめきがミシカの鼓膜より途絶えた。

思わず足を止めて棒立ちになったミシカの手首をカーチスの強張った厳つい手が掴み、王子の天幕までそのまま引いていった。その間、ミシカは一言も口がきけなかった。

第六章 喪失の意味を知るということ 戦さの前に（後書き）

ばかな赤っ恥告白をひとこと。

第五章をいまのいままで第三章と銘記していました。さっそく修正をかけたんですが。泣。どなたか気がついた方がいらしたら、一報をくだされば……血の涙。恥。恥。恥。恥。すみませんでした。引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

月が昇る（前書き）

なんとも半端な区切りですが。細かい、つたない、伏線を張り巡らせ中です。

月が昇る

キルヴァの天幕ではエディニイ・ローパスの手による炊き出しの準備がほぼ整ったところであった。

「味、どう？」

休息していたクレイ・シュナルツァーがちょうどよいところに顔を出したので、エディニイは味見役に手招きした。

「申し分ないですねえ」

「本当？」

「ええ、鶏ガラだしのすごくおいしいスープです。ところで、スザンでダリーの血縁者らしき男を拾ったとか」

「他人の空似かもしれないからまだダリーには言わないでよ。って言うか、なんであんたが知っているの。私、王子にしか報告してないのに」

「私の地獄耳をなめてはいけません」

得意げに胸を張るクレイをエディニイは抑えた口調で諫めた。

「……あちこち首突っ込むのもほどほどにしておきなさいよね。いつか仇になるわよ」

「はいはいはい、ご忠告いたみいます。さて、ではスープも完成、肉もこんがりと旨そうに焼けましたので、そろそろ王子をお呼びしましょうか。ああいいですよ、私が行きます。あなたはスープが焦げないように火加減でも見ていてください」

夜が間近に迫っていた。

空は藍色と紺青に染まり、その中で肋骨のごとく広がる湾曲した雲陰が鈍く浮き上がっている。

既にどの天幕にも青角灯が下げられ、薄暗闇の中でぼつ々と灯っていた。あちこちで夕餉のための白い煙が上がっている。喧騒とさざめきの中、クレイは夕食時の喧騒と音程の狂った鼻歌をうたいながら、すぐ斜め前方に張った軍議専用天幕へと向かった。

軍議は大詰めだった。

エディニイのもたらしたスザンの新たな情報を取り入れたセグランの軍略をもとに、作戦の概要はほぼ決定されつつあった。

天幕内には大きな円卓が中央に据えられ、二十余名がキルヴァを中心に円卓を囲っていた。円卓にはスザンの国土地図がひろげられ、キルヴァの眼が指が地図上を這う。

「スザンの糧道は八箇所。だがその中でも重要拠点がこの二箇所。まずここを押さえる。地方から首都に物資が運び込まれないようにするのだ」

「押さえた糧食はいかがしますか。確保ですか、燃やしますか」

「燃やさぬ。せつかくの貴重な食べ物と粗末にするなど罰があたるぞ」

「しかし、運搬するには人手が足りません。兵を余分に割くのなら人員の割り当てを見直さねばなりません」

「見直さずともよい。それは別の手立てを考えている。それよりも気がかりなのはスザンの“天人兵”だ。我らとライヒエンが同盟を結んだ以上、スザンは窮地に追い込まれた。戦力は出し惜しみせぬに違いない。だが我々は極力天人との衝突を回避せねばならぬセグラン、なにか策はないのか」

「天人は揉めて勝てる相手ではございません。相手にせぬことが肝要です。ならば、いまこちらからは仕掛けず、しばしお待ちください」

「どの程度“待つ”？」

「あと数日中には」

「その前に攻撃があつたときは？」

「戦略的撤退です」

不満と不平が口々にもれる。険悪になりかけたところを、キルヴァが手を上げて場を制した。

「参謀がこう申すのだ、万が一のときにはとにかく逃げるとしよう。皆には急な進軍と急な撤退があるかも知れぬ旨を説明し、備えさせ

よ。以上、本日は解散」

言つてキルヴァは表に出た。迎えに来たクレイと鉢合わせする。用心のためすぐ傍に控えていたアズガルとステラが後に続き、間をおかず、セグランとジェミスも退出してきた。

キルヴァの天幕に戻ると、全員が揃つた。

「おかえりなさいませ」

エディニイが微笑み出迎えて、皆を席に着かせ、さっそくてきばきと配膳をはじめめる。

夕食はにぎやかなものになった。雑談と笑話、それぞれの思いを胸に秘めながら、ひとときの平安を噛みしめた。

まもなく戦の火蓋が切つて落とされる。生と死と、紙一重での命のやり取り。敗北は死を意味するならば、勝たねばならない。 。
やがて月が昇り、戦場の夜が更けてゆく。

月が昇る（後書き）

次話、ステラとキルヴァのエピソードです。

こうして少しずつ、進展させていくのはだるいような、温いような、いいような、悪いような、快感なような。笑。いくつもの伏線がいつか消化されるとき、それはとても気持ちがいいものですよね。引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

たとえ神に背くつとも（前書き）

キルヴァとステラ、告白劇です。どうぞ。

たとえ神に背くとも

夕食後、キルヴァはステラとカズスを伴に夜間視察へと出た。

いつもエディニィより心配されるので今日は言われる前に防寒用の黒いマントを羽織った。

外はいつにもまして暗かった。見上げれば空を雲が蔽い、月も星も見当たらず。吹く風は強さを増し、湿気を帯びて、生温い。

陣中は落ち着いており、目立って不審な点はない。国境線が見えるところまで来て、暗闇に浮き上がるスザンの赤い火の帯を見つめる。

「今夜半か、明日早朝にも、雨が降るな」

「おそろくな」

答えたのはステラで、髪の毛の先端がかるうじて地面につかないという距離を保ちながら浮遊している。

その声が幾分素っ気ないような気がして、キルヴァはステラの左手の指先を掬うように軽く持ち上げ、引き寄せた。

「いかがした」

「なにが」

「そなた、ここのところ不機嫌ではないか？」

「私が不機嫌なのは、おまえがためだ」

意表を突かれたステラの冷たい返答にキルヴァは心あたりを探った。

「私になにかしたのか」

ステラは険を含んだ一瞥をキルヴァにくれながら、むっつりと咳く。

「他の娘と、婚約しただろう」

はじめなにを言われているのかさっぱりわからなかった。キルヴァは面食らった顔で眼をぱちぱちさせながら、思い出したかのように口をきった。

「婚約？　ああ、マリユカ姫のことか」

「まさか、他にも心当たりがあるわけではないだろうな」

「いや、まさか。妻など何人もいらない　今回の件も、典型的政略結婚だな。まさかウージン王自らが婚姻の申し出をくれるとはさすがに想定外だったが、同盟手段としては一般的で新しくもない。こちらにしても、姫の身柄を国内に預かることでライヒェンとの絆が強いものになるならば、断る理由はない。姫には年齢の離れた夫で申し訳ないが、私で我慢してもらおう。それで、それがどうかしたのか」

ステラはまるでわかっていないな、というように吐息して、空いている方の手で長い髪を掻きあげた。

「おまえは思ったよりも鈍い男なのだな」

キルヴァはステラのなにげないそんなしぐさひとつにも眼を細めた。

「クレイには、よく女心に疎いと言われる」

「おまえは私を嫁にするのかと思っていた」

キルヴァは絶句した。

ステラは佯びしげに微笑んだ。

「私の独りよがりで残念だ」

キルヴァは動転した。頭の中が真っ白になった。ステラとの再会の折よりも激しく、否、かつてないほど激しく。

胸の中を、突然の嵐が吹きすさぶ。流星を見つけたのを発端として、ステラとの邂逅をはじめに思い出がどつと押し寄せる。火の天人と知らされたとき、蒼い吐血を浴びたとき、王家の名において新たな名を与えたとき、魂魄を取り戻さんがために祈ったとき、再会を願った別れのとき、そして戦場で十年の空白の時を経て運命の再会を果たした瞬間。

キルヴァは食い入るようにステラを見つめて、その細い指をぎゅうっと強く握ったまま、ぼつりと我知らぬまま、呟いた。

「そなたを好きなのは私だけだと思っていた」

「そんなわけがなからう」

呆れたように言うステラの声はキルヴァの耳に届きながら、届いてはいなかった。

「そなたは私の憧れで、私はそなたより遙かに年下で、ただの人間で、そなたは十二翼天で、そんなにも美しくて……私など到底及ばない、手など届かぬ存在だと……こうして傍にることさえ奇跡のようなものなのに……」

「私はおまえがために十二翼天となった。すべての禍からおまえを守りたいがためだ。そしておまえがために一族を離れ、地上にいる私の気持ちは知っているかと思っていた」

キルヴァは黙ってかぶりを振った。

ステラは頭を掻いた。

「まあいい。やっと届いたようだしな。少し遅かったが、仕方ない嫁にはなれずとも傍にはいられよう。それぐらいは許せよ」

キルヴァはステラの手を胸に引き寄せた。動悸がおさまらない。狂ったように脈打っている。意識が弾けて、正気は残っておらず、この場には剥き出しの心だけがあつた。

「……そなたを私の妻にできるならば……」

どこか遠い場所で、キルヴァは自分の声を聴いていた。

「……そのためならば……」

ほとんど無意識のまま、キルヴァはステラを抱き寄せた。

「……私は神に背いてもかまわない……」

嵐の到来を予感させる夜の闇の中、急転直下の勢いで火が点いた二人のやり取りに、その場に居ながらにして眼中外扱いをされた感のあるカズスは蒼褪めていた。

天人と人間。

それだけでも禁忌の間柄なのに、恋情なんて不吉以外のなにものでもない。

だが、カズスは諫められなかった。

心のどこかで、羨望の気持ちはあらわになった。このときはそれ

と自分でもわからなかったのだが。

カズスは眼を背けた。唇が切れるほど噛みしめて、掌に爪を食いこませながら。

たとえ神に背こうとも（後書き）

禁忌の恋の幕開け　いえ、二人が出会ったときから、既にそれははじまっていたのですが。とはいえ、恋に落ち、かつ、恋がはじまる瞬間、というものは必ずあるわけで。これからステラとキルヴアは恋の炎に灼かれていきます。お愉しみに。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

小さな嘘（前書き）

ジェミスとエディニイです。

一応注釈をいれると、ジェミスは次軍師セグランの護衛、エディ

ニイはキルヴァ王子の護衛です。

小さな嘘

珍しく手伝いを申し出たジェミス・ウィルゴーと共に夕食の片づけを終えてエディニイは一息ついた。

「意外に使えるのね。助かったわ」

「いえいえ、どういたしまして」

「結構時間を食ったけど、セグラン様をおひとりにして大丈夫なの？」

「お宅の近衛副兵長殿と歓談中なんでね、邪魔しないように出て来たんだ。もう少しここにいるよ。それとも、俺がいては迷惑かい？ 誰か誤解されたくない男でもいるのかなー？」

「からかうようににやにやするジェミスにはまったくとりあわず、エディニイは王子の天幕に隣接した近衛待機用の天幕内を忙しそうに行き来し、縫製箱を前にして座った。手元に青角灯を引き寄せ、針に糸を通す。

「アズガルが隣で寝ているから静かにしてちょうだい」

「あれ、それだけ？」

「エディニイは眉一筋動かさず、手は優雅に忙しい。顔色に動揺は一片もなく、しれっとしている。

「あんたと二人きりでいたからってなんだっていうの？ 別に誰もなんとも思わないわよ。クレイとダリーは留守だからお相手できないし、私はこれからちよつと繕いものをするからなにもおかまいできないけど、居場所がないならいいわ」

「ジェミスはしばらくおとなしくしていた。足を崩して楽に座り、エディニイの針仕事の様子をじっと眺めている。

黙っているのに飽きたように、ジェミスは口を利いた。

「それ、キルヴァ王子の皮手袋かい？」

「ええ、そう。指先に穴が開きそうなの。本当は新しいものをお使いになればいいと思うのだけれど、王子がこれの方が慣れて使いや

すいっておつしやるから」

「で、一生懸命補強縫製しているわけだ」

「ちょっと繕っているだけよ」

「王子に惚れてるのかい」

無分別で唐突な指摘にも、エディニイはびくともしなかった。

「そんなわけがないでしょう」

「本当に？」

「私は身の程を知っているわ。だいたい、王子は先達てライヒェン国の末姫君とご婚約されたばかりでしょう。他の女の出る幕なんてない　ああ、いまの内緒ね。まだ公にはされていないんだったわ」

「……泣くなら、胸を貸そうか？」

「だから、どうして」

「いや、悲しそうな顔をしているから」

エディニイは震えまいとして、縫物を中断し、太腿に手を休めた。目元が緩まないよう緊張させ、ジェミスを手を軽く睨みつける。

「……あまり察しのいい男は嫌われるわよ？　私はひとりで平気だから、放っておいて」

ジェミスは諸手を差し上げて反意のないことを示した。

「はいはい、余計なお世話かいはしませんよ。でも」

骨ばった腕が伸びて、エディニイの肩を抱えるようにさらう。慰めるようにおかれた手は思いのほか温かく、嫌味がなく、思いやりに満ちていた。

「女をひとりで泣かせるのは俺の主義じゃないんでね」

「……変な恰好しているくせに」

「個性的と言え」

「……奇抜な恰好しているくせに、意外に騎士道精神旺盛なのね？　驚いたわ」

エディニイはそつとジェミスの胸に掌をついて、離れた。

「一応お礼を言っておくわ。気にかけてくれてありがとう。でも、大丈夫よ。私は泣かない。だってはじめからわかりきっていたこと

だもの。この思いは報われることのないもの、非生産的で、身分違い。だから、いいのよ。ただ、最期までお傍にいられればそれで……」

「俺がよくない」

怪訝そうにエディニイが眼をしばたたく。

「あんた関係ないじゃない」

「……この流れでどうしてそうつれないことを言うかな。あのなあ、どうでもいいと思ってる女に男が優しくするわけがないだろうが……あんだ、まさか、私に気があるの？」

「その、嫌そうな顔はよせ。いいだろ、別に。俺は気丈な女が好きなんだ。男の隣で平気で戦場を駆けていくような女は特に、な。それに美人で脚がきれいで気が利いて料理がうまくて健気な女なんて言うことない。どうしてもものにしたいいね。王子のことはとっと諦めて、俺にしておけ」

エディニイは取り合わず、繕いものを済ませた。

「返事は？」

「お断り」

「どうして」

「気が向かないわ。自分の心に正直でいたい。だいたい、明日にもスザンと一戦交えるっていうになんでそんなに呑気なの。仕事しなさいよ。それが、そんなに暇なら、私とちょっと仕合してよ。新しいナイフを手に入れたの。重みと使い勝手の感触を確かめたいから相手になつてくれたら助かるわ」

「ひとが口説いてる真つ最中だったのに、ほんっと、冷たい女だね」

「あら、なにか言った？」

「いいや」

ジェミスは拗ねたように悪態をつきつつも、振られたことがまるで嬉しいように口辺を綻ばせていた。

「外はもう真つ暗だぜ？」

エディニイはさっと辺りを片づけて、身支度を整えた。髪を高く

結びあげる。気乗りしなさそうなジェミスを外に追いたてながら言った。

「暗いからいいのよ。夜目にならさなきゃ。緒戦はたぶん、闇の中」

深夜、各部隊に号令がかかり軽装歩兵を先頭に電撃的な夜間進軍が開始された。

小さな嘘（後書き）

ずいぶんと間が空いてしまいました。の割に、短め。だって区切りがよかつたんです。

目下、私生活が滅茶苦茶に忙しく、思うままに更新がはかどらない……。

じりじりと、進めていきたく思っておりますので、どうか、たまに覗いてやってください。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

夜行進軍（前書き）

いよいよ対スザン戦の開始です。登場人物が入り乱れますが、どうぞ気長にお付き合ってくださいませ。

夜行進軍

無数に放たれた尖兵隊の斥候の情報を総括したところ、スザンはイシュリーへの侵攻を断念し、首都カルバルスキーより南東、ハメロン海に面したハメロン海岸を背に前線基地を置き、およそ二十万七千の大軍をエズガシア一帯に展開させ、迎撃態勢をとっているとのことだった。

最終軍議にはこのたびの作戦で指揮をとるため大將軍位に就いたキルヴァと参謀位に就いた次軍師セグラン、書記官、記録係、各部隊の將軍、そして各職位の護衛を務める近衛兵長が集った。

イシュリー軍重装騎兵隊將軍ナジーヴァ・ゲルトミーチエが唸った。

「敵は二十万七千。対する我が軍は十万。ちと厳しい戦いになりそうですね」

キルヴァは歴戦練磨の將に囲まれながらも怯むことなく整然と述べた。

「王が王宮におわす以上、国の中枢の守りを弛めるわけにもゆかぬ。ライヒエンは除いてもアイゼンバーグとプラスカヤの動向も気になるところゆえ、スザンのみにかかりきりになつては、万が一他の国の侵略があつた際に対処できぬ。各方面の国境に配属する兵はそのままにし、我が軍は十万二千で臨む」

「十分です」

とあっさり括つたのは次軍師セグランで、驕った様子もなく続けた。

「数の劣勢は否めませんが、情報戦と策略と指揮官の質でこちらが勝ります」

異を唱えたのはイシュリー軍軽装歩兵隊將軍ラーデン・ベツケラーだった。

「地の利は向こうにあるぞ」

「そう思わせておくのも上策。ですがせっかくの地の利も活かせねばなんにもなりませんまい」

「とうとう？」

セグランは小さく肩を竦めた。

「致命的欠点があるのですよ。いまはあえて申し上げませんが」

「二十万の軍勢も脅威だが、なにより天人兵が出陣してきたらどうなさるおつもりか。翼の数にもよりけりとはいえ、スザン兵よりもむしろ天人兵相手の方が手強いのでは。火だの風だの雷だの、あんな攻撃をくらっては屈強を誇る我が軍とてひとたまりもあるまい」

お手上げだ、というしぐさをしたのはイシュリー軍重装歩兵隊長軍ソル・リーテイラーだ。

「天人兵は相手にしません。最悪、戦略的撤退ですね」

「なんと、逃げるのか！」

「一時撤退し、反撃します。とはいえ、確かに厄介な存在なので封じ込めたいところではありません」

「本拠地をここにおくとすると、陣形はどのように？」

いままで黙っていたイシュリー軍弓矢隊長が気懸りそうに口出した。

「このように」

セグランの指揮棒が机上にひろげられたスザンの国土地図を這う。

「地形上、スザンは横幅よりも縦深に重きをおいて突撃力を大きくしてやることでしょう」

「なるほど、それで我らのこの陣形か。しかし本陣はどこにするのだ？」

「中央です」

「それでは王子の身が危険にさらされるではないか」

と激昂して表情を荒げたのはイシュリー軍精鋭隊長軍カイネシュタルク・フツディだ。

「敢えて隙のある陣形でやるうってんだ、確固とした勝算があるんだらうよ。それで？ 俺の部隊の出番はどこにある？」

遊撃隊隊長カーチス・ゴートは痺れを切らして問い質した。

「あなたに攻めていただくのはここです」

セグランが示した地点に、カーチスは面食らった。

「……ばかな。正気か」

「無論です。ドロモス・ヨードル・スザン王はここにおわします」

低いざわめきが口々に洩れる。半信半疑の囁きが取り交わされる

中、イシュリー軍尖兵隊長軍ルタール・ベルクが争点をずらした。

「ライヒエン国はこのたびの戦にどう参戦なさるのですか」

「海岸線を守っていたいただきます」

「海戦になるのですか」

セグランは曖昧に言葉を濁した。

キルヴァが助けを出すように訊ねた。

「我らはいっつ動けばいい」

今度はセグランもはつきりと答えた。

「今夜です」

「夜行かよ。兵の士気が上がらねえな」

ぼやいたのはジェミス・ウィルゴーで、あちこちから賛同の意が

上がると、キルヴァが片手を差し上げてこれを制した。

「ではこうしよう。夜明けまで目的地に到達したならば俸禄を三倍

にしよう」

「三倍！」

「それは俄然やる気が出るな。よしきた、早速その旨の伝令を出す

ぜ。あとからあれは口から出まかせだなんて言ってくれるなよ」

「無礼が過ぎます」

セグランに睨まれてもカーチスはどこ吹く風の体である。

キルヴァは笑った。軍議の席で声をたてて笑う指揮官などあまり

類をみないだろう。

「私に二言はない。ウージン王からたつぷりと慰霊金を頂戴したか

らな、皆にわけねばなるまい」

言って、年若い大將軍は瞳を研ぎ澄ませた。それはかつての若き

日のディレク王のまなざしに生き写しで、猛々しく覇気が漲り、断固たる決意を示していた。

「皆覚悟せよ。スザンを討つ。目指すはドロモス王の首級ひとつ。いたずらにスザンの国土や民を傷めつけることならず。命令違反には厳罰をもって処す」

そして恫喝するかの如く、腹の底から溜めた声を敢然と解き放つた。

「方々、指揮下の兵にしかと伝えよ！夜明けまでになんとしてでもエズガシアの地に着くのだ。スザン王に眼にも見せてくれよう」「ははっ」

夜行進軍（後書き）

再び戦場へ。戦線を書くのは好きです。が、筆が重くなるのもまた事実。ひとえにこれは、描写力の欠如のためであり、私の未熟の証。とほほ、な感じですが、それでも懸命にいきたいと思えます。引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・一（前書き）

お久しぶりでございます。

いよいよ開戦しました。再びの戦場です。

戦闘場面はいくつ書いても胃がいたい……。

自分の未熟さを痛感せざるを得ないワケです。けど好き。

スザン戦争・一

キルヴァの三倍俸禄作戦は劇的な成果を見せた。

漆黒の闇の中の強行軍であるにもかかわらず脱落者は一兵も出なかった。尖兵隊の綿密な調査による誘導の甲斐あって、翌朝には全軍エズガシアの地に到着した。

度肝を抜かれたのはスザン軍である。夜明けと共に忽然と出現したイシュリー軍にすっかり機先を制された形となってしまう、全軍浮足立つようにあたふたと右往左往した。

折しも、雨が降りはじめた。湿度の高いこの地域では日に何度か猛烈な集中豪雨に見舞われる。それこそ視界など利かぬくらいの雨量である。

この土砂降りの雨の中、一騎、イシュリー軍の布陣より僅かに進み出た。

「天は我に味方せり」

と朗々と響く声もて言つて、キルヴァは高く拳を突き上げた。

「いまこそ好機。戦闘用意！」

「戦闘用意！」

傍らに立つ次軍師セグランが大音声を上げて繰り返す。

イシュリー軍、大將軍キルヴァ・ダルトワ・イシュリーの手に握られた笏杖が一気に振り下ろされる。

キルヴァは叫んだ。

「全軍突撃！」

スザン軍は斥候の報告によるセグランの読み通り前面に六万の軽歩兵、その後方に八万の重歩兵を三段に構え、側面の左翼右翼に三万ずつの騎兵を置いた、地形上横幅よりも縦深をとった突撃力重視の布陣で展開していた。

一方イシュリー軍は前面に二万の重歩兵、後方に二万の軽歩兵を

凸形の広陣に配備し、右翼にキルヴァ直属の軽装騎兵一万、左翼にナジーヴァ・ゲルトミーチェの重装騎兵二万、右翼後に弓矢隊一万、左翼後に弓矢隊一万、そして別動部隊にカインেশユタルク・フツデイの精鋭隊一万を配属した。

戦闘開始の両軍の角笛が雨天の中重らかに響き渡り、鬨の音が激しく上がる。

スザン軍はイシュリー軍の突撃開始より僅かに後れをとったものの、まず軽歩兵六万が長槍を身体の正面に構え、ほぼ態勢を乱すことなく、イシュリー軍の半月型中央に楔状に突進した。紛れもない中央突破である。

六万の猛然たる足音が向かってくる中、“鉄壁”の異名を誇るイシュリー軍重装歩兵隊将軍ソル・リーテイラーは一步も退く気配なく、騎乗で指令を出した。

「総員、盾用意！」

迎え撃ったのはイシュリー軍の二万の重歩兵で、絶対数では劣るものの、重装備に加え各個大盾を翳して腰を低く、重心を低くして進撃した。

まもなく両軍が激突し、雄叫びが轟いた。

キルヴァは中央の危機を放置した恰好で前線の戦いを見守っていた。

軽歩兵に対し重歩兵をぶつけるとは、本来あるべき兵の配備とは趣の異なる布陣であり、各部隊の将軍より様々な意見があった。だが、

「兵力の差が大きくある以上、従来の戦略では勝てません」

と、参謀職に就く次軍師セグランが作戦の全容を説明した。

「まず、数で圧倒的に劣る我が軍が軽歩兵に軽歩兵をあてたところで劣勢であることは明らかです。そこで、軽歩兵には重歩兵を、六万の攻勢に対し三分の一の兵ではじめの一手をしのぎます。ここで重要なのは、押し負けないこと。前線を下げないことです。撃破の必要はありませんので、ソル将軍は深入りしすぎないように統制をと

つていただきたいのです」

ソル・リーテイラーの懸念は他にもあった。

「もし、天人兵が出撃してきた場合は？」

「天人兵の出撃がない条件下にて戦いたいと思います」

「つまり？」

「雨天を狙います」

セグランの答えは簡潔だった。

「天人は水に弱い。雷・火・風のいずれも雨の中では飛べないはず。彼らは翼が濡れるのを嫌がります。飛べたとしても、発揮する力は極端に落ちます。水の天人はそもそも争いを好まないで攻撃部隊には相応しくありません。雨の中での天人兵の出兵はまずないとみてよいでしょう。さいわい、いまの季節この地方は局地的集中豪雨に見舞われます。天候が我らの勝利の鍵を握るでしょう」

キルヴァは訊ねた。

「前線を下げず、力の拮抗で引き分けたそのあとは？」

「敵は主力部隊である重歩兵を投じてきます。我が軍は軽歩兵で応戦します」

「八万の重歩兵に二万の軽歩兵で迎え撃つのか！」

「はい。とはいえ、まともにもやりあつては勝てませんので、ここは一計を講じたいと思います」

スザン戦争・一（後書き）

区切りがいいので、短いですが、この辺で。

戦記ものは会話がなくて、辛いですねー。

そうだ、一応、書いておこうかな。

天人は、強い順に、バロイ・シャーサ 雷の天人・ラク・シャーサ 火の天人・ソレイア・シャーサ 風の天人・ウイア・シャーサ 水の天人です。

翼の数は、十三翼が長、その下に十二翼天、以下偶数です。翼の数が多い方が強いですが、十翼天以上は非常に数が少ないです。ですからステラは長以外では最強の天人の部類に入ります。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・二（前書き）

最前線です。

戦記ものの醍醐味は、戦略ですが、いやはや、大変。読むのも、大変。よろしくおつきあいくださいませ。

スザン戦争・二

両軍激突後、激しい攻防が繰り広げられたが、どちらの陣形も崩れなかった。

特にイシュリー軍はよく統制された指揮下にあり、組織だって防戦し、装備でおとるスザンの軽歩兵をいたずらに深追いせず、兵力の差を補って余りある戦いぶりだった。

スザン軍の中央部隊を預かっているのは、スザンでも豪傑として名高い三名のうちがひとり、ビヨルセン・メオネスだった。

歴戦練磨のつわもので、スザン王の覚えめでたく、国民にも剛勇を持って親しまれ、最後の砦とされていた。

ビヨルセンは味方の兵が善戦するも蹴散らされ、決め手に欠ける攻撃をしかけては押し返され、膠着状態にもつれ込み無駄死にしていくのを、これ以上黙って見てはいられなかった。

折悪しくも雨がやまず、主力である重歩兵を動かすには最悪の条件であった。

足場が悪いことに加え、水を含んだ服に甲冑の重みで行軍速度は遅く、大軍のため伝令が行き届くまでに時間を要した。

それに、王宮務めの十人の参謀が選り抜いたこの決戦場は二十万の軍勢を配備するには狭すぎた。

天人兵を投入し、殲滅作戦のためとはいえ、敵軍をつまぐ誘導できねば窮地に陥るのはこちらである。

参謀らは数の多さで中央突破し、そのあと四分五裂の状態に陥った敵軍を左右より追いついて立てるように困り込みをかければ問題ないと言ったが、ビヨルセンはそう簡単に事は運ぶまいと思った。

起伏のある低い丘陵が複雑に入り組んだ地形、山林、勾配のある崖と切り立った絶壁、背後は海である。

確かに目論見通りにいけば、一網打尽にできよう。

町に被害もなく、一般民を巻き添えにすることもない。
しかし、頭数が多ければ必ず勝てるというものでもないとい
ことをビヨルセンは知っていた。

だが陛下の命令である以上、従わねばならぬ。

戦場の指揮権はビヨルセンにあったが、全権はドロモス王その
ひとが握っていた。

たとえ、いまこの場に不在であっても。

ビヨルセンは命じた。

「負傷者を収容し軽歩兵を下がらせよ。救命隊を出動させ、治療
にあたれ。重歩兵、前進！ いざ戦わん！ 狙うはキルヴァ・ダルト
ワ・イシュリー王子の命、そして敵軍撃破である！」

前線の斥候から第一報が届いたのは重装兵の第一陣が突撃開始
した直後であった。

「申し上げます！ 敵軍戦列交代！ 重装兵より軽装兵へ！ 繰り
返します、敵軍戦列交代！ 重装兵より軽装兵へ！ その数、およ
そ二万！ 尚、軽装兵の武器は長槍のもよう！」

「軽装兵だと？」

重装兵と軽装兵では戦うまでもない。

同じ二万の兵でも戦況は一方的なものになるだろう。

だが相変わらず前線の勢いは拮抗していた。

よくよく見ると、イシュリー軍は戦列をがちりと組んで波状攻
撃を繰り出し、味方の兵は思うように前へ出られず、四苦八苦して
いる。

「長槍とはどのくらいの長さだ」

「およそ三ロンテ（三メートル）」

「成程。間合いが開きすぎているな」

ビヨルセンは対抗策を講じようとして、はっとした。
自軍の後陣を振り返る。

灰色の雨がしとどに降る中、眼を凝らす。

整然と待機する後陣の更に後方へ視線を向けたそのとき、山林上空に小さな鳥の群れが飛んだ。

これを見たビョルセンは、口角を歪め、「温い」と呟くや否や新たな命を下した。

「敵は背後にあり！ 重装兵第二陣、第三陣は急ぎ反転！ 攻撃に備えよ！」

スザン戦争・二（後書き）

目下、掲載の仕様を修正中。

少しでも、読みやすくあればよいのですが。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・三（前書き）

スザン側とイシユリー側の両方から描いています。
そして、更に、両軍のあちこちから。

現在は、スザン側です。

スザン戦争・三

スザン重装兵六万の行動は素早かった。

伝令が巡るやすぐに各小隊の隊長がその場にて足踏みを号令し、全体が揃うのを待って、気合いのいった掛け声とともに一斉反転した。

ビョルセンはすつと腕を上げ、足の速い伝令を二人呼びつけた。

「左翼右翼のアレンジー・ルドル將軍とゲオルグ・ニーゼン將軍に急ぎ申し伝えよ。左翼騎兵は前線の後詰めに就き、右翼騎兵は後方の後詰めに就くようにと。前後とも中央突破したのちはそのまま両極から囲い込みをかける。あの者たちはどうも遅参を好む故、くれぐれも後れを取るなと念を押すのだ。よいな」

この伝令を受けたアレンジー・ルドルとゲオルグ・ニーゼンの両將軍は左右に分たれて三万ずつの騎兵隊を統率していたが、咄嗟に二人揃って左右の断崖絶壁を見上げた。

濡れた岩肌は黒ずみ、凸凹加減によつては不気味に人面相にも見えた。

事実、この戦いの後には“嘆きの人面岩”の異名をとることになるのだが、いまのところ危険の芽はない。

左翼騎兵隊を率いるアレンジー・ルドルがぶつぶつ言った。

「杞憂にすぎんのか。けどなあ、前が陽動で後ろから挟み討ちかよ。まだなにかありそうだがなあ……」

副将を務めるネイサン・ベンレーヴァが報告を兼ねて言った。

「第一陣は目下交戦中ですが、撃破するに至らず、苦戦しております」

「は？ なぜだ。相手は軽装兵に変わったんだろう？」

「敵の装備する長槍が通常の三倍の長さがあり、それを二人一組で支え、隊列に隙なく一列で突進を繰り返しては次と交代という戦法を繰り返しているようです。重装兵の装備である長剣では間合いが開き、槍先を叩き折ってからでなければ身動きがとれず反撃もままならないと。いかがでしょうか」

「やるなあ。動きの鈍い重装兵相手ならではの戦法だ。しかし長くはもたねえよ。仕方ねえ、遅れるなどの仰せだし、行くか。後詰めがなけりや困い込みなんぞ出来ねえからな。よし、総員用意！俺の隊は俺に続け。頑張ったら報償やるぞー。気前よくやるぞー。だから誰も命を粗末にするんじゃないぞー。わかったなー」

まず動いたのは左翼騎兵だった。

右翼騎兵隊を率いるゲオルグ・ニーゼンは前回の戦で終始翻弄されたこともあり、慎重を期して行動すべきだと、すぐに命に従わずにいた。

相手がキルヴァ王子であることも複雑であった。

あのと時曙光の中で見た、翡翠の瞳が忘れられない……。

ゲオルグ・ニーゼンは顔を顰めた。

討つべきはキルヴァ・ダルトワ・イシュリー王子で、己の立場では、そこにためらう余地はない。

「尻尾を切ろう」

不意にそんなことを言い出したので、副将であるアボルト・ブロナンデイスは訊き返した。

「尻尾、ですか」

「五千ほどでいいか。おまえに任せるからな。不測の事態に陥った場合は勘で動け。正攻法でものを考えるな。キルヴァ王子は手強いぞ。まともにやりあったら奥の手が二つ三つ出てくるからな、そのとき思い浮かんだ策で一番尋常じゃない手を使うんだ」

「尻尾つてまさか勝手に隊をわけるといことですか。そしてその指揮を私に？　しかし私は將軍の補佐を」

「俺の隊だ、俺が好きにしてどこが悪い。いいからやれ。えーと、そうだな、ダリエロ・アイアンの小隊をやる。じゃあな、頑張れよ。頑張らなかつたら減給するぞー。あー、第五小隊を除いた総員に告ぐ。俺のあとについて来ーい。遅れたら減給するぞー。無謀に戦つてもだめだぞー。死んだ奴に給料は払えんぞー。よし、いくぞー」

そして間延びした命を下し、愛馬を軽く棹立たせ、馬首を返した。蹄鉄を打った前足が泥に沈み、泥水がばしゃつと飛び散った。

スザン戦争・三（後書き）

掲載仕様を変更中、その？。といっても、改行を挟んでみただけですが……少しは見やすくなったかな？？

次、イシュリー側、キルヴァに視点が戻ります。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・四（前書き）

カズスとジェミスの見せ場が続く、任務です。

スザン戦争・四

スザン軍は二分割された。

前方に二万の重装兵と三万の騎兵、後方に六万の重装兵と三万の騎兵。どちらも両極に進軍するのでたちまち距離が開いてゆく。

「そろそろ頃合いでしょう」

セグランは入れ替わり立ち替わり参上する斥候の報告を受け、新たな指示を与えつつ、戦場の動向を見極めながらキルヴァに言った。キルヴァは短く頷き、次なる号令をかけようとして、ふと思いとどまった。

「しかし、いったいどのような手段であも計ったようにスザン兵を反転させたのだ？」

「鳥を放ったのです」

「この雨天に？」

「雨天だからこそです。少し機転が利くならば異変があれば察知します。ましてや相手はビョルセン・メオネス、音に聞く知略と剛の者です。さすがですね、一瞬にして看破された」

「看破されることを見越しての次の策だろう。思ったより雨足が緩まないが、大丈夫かな」

「いま一番手をジエミスに申しつけました。そうすれば失敗しても最低限の犠牲で済みますからね。ああ、王子がご心配なさるようなことはありませんよ。あの男、見た目よりずっとしぶといんです」

キルヴァは唇を横に引き結び、眉根を寄せて首を擡げた。視線の

先には断崖絶壁が黒々と聳えている。

その任務に際して、はじめに名乗りを上げたのは、カズスだった。

「俺が行きます」

「行つてくれるか」

「はい！ 俺、大角鹿にも乗ったことあるし、山羊を飼っていたから道に迷った奴らを崖っぷちから連れ戻したことも何度もありますよ。高所にも急斜面にも岩場にも慣れてるし、俺にやらせてください」

「では頼む、カズス」

「はっ！」

苦渋の決断でキルヴァがカズスに危険な役目を負わせたのを見て、セグランは言った。

「ジエミス、あなたも行きなさい」

「はあ！？ なんで俺が」

「あなた馬術だけは人より抜きんでて上手でしょう。いま役に立たないで、いつ役に立つんです。つべこべ言わず、四の五も言わず、文句を言わず、行くんです。いいですね」

問答無用で「はい」と言わせて、ついでにまとめ役も押しつけて、他にも体力と操馬術に自信のある者を百名ほど選抜し、五十名ずつの小隊を編成した。

かくて彼らはこの戦場において、最も過酷な役目を担うことになる。

スザン戦争・四（後書き）

久々に投稿。短めだけど……。また次に戦場の模様がかわるので。

戦記は難しいですね。こちら側と敵側の両方を描いてぶつける方が面白いので、そう試みてはいるのですが、配分がなかなか、なかなか、上手にできない。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・五（前書き）

戦場も乱戦模様ですが、物語視点もスザン側とイシュリー側の両方から見た模様で、乱れています。

スザン戦争・五

豪雨止まぬ戦場にまぎれもない突撃指令の角笛が鳴り響く。

それはスザン軍六万の重装兵と三万の騎兵の眼と鼻の先、真正面の山中から聞こえてきた。

「戦闘用意！」

ビオルセンの一声で、ザツ、ザン、と六万の重装兵が滑らかに停止し、盾を構え、腰に佩いた剣を抜き放ち、突撃態勢をとる。

だが、いつまで待っても「かかれ！」と次なる指令は下りなかった。

ここにきて、ビオルセンは異変を嗅ぎ取った。角笛は鳴ったものの、兵の潜む気配がまるでない。

雨に消されているとはいえ、人馬の体臭もない。地面に耳をつけて様子を窺わせてみても、静かすぎる。

ビオルセンは功を急いでいまにも突進をかけそうな緊張を強いられている六万の兵の武者ぶるいを、だが、一旦断たねばならなかった。

「総員待機！」

失望のざわめきがひろがり、突撃態勢が解除される。肩すかしをくらって緊張が弛緩した、そのときだった。

「突撃！」

「突撃　！」

キルヴァはビョルセンの見せた一瞬の隙を逃さなかった。

俄かに雄叫びが上がり、左翼よりひそかに移動して好機をうかがっていたイシュリー軍ナジーヴァ・ゲルトミーチエの重装騎兵二万と右翼にてじつとしていたキルヴァ直属の軽装騎兵一万が、同時にスザン軍後方部隊の両側面を包囲進撃した。

機先を制されたスザン軍は崩れた。

武装解除の直後であったため油断を衝かれた恰好で、陣形は乱れに乱れた。大軍であるため一度崩れれば各指揮官の号令も指令も行き届かず、組織だった反撃態勢はほとんど不可能で、はじめの攻撃で致命傷を負わなかった兵たちも隊列を組む余裕などなく、すぐに各個の戦いがはじまった。

雨とぬかるみで視界と足場が悪いことも手伝って、双方、乱戦となった。

一方キルヴァは先陣を切って攻め込んだあと、間髪置かず、左右両翼後に控えていた弓矢隊二万を動員し、スザン軍の両側背深く展開させた。

最初の包囲網から逃れようと戦線離脱したスザン兵を次々に近距離から狙い撃ちしていく。

イシュリー軍参謀職に就く次軍師セグランの計略による接近戦と遠距離戦を見事に融合した二重両翼包囲は敢行された。

刻々と犠牲者の数は増えていき、早くもスザン兵の潰走がではじめていた。

右翼騎兵隊を率いるゲオルグ・ニーゼンがイシュリー軍の弓矢隊の一斉弓射攻撃を逃れて駆けつけたときには既に乱戦の真っただ中で、命令系統のいずれも機能不能な状態だった。

陣形を再度整えようにも、これを阻止せんとするイシュリー側の軽装騎兵が、小隊長をはじめとして指揮官らしき人物を対象に集中的に攻撃の手を加えていったらしく、統率をはかるうにもはかれな
い具合であった。

「ビヨルセン・メオネス將軍は何処か！」

ゲオルグは叫んだ。

足元にはビヨルセン付きの副将や近衛、斥候が広い範囲に斃れている。

イシュリー軍の猛攻を受けた爪痕が見受けられた。重装兵は部隊としてまとまってはおらず、戦闘はそこかしこで繰り広げられ、ゲオルグ自身イシュリー軍の若い腕の立つ騎兵の浅い攻撃を凌ぎながら、しばらくあたりを搜索し、死体の顔を覗き込んだり、絶えず呼ばわつたりと、手を尽くしたが、ビヨルセン・メオネスを見つめることは出来なかった。

「まいったなー。あのしぶといご老体がそう簡単にくたばるわけもないと思うんだがなー」

「いかがしますか」

訊いたのはゲオルグ直属の近衛兵長シンギス・ヒュリスカヤで、ビヨルセン將軍探索のため一時散開していた部下全員を招集してから言った。

「このままでは」

「あー待て待て。不吉なことを言うのはよせ。余計に参っちまう。

繊細な俺にはもつと優しくだな」

「それで、どうなさるのです」

「おまえも意外に短気だよなあ。せめて最後まで言わせてくれても

いいのによろ。ま、いいや。ここは一時退却だ。さいわい俺の隊はほとんど無傷だろ、負傷者で助かりそうなやつを優先して収容しろ。そのあとは、ま、状況によるな」

「報告によれば、イシュリー軍の軽装騎兵の中にキルヴァ王子がおられたようですが」

「いま捜させている」

「発見したのちは？」

「俺が行く」

「それでは我が軍が指揮官を欠いてしまいます。僭越ながら、私にその任をお与えください」

「だめだだめだ、俺は王子とは因縁があるんだ。俺が行く。行くつたら行く」

「お言葉ですが、ビヨルセン將軍、アレンジー將軍、兩名とも陣中不在のいま、我が軍の指揮を執られるのはあなたさましかおられません。軍規にもはつきりとその旨明記されております。アボルト副将も留守のいま、ここは、私が参ります」

シンギスの淡々としながらも押し強い口調にゲオルグが言い負かされそうになったときである。

細い弓弦の音が響いて、雨のため勢いを失速させながらもきれいな弧を描きつつ、一本の矢がゲオルグの真上に降って来た。

ゲオルグは、これを素手で掴んだ。

いつのまにか完全に包囲されていた。

そして正面に現れたのは。

スザン戦争・五（後書き）

戦線真つただ中。

戦記ものの醍醐味は力と力、智と智、運と運の奪い合いかと。
キルヴァを乱の中心に、終息はまだです。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・六（前書き）

この回は、数ある戦闘場面のなかでも、とても絵になる戦いでした。とはいえ、どこまで描写が追いついたのかは、不明ですが。

スザン戦争・六

前方ではスザン軍二万の重装兵とイシュリー軍二万の軽歩兵が熾烈な戦いを極めていた。

はじめ善戦していたイシュリー軍軽歩兵隊は、しかし徐々におさはじめ、装備の優劣が力の差となつてあらわれはじめた機を、スザン軍三万の騎兵を預かるアレンジー・ルドルは見逃さなかつた。

「イシュリー軍、崩れた模様！」

「よし、一気に潰せ！ 俺の隊は左右二手に分かれて囲い込みをかけるぞー、つて、なんだ？」

俄かに、雨に混じつて石礫が降ってきた。同時に大量の土砂と天を衝く雄叫びがまっしぐらに、真っ逆さまにスザン軍めがけて襲い来る。逃げる間もなく、次の瞬間、イシュリー軍の奇襲隊が雪崩を打って押し寄せた。

「敵軍奇襲 ！ 敵軍奇襲 ！」

到底通行不可能と思われた左右の断崖絶壁から上がった鬨の声に、勇猛果敢を誇るスザン軍の騎兵隊も混乱に陥つた。

間一髪でこの襲撃を逃れたアレンジーは己の失態を呪つた。

断崖からの攻撃を警戒はしていても、まさかこの峻嶮な崖を馬で駆け下る暴拳を犯す者がいるとはさすがに読み切れなかつたのだ。

形勢逆転のつもりが更にひっくり返された。

奇襲隊は少数だったが、効果は劇的だった。

それはジェミス・ウィルゴアの功績によるものだった。

先頭をきつて駆け下った彼の手綱捌きが手本となったおかげで、あとに続く者がこれを真似、大きな犠牲もなく任務を遂行できたのだ。

アレンジ―はほとんど時間差なく左右から合流した二人の男に眼をつけた。奇襲の要となっていた二人だ。おそらくどちらも奇襲隊を率いた指揮官だろう。

見たところ、抜きんでた力量がものをいっていた。

人馬もろとも転げるように突進してきたあと、見事な体捌き、手綱捌きで転倒を免れ、剣を振りかざし、突破口を開いていた。その武勇は他を凌駕し、圧倒的強さを見せつけた。

そこへたまたみかけるように、一度は退いたイシュリー軍の重装兵が軽装兵の後方より突撃してきた。

「迎撃用意！迎撃用意！来るぞー」

アレンジ―は剣を抜いた。

愛馬が甲高く嘶く。

これを合図としたかの如く、両軍激突した。

大胆不敵なイシュリー軍の策にスザン軍は翻弄された格好となった。統率力では群を抜いて秀でているアレンジ―であっても、もはや陣の立て直しは困難だった。

いかんせん、兵の数に対して戦場が狭すぎた。そこを見抜かれていたのだ。

大軍は機動性に欠ける。故に策を練り、兵を分け、機動性を持って攪乱するというイシュリー軍の攻勢は徹底していた。

「軍師の出来の違いが災いしたな」

アレンジ―は誰にも聞こえない声で呟いた。群がるイシュリー兵

をほとんど一閃で薙ぎ払い、周りを見渡した。

既に敗走がはじまっている。そのほとんどが海岸線に向かっていった。まだ戦う気概のあるものは戦場に踏みとどまり、泥にまみれた乱戦を繰り広げていた。

後方からの連絡も途絶えていた。さきほどから大喚声が絶えないことを考慮に加えると、状況はおもしろくない。

「……やってくれるなあ。ゲオルグの奴、死んでねえだろうな。俺、あいつには借りがあるんだよな。っと、ひとのこと心配している場合じゃねえか」

「その通りです」

副将のネイサン・ベンレーヴァが長槍を手にしつこく戦いを挑んできた者らを文字通り蹴散らして、アレンジীরすぐ傍に戻ってきて言った。

「ここは私が引き受けます。どうかお逃げください、將軍」

「ばっかやろう。手下を盾にしてトンスラこくほど落ちぶれてねえぞ。おまえらこそ逃げろ、逃げろー。この戦は仕切り直すぞ、給料欲しい奴は逃げろー」

だが、アレンジীরルドル麾下の者は一兵たりとも逃げなかった。動ける者は、まるで示し合わせたように、アレンジীর周囲を何層にも守る陣形を固めた。

「おいおいおい、俺の命令だぞ、ちゃんと聞けっつての」

「あなたさまが逃げるなら、私たちも逃げます」

「そうそう。俺たちやあなたについていくんだ」

「……俺をおだてても給料は増えんぞー」

「それはもういいです。囲まれる前にとっと逃げてください」

「いや、首をひとつもはらひ」

「どの首です」

「あれだ」

スザン戦争・六（後書き）

二週間に一度の更新が定着してきた感じ……。いやいや、ガンバレ、私。

スザン戦争もひと山越えた感じですよ。引き続きよろしくお願いいたします。安芸でした。

スザン戦争・七(前書き)

旅行で留守にしていたため、少々更新が遅れてしまいました。
ごめんなさい。

スザン戦争・七

アレンジ―は顎をしゃくった。
前の戦で見た顔を、見出したのだ。

「やられっぱなしは性にあわん。せめて一矢報いてやる」
「援護します。お気をつけて」
「おう」

片手に手綱を巻きつけて愛馬を浅く棹立たせ、雨で滑る剣の柄をしつかと握り、切っ先は下げ、軽く勢いをつけてアレンジ―は重心低く突進していった。
標的はただひとり。

「カズス・クライシス！ お相手願おうか！」

振り向きざまに、半円を描くように大剣を起こしたカズス・クライシスはアレンジ―・ルドルの姿を認めると、喜々とした表情を浮かべた。

「望むところです」

二人の男の剣は苛烈に斬り結んだ。
鋼が音高く鳴って、弾かれる。そのまま両者僅かに姿勢を変えて、腕の角度を微調整しつつ、二度打ち下ろす。力の加減は拮抗し、どちらも一歩も退かず、鏝迫り合いとなった。

「これほど険しい断崖越えとはやってくれたじゃないか、“潰乱の

疾風”よ」

「俺は軍師の命に従っただけです。責めるも褒めるも相手は俺じゃないですよ」

「そうそう、その軍師が問題だな。手を変え、品を変え、色々好き放題にひっかきまわしてくれたものだ。名はなんと云う？」

「直接お訊きになってください。俺はあなたを連れ帰る命を受けているんです」

「はっはー！俺を連れ帰るだと？その前に、俺がおまえを連れ帰ってくれるわ。首を落としてな」

二人は押し離れた。

どちらも渾身の力技で痛撃を加える。

剣戟が十合、二十合、三十合と交わされる。その一撃一撃が重く、激しく、鋭い。

両者の位置はめまぐるしく入れ替わった。馬同士が鼻息を飛ばしあった。蹄が泥を散らした。体あたった。汗と雨がしとどに流れた。

「いい腕だ。若いのに苦労してんなア。だが、そろそろ馬の方が限界だろう。あんな無茶をやったのけたんだ、いつまでも持つわけがない。そらー！」

アレンジーは馬ごとぶつかっていった。

カズスはまともにくらうことは避けたが、完全には避け切れず、よろめいた。姿勢が崩れる。狙い澄ましたように繰り出された突きを本能的に紙一重の差でかわして、反撃の横払いをしながら、姿勢を立て直す。

そして唐突に、馬首を翻した。

「俺は逃げます」

と、カズスは堂々と宣言して、たちまちのうちに逃亡劇を開始した。

アレンジ―は置いていけぼりをくった。

その間があまりにも絶妙だったもので、「は？」と眼が点になるほどだった。

熾烈を極めた戦いの真つ最中で勝負もついていないのに、それとばかりに走り去られては追いかけぬわけにはいかなかった。

「逃がすな！」

咄嗟にアレンジ―は叫び、あとを追った。

冷静さを欠いた行動ではあったが、みるみるまに距離がひらくので、深く考える間もなく、本気の追走に出た。

アレンジ―率いる騎兵隊も慌てて將軍に続いた。

あちこちで戦闘が中断され、なにが起こっているのか理解もできぬまま、スザン兵の多くが引き潮の如く反転した。

イシュリー軍は深追いせず、ただちに負傷者の收容にかかった。

雨が、ようやくその勢いを弛めつつあった。

スザン戦争・七（後書き）

戦場を書くのは面白くて、辛いです。

う……自分の筆力の層の薄さが呪わしい。もっと面白く痛快にできるはずなのに……！（にしても、主人公、どこでなにしてるんだ??）

精進、精進、精進。

はい、頑張ります。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・八（前書き）

若干短めですが、ご容赦を。

次話、更なる場の展開のため、キリがいいのでこの辺で。

スザン戦争・八

エズガシアの地で血戦を展開するイシユリー本軍とは別に、イシユリー軍遊撃隊第二副隊長リビラ・イドウライコスは、スザン軍の八箇所の糧道の中でも重要拠点である二箇所を同時に襲撃した。

カーチス・ゴート配下の遊撃隊千百名のうち、千名が二手に分かれて遂行にあたったこの作戦は、リビラにとって初の試みであるだけでなく、隊長も第一副隊長も不在、実質の作戦指揮を任されるといふ大任をも負っていた。

だが、リビラは持ち前の豪胆さでこの重圧を撥ね退けた。

「もし失敗したら、そりゃ軍師の作戦が悪いに違いない。責任をなすりつけてしまえばどうってことないサ」

と、勝手に心を決めて、早速行動に移った。

リビラは軍師命令により、キルヴァ直轄領の百名の領民を引き連れていたが、そのうちの器量のいい若い娘を選抜して、アレンジャー・ルドル將軍とゲオルグ・ニーゼン將軍の名を騙ってスザン軍に大量の酒を差し入れた。

遊撃隊突撃兵のリッコ・ダスターデイは首を捻って言った。

「けど、そんな見知らぬ娘が運んだ怪しい酒をかつくりますかねえ？」

「だから、差し入れる前に、両將軍の署名入りで一筆したための書状を届けたのサ」

セグラン次軍師の指示は細やかだった。

あらかじめ、どこからアレンジー・ルドル將軍とゲオルグ・ニーゼン將軍の筆跡がわかる書類を参考に、署名を偽造し、スザン軍で使用される皮紙とインクを用いて書状を作成した。

いかにも本物であるかのようなそれは速やかに糧道を管理・警護する部隊隊長のもとへまっすぐに届けられ、陽が落ちようかというときに、人足百名による、台車で十台分、五十樽もの酒が運びいれられた。

とびきりの美人が何名かまとまって前に進み出て、丁寧に辞儀をする。

「アレンジー・ルドル將軍並びにゲオルグ・ニーゼン將軍よりの心ばかりのお届けものでございます」

「おお、知らせは受けている。せっかくのご厚意だ。ありがたく頂戴しよう」

酒には当然遅行性の眠り薬が混入されていたのだが、スザン兵の誰ひとりとして気づいた者はいなかった。

その夜は、見張りの兵を除いて慰安の宴が催された。

両將軍がここぞとばかりに称えられ、こつそりと見張りの兵にも振る舞い酒が届けられ、この夜は賑やか平穩に過ぎた。

翌朝、まだ闇が明けきらない頃に、すっかり寝静まった基地に侵入したりピラ率いる遊撃隊は次々と食糧庫を解放し、百名の領民に持てるだけ持たせてやった。

持ち運んだ分量だけ給金がもらえるし、加えて自分の運んだものは家に持って帰れるのである。

無論それを軍で買い取ってもらえるので、他国の潜入及び略奪行為加担にまつわる危険性はあっても、領民にとっては非常に割り

のいい仕事であった。

そして速やかに撤退した。

こうして一滴の血も流さずして、スザン軍の糧食の大方はイシュリー軍のものとなった。

スザン戦争・八（後書き）

まったくのひとりごとではありませんが。

私の敬愛するれいちえる様の物語、”羽”がアルファポリス様SF部門webコンテンツup！に取り上げられることになったそうです。

おめでとございます。

掲載は三日後だそうなので、場を改めてお祝いを申し上げたいとは思いますが、フライング告知ということでこの場をちょっと拝借しました。

まだ未読の方はこの機にどうぞ足を運んでみてください。とても壮大かつ素敵な物語です。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・九（前書き）

遅々として、でも進んでいます。

スザン戦争・九

キルヴァ・ダルトワ・イシュリー王子がスザン軍に対して「全軍突撃！」の号令をかけ、夜明けとともにリビラ・イドウライコスが千名の仲間とせつせと食糧の搬出に勤しんでいる頃、極秘の特命を請け負ったカーチス・ゴートは遊撃隊第一副隊長アシュランス・ベントラと他百名と共に夜を徹して疾駆し、いまようやく、スザン国首都カルバルスキーへの到着を目前としていた。

一味は山道から続く裏街道を風と馬と一体となってひた走っていた。

道は整備されておらず、砂利と土が剥き出しのままでもならされてもない。アシュランスは幅の広い凸凹道をほとんど均衡を崩すことなく、カーチスと馬首を並べて走っていた。

「おまえは俺と同じ人種だと思っていた」

ここまで無言で走り通していたアシュランスが馬蹄音に消されることも辞さず、口を切った。

「なにが」と、訝しげにカーチス。

「戦場に生きて戦場に死せば本望じゃないかとな。だが違った」

アシュランスは前を向いたままぼそりと呟いた。

「難攻不落のミシカに求婚したというのは、本当か」

「ああ、それか。まあな……まったく不思議でならん。この俺が、

まさか女の膝が恋しくなるとはな。それも、他の男を愛している女に惚れるなんて我ながら正気の沙汰とも思えん」

「……なんだって？　じゃ、おまえの出る幕なんてないだろう」

「だが、ミシカの惚れた相手が悪い。あの男ではミシカはシアワセになどなれん。俺の方がマシさ。傍にいてやれるし、少なくとも、俺だつたら抱いてやれる」

アシユランスは、ノロケはよせ、というしぐさをして、唇の端を僅かに釣り上げた。

「……女に骨を抜かれるようではカーチス・ゴートの名が泣くな。

いいぜ、この一戦が片づいたら遊撃隊は俺に任せておまえは配置換えでもなんでも希望して近衛にでもなつちまえ」

「……いいのか？」

「仕方ねえさ」

「おまえは？」

「俺？」

アシユランスは相好を崩して笑みを浮かべた。

「俺はこれでいい。戦いの場があれば俺はどこでも生きていけるんでね」

それから四十ナハトも駆けた頃、首都カルバルスキーが見えてきた。だが近づくにつれ、どうも様子がおかしい。ただならぬ喧騒に包まれている。カーチスの指示で皆馬を下りた。

街道から逸れ、目立たぬよう山林の中を進んでいった。

いまにもひと雨やつてきそうな気配の中、ふとなにかの気配を感じてカーチスは足を止め、上を見やった。直後、なんの前触れもな

く鳥の糞の如く突然に、ぐるぐると四肢を擦じられた変死体がぼとぼと空から降って来た。

戦場では百戦錬磨のつわものどもだったが、これは予期せぬ遭遇だった。

皆奇声と悲鳴を上げて飛び退いた。中にはあまりの凄惨さに吐いて具合が悪くなったものも出た。それからほとんどすぐに、都からの決死の逃亡者の群れがわっと押し寄せたが、一味などまるで目にも入らぬ様子で脇目も振らずにいつてしまった。あとには押し合いへしあいの爪痕がくつきりとぬかるんだ泥道に残っている。

「いったいどうなってんだ……？」

「見るよ、あれを」

硬く強張ったアシュランスの声がカーチスの注意をひいて振り向くと、首都の上空に舞う翼をいくつも捉えた。

「ソレイア・シャヤサ
風の天人」

アシュランスが遠見の筒を用意し、これを覗き、しばらく検分したあとで言った。

「なぜか王宮が見あたらない。いま奴らがたかっているのが後宮だ。続々と集まってくるぞ……凄惨な数の天人だ。どうする？」

「近くまで行く」

カーチスは不吉な予感を覚えた。このときはそれがなにを暗示しているものかまではわからなかった。

「風の天人がどれだけいようがいまいが関係ない。俺たちの目的はただひとつ。ドロモス・ヨードル・スザン王の首だ」

首都カルバルスキーは殲滅していた。

風の天人の猛威の前に成すすべなく陥落、建造物という建造物は孔だらけ、舗装道路は寸断、橋は落ち、樹木は根こそぎ倒れていた。あちこちに犠牲者が溢れ、逃げ遅れた群衆が、阿鼻叫喚の絵図を描いている。

ただ唯一、後宮のみが無事であった。

遠目にも壮麗にして優美、青と白のモザイク模様が印象的である。カーチスとアシュランスは首都の門前に続く街道脇の木陰にて、様子を窺いながら、額を集めた。

「どう思う」

「王がいるかという意味なら、いるだろうな」

「風の天人を盾にしてか」

「そんなところだろう」

「しかし、それならばなぜスザンの天人兵は反撃しないんだ？」

「想像してみるよ。決着をつけようってここ一番の戦を臣下に任せて自分は後宮の奥に引きこもるような男だぜ？ 一番強い天人兵も当然傍に侍らせているさ」

「じゃああなたにか？ スザン王が引きこもっている間、俺たちやこのまま待機ってわけか？」

「そこまで暇じゃない」

言っつて、カーチスは小袋から黒い粉を手に振って、飲料用の水を数滴落とした。これを擦り合わせたものを、顔に塗る。唐突な奇行に、アシュランスは、

「それなに」

「秘密兵器。おまえもやれ」

カーチスはアシュランスの掌にも同じように粉を振った。経験上、逆らっても無駄なので、アシュランスは言われた通りにした。他の仲間は事態を静観している。カーチスが言葉より行動を重視するのはいつものことなのだ。

「王子から頂いた魔法の粉だ。なんでも、天人避けに使われる薬だそうだ」

「それで、こんなもので顔を黒くして、どうするんだ」

「一曲歌う」

「殴っていいか」

「うるせえ。四の五言わず、歌え。俺たちの中じゃあおまえの歌が一番ましだろう」

「本気か」

「さっさと来い。てめえらは、ここで待ってる」

カーチスはアシュランスを引き連れて木陰から首都の門前に向かって大股に、ゆっくりと歩きだした。表門は影も形も見るともなく、崩落している。

アシュランスはやけくそ気味にぶつくさ唱えた。

「死んだら祟ってやる」

「死んだら祟られてやる」

平然と嘯くカーチスを罵って、アシュランスは“飲めや歌え、この命があるいまは”を声高に陽気に歌いはじめた。その声は豊かでひろがりがあり、正しい韻を踏んで空に吸い込まれていく。

次第に、風の天人が上空に集って来た。

スザン戦争・九（後書き）

カーチスとアシユランスでした。

彼らの本気で間の抜けた会話は書くのが好きです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・十（前書き）

とうとう師走になりました。

スザン戦争もいよいよ大詰め

まで、もう少しかかります。

スザン戦争・十

カーチスとアシュランスは歩みを止めず、とうとう首都カルバルスキーの門を潜り抜けた。

そこへ上空から力強い羽ばたき音が響いて、息を呑む二人の前に、十翼天人が姿を現した。金髪蒼眼、短髪で長身瘦躯。姿は若い男性型。感情の起伏を欠いたまなざしと冷めた美貌。

白い衣装を纏い、翼を全開にせず、やや小さく折りたたんでいる。

「どこへ行く」

「後宮へ」

「何用だ」

「スザン王の首を頂戴しに」

カーチスは嘘を吐くつもりはなかった。

他ならぬ王子に、天人には偽りなき真実をできるだけ貫き通せとありがたい助言をもらっていた。

十翼天人は不愉快そうに二人の顔を指して言った。

「その黒い染料は、どうして手に入れた」

「我が主君より頂いた」

「……翡翠の瞳の王子か」

「……主をご存じで？」

溜め息。十翼天人の研ぎ澄まされた気配が解かれ、仏頂面が覗く。

「またジアだな。あいつめ、まったく色々と拵えたものだ。俺の血を好き勝手にしやがって、みる、おかげで関係ない輩にまでいいよ

うに使われる始末だ。どうしてくれる」

カーチスは、キルヴァ王子の人脈の広さに敬服、と言うよりは気味悪さを覚えながら、額を指で搔いた。

「俺たちはあなたがたに非礼を働くつもりはない。ちよいと後宮にお邪魔して、王の首を狩ったらずくに引き上げる。長居はしないんで、見逃してくれないか」

「条件がある」

「条件を呑む」

アシユランスは強烈な肘鉄をカーチスに見舞った。カーチスは呻いて悶絶し、アシユランスは無視して訊ねた。

「その条件とはなんだ」

「……っ痛つてえ。てめえ、それが上司に対する態度か、ええ」

「ばかには付き合っていらねん。内容も聞かないうちになんでもかんでも安請け合いでするな」

「はじめからこつちに選択権はねえから、いいんだよ。で、なに。

俺たちはなにすりゃいいんだ、十翼天人様よ」

「中に我らの仲間が囚われている。そのうちのひとりが、まだ二翼の子供だ」

「ち、子供を盾か。えげつねえな。よし、助けてやる」

アシユランスは呆れてものも言えなかった。だが豪胆不敵なカーチスらしい。

十翼天人は無表情のまま頷いた。

翼をひろげ、大きく羽ばたく。

「では俺もおまえたちに一切の手出しをさせない。もし、首尾よく

事を成し遂げた暁にはしかるべき礼も考えておこう」

「ありがたい」

風の天人が一時引き上げたのを見届けて、カーチスはすぐに仲間に合図をした。

「馬も連れて来い、さっさとしやがれ」

怒鳴ると、百名の男たちが一斉に馳せ参じた。天人を気にしたふうではあるが、精鋭揃いの兵だ。胆の据わった男たちは、カーチスの命令を待っている。

「旗用意！」

カーチスはひらりと鞍上の者となり、棒に丸めて括っていたスザンの国旗をひろげた。手に持ち、天に振り翳す。

「目指すは、スザン王の首級ただひとつ。無駄死には許さん」

「火矢用意！」

アシユランスが同じくスザンの旗を掲げながら叫ぶ。

先鋒を務める弓矢部隊が火打石を打つ。蜜蝋に点す。火矢に点火する。

「ようし、突入！」

剣を鞘から抜き放ち、カーチスは自ら先陣を切って手綱を振るった。

そのまま、まっしぐらに後宮、即ちスザン王以外男子禁制の宮へと馬もろとも乗り込んでいく。

スザン戦争・十（後書き）

お久しぶりでございます。

風の天人、久方ぶりの登場。名前はまた後日に明らかになります。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・十一（前書き）

戦場より、メリー・クリスマス！

この長き物語にお付き合いいただいている皆様へ

スザン戦争・十一

「伝令！ 伝令！ アレンジー・ルドル將軍、勝利！ ゲオルグ・ニ―ゼン將軍勝利！ ビヨルセン・メオネス將軍ただいま交戦中！ 申し上げます、伝令！ 伝令！」

カーチスは声高に叫びながら正面突破を果たした。同時に火矢を放つ。目指すは最奥。

アシユランスなどは敵の旗を掲げ、敵の味方のふりをすることにやや抵抗があつたようだが、カーチスはどこ吹く風だった。この程度の騙りは序の口もいいところである。

「伝令！ 伝令！ アレンジー・ルドル將軍、勝利！ ゲオルグ・ニ―ゼン將軍勝利！ ビヨルセン・メオネス將軍ただいま交戦中！ 申し上げます、伝令！ 伝令！」

後宮の守りは手薄だった。ほとんど兵士がない。灯りもない。かつては華やかに彩られていただろ宮は、いまは薄暗く、湿つていて、くたびれている。

渡り廊下を駆け抜けて、突きあたりを曲がると、ずらりと贅の尽くした扉が並んでいた。

カーチスは「捜せ」と兵を割り振った。自分は二十騎を連れて奥へと進む。

「つたく、なんで王族つて人種はスキモノなんだ」

「えー、羨ましい話じゃないっすかあ」

「ばかやろう。嫁さんはひとりかわいいのがいればそれで十分だろ
う」

「……待て。ミシカはかわいい、か？」

「やらんぞ」と、カーチス。

「いらん」と、アシユランス。

「えーっ。隊長、“難攻不落のミシカ”を落としたんすか!？」

「おうよ。スザンの王の首と引き換えに王子に祝儀をもらうつもりだ。ってわけで、ぬかるんじゃねえぞ」

火が回ってきた。煙が、徐々に這って来る。

前方に番兵四人を発見した。突如の乱入者に血相変えてあたふたしている。

「止まれ、止まれ！ なにごとだ」

「伝令！ 伝令！ アレンジー・ルドル將軍、勝利！ ゲオルグ・ニーゼン將軍勝利！ ビヨルセン・メオネス將軍ただいま交戦中！ 申し上げます、伝令！ 伝令！」

明らかに様相がおかしい事態なのに、掲げられた自国の旗と自国の將軍の名を告げられて戸惑いしながら、問答無用のうちに、一気に斬られた。

カーチスは弓矢兵を前面に構えさせ、最奥、最後の扉を自ら蹴り開けた。

ドロモス・ヨードル・スザン王は風の天人の鉄壁の守護の中にとばかり思っていた。それをどう攻略するかと頭を痛めていたのだが、まさかこんな事態に直面するとは、予想外だった。

相当数の天人が、苦しみ悶えつつ、床を七転八倒していた。

六枚羽から八枚羽まで、耳を押さえ、頭を抱えるように、ある者は口から泡を吹きながら失神し、ある者はひどく痙攣し、ある者は嘔吐、ある者はのたうっている。白い羽がごっそりと抜け落ちて、異様な光景だった。

カーチスは眼を走らせた。

いた。

スザン王は放心したように部屋の隅に縮こまっていて、胸に、なにかを抱えている。

カーチスはスザン軍の国旗を無造作に投げ捨てた。鞍上より飛び降りる。足もとに敷かれた天人の羽根が舞い上がる。その手で腰に佩いた剣の柄を握り、無駄のない動作で鞘より刃を抜き放つ。

ゆつくりと、歩を進める。すぐ後にアシユランスが控えて、警戒を怠らず、具合の悪そうな天人たちに眼を光らせている。

「ドロモス・ヨーデル・スザン王でいらっしやいますな」

齢六十を超えた王はげつそりと衰弱して見えた。どこにも一国の王たる覇気が感じられない。憔悴し、やつれ、眼は虚ろ、心ここにあらずといった顔でぶつぶつとひとりごとを呟いている。

だが、腰には王笏を差し、肩布も、指輪も、衣装も、王であることを示している。

「その首、我が主、キルヴァ・ダルトワ・イシュリー殿下の名の下にもらい受ける。覚悟召されよ」

カーチスの剣が一閃する。スザン王の首がごと、と落ち、鮮血が真上に噴いた。

その瞬間、魔法の心得のある者ならば楔が解けたことに気がついただろう。それは風の天人と国王との間に取り交わされた契約の終了を意味していたが、そのことを理解する者はこの場にいなかった。

カーチスはマントで顔を覆い、血飛沫を避けると同時に、片腕を伸ばして王の首を受け止めた。床に転げなかつたのは、ささやかな情けを払ったゆえだ。

「貸せ」

アシユランスが用意していた蓋つきの籠に納める。

カーチスは部下たちを散会させた。

「どこかに風の天人の子供がいるはずだ。捜せ」

「待てよ。それが、そうじゃないのか」

アシユランスの手がスザン王の亡骸を指す。腕の中にあるものは、円い卵に不恰好な羽が三枚生えていて、殻も羽根も灰色にくすんでいる。

カーチスとアシユランスは並んでその物体を眺めた。

「……二翼の子供、って言っていたら？」

「だが見たところ、二翼も子供もない」

「そういや、天人の子供って、どんなだ」

「俺が知るものか」

「そういや、天人って、卵から生まれるのか」

「俺が知るものか」

「訊いてみるか？」

「阿呆。奴らが本調子にならないうちに逃げるぞ。それ、さっさと搔っ攫え」

「どつちが上司だよ」

カーチスは恐る恐る卵に手を伸ばし、それを抱えた。三枚羽のうち一枚が、ぴくりと動いた。続く絶叫。危うく落とす寸前で、カーチスは慌てて角度を変え、抱き直す。

床に這う天人の苦しみようは尋常ではない。おそらく、ひとには害のない、天人特有の周波のようなものがあるのだろう。

カーチスは自分の馬の手綱を取って、小脇に卵を挟んだまま器用に跨りながら、馬首を返して言った。

「あー、悪いな。俺、なにも出来ねえんだわ。けど忠告だけさせてもらうと、ここはやがて火の海になる。あんたたちも早いところ、逃げた方がいいぜ」

カーチスの合図で、撤収した。

スザン戦争・十一（後書き）

スザン王、最期です。

年内最後の更新です。

皆様、つつがなくよいお年をお迎えください！

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・十二(前書き)

2011年もよろしくお願いいたします。

スザン戦争・十二

後宮は燃え落ちた。

火の回りは思った以上に早く、脱出がもう少し遅ければ炎と煙に巻かれて身動きがとれず、最悪の事態になっていただろう。

だが実際のところ、カーチス軍は拍子抜けするほど首尾よくスザン王の首を奪った。味方に犠牲者はなく、呆気ない、暴れたりない、物足りない、という意見も飛び交う中、カーチスの遊撃隊は首都の門前まで戻った。

静まり返る墓地の如く瓦解した首都は陰惨で、気が滅入った。早いところ、帰途につきたい。

「各自馬に水と餌をやれ。帰り支度だ、急げ。ちよいと休んだらすぐに出発だ」

カーチスは姿の見えないアシユランスを呼ばわった。

「ここだ。王の首は俺が防腐処置をしとく。おまえはさっさとそっちの用を済ませろ」

「ああ。じゃ、頼む」

「任せろ」

アシユランスはカーチスにとつと行け、というしぐさをして作業に戻った。

カーチスはひとりその場を離れた。

しっかりと三翼の卵を抱きかかえ、徒歩で上空を見上げながら、十翼天人の姿を捜す。

「おおい、十翼天人様よお。待たせたなあ、どこにいるんだあー。降りて来て」

ばさつ、と後方で羽ばたき音がして、踝の辺りに風が渦巻いた。肩越しに振り返る。

そこにいたのは十翼天人ではなく、六翼を大きく開いた、長い金髪にひと編みだけ細い三つ編みを揺らした、華奢な肢体の女性型天人だった。

怨嗟と憤りに血走った蒼瞳と眼がぶつかる。

まずい、とカーチスは思った。

天人の、怒りに折れた指、卵を奪おうと突き出される腕、そしてかまいたちの如き風。

瞬間、カーチスは両腕と胸を残して、細切れにされた。

六翼の風の天人はカーチスの鮮血が飛び散った三翼の卵を夢中で奪い返した。それから身体の向きを変えた。腕を乱暴に振り上げる。支配する風を手中に溜める。近くにいる人間共を一掃せん、としたその矢先　眼にも止まらぬ勢いで十翼天人が割り入った。

「やめろ」

鋭い恫喝に六翼天人がびくりと震え、手の中の風が散じる。

十翼天人は厳しいまなざしで変わり果てたカーチスの亡骸を一瞥し、六翼天人の腕におさまる三翼の卵を眺めて、苦痛の表情を浮かべた。

「貴様、なんてことを」

アシユランスが異変に気がついたのはこのときだった。

突如、天空から斬り込むように十翼天人が降下してきて、地上す

れすれの低位置で停止し、翼をひろげた状態で、こちらに背を向けたまま声を荒げている。

ふと漂ってきた、微かな血の臭い。

アシュランスは王の首の加工を中断し、悪い予感に苛まれて起立した。

「カーチス？」

そちらに行く。

十翼天人の翼が邪魔で、カーチスの姿が見えない。

慇懃無礼に礼をして傍までいったものの、カーチスは見当たらず、代わりに六翼の天人が増えていて、アシュランスは訝った。

「あれ？　つかしいな、カーチス　あー、俺たちの隊長には会って……なくはないな。それ俺たちが奪還した卵だもんな。あいつ、どこでなにやって　」

アシュランスは苛々しながら辺りを見回した。

ある一点に、眼が止まる。

どくん、と心臓が跳ねた。

スザン戦争・十二（後書き）

なんて殺伐とした新年早々の更新か……。

今年もぼちぼちとやってまいりますので、おつきあいいただければさいわいです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・十三(前書き)

合掌。

スザン戦争・十三

近づく。

はじめ、それがカーチスだとはわからなかった。

ほんの眼と鼻の先に、ばらばらになった肉塊が血の池に転がっている。原型をとどめているのは両腕と胸だけ。むっとするような血臭。地面は血を吸って黒ずんでいる。

「……カー……チ、ス？」

十翼天は視線を落とした。

「すまぬ」

アシユランスは、惨死体から眼を背けた。

あんなものは、カーチスじゃない。なにかの間違いだ、そうに決まっている。

「………いつたい、なんの悪ふざけだ？ あんたの言うつ然るべき礼とやらの、冗談か？ ちつとも笑えんね」

「すまぬ」

「謝るな。カーチスはどこだ」

「すまぬ」

「謝るなど言っている。カーチスはどこだ、どこにいる」

「すまぬ」

「黙れ。いいから、さっさとカーチスを出せ！」

十翼天は沈痛な面持ちで、腕を持ち上げ、すつとそれを指した。アシュランスは黙ってかぶりを振った。眼が、虚空をさまよいはじめた。

「……誤解が、生じた。おまえらも、我らの子供をかどわかした者らの一味とみなされて、攻撃の対象となった。こちらの失態だ。許しは、請わぬ。命の購いは命でしか購えぬこと、俺はよく知っている」

言つて、十翼天人は大地に足を下ろした。長い息をついて、ゆつくりと跪く。白い衣の裾が土を掃く。

「俺の名はアノン。恩義を仇で返した咎を受け、この身が滅ぶまでその死に報いよう」

宣誓は、しかしアシュランスを素通りした。

アシュランスは卵を大事そうに抱えたかたちのままの、カーチスの腕に触れた。

まだ、温かい。

絶叫。絶叫。絶叫。

アシュランスは悲憤の咆哮を放ち、拳を地に叩きつけて蹲った。カーチス・ゴートの最期だった。

大地を掻いて泥を散らし、まさに人馬一体となって現れたのは力ズス・クライシスだった。

そしてそのあと、まずアレンジー・ルドルが、次に麾下の兵達が

縦に長く伸びて物々しい馬蹄音と共に到着した。

ゲオルグ・ニーゼンは友の無事な顔を認めて気が緩んだのも一瞬で、状況の不可解さに首を捻った。　どうやら、カズス・クライシスが牽引役となり、アレンジーをここまで誘導したようだが、わざわざ敵の主力を集結させるような真似の意図がわからない。

駆けこんで来たアレンジーと眼が合った途端、表情に明るいものがよぎり、瞬く間に曇った。首をまわし、左右周辺へざっと視線を奔らせ現在の戦場の有様を把握したようだ。

カズス・クライシスを追うのを止め、馬首を翻してこちらへやってくる。

雨はやんでいた。

雲間から太陽が顔を出し、光が射す。

それは反撃ののろしのように思えた。

これで天人部隊が投入できる、そうすればまた戦況が変わる。と、勇み足になるところを、ゲオルグ・ニーゼンは自重した。

そんなことはイシュリー軍こそわかってはいるはず。前回の小競り合いでまさしくその策を用いて一矢報いたのだ。天人兵については警戒しているはず。

「よう、ゲオルグ。無事かー」

「気をつける、なにかおかしいぞ」

「だな。俺とおまえを分断させて叩く方が効率いいだろうに、わざわざひと括りにする腹がわからねえ。ところでビヨルセンの親父はどうした。見当たらねえぞ」

「ビヨルセン將軍は行方搜索中だ。おまえの隊の残存はこれだけか」「いや、逃げると指示した。ここにいる奴らは俺の命に従わなかった野郎どもだ」

「そりゃ懲罰ものだな。せいぜい、こき使ってやるか」

突然、雑音が途絶えた。

スザン戦争・十三（後書き）

二月になりました。月日の経つのは早いですね。

カーチス・ゴートの最期です。

あと少し、スザン編続きます。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・十四（前書き）

軍師登場です

スザン戦争・十四

困い込みをかけるイシユリー軍の覇気に揺らぎが生じたわけではないようだが、眼には見えない緊張度が高まっている。

「……なんだ？」

アレンジーが抜き身の剣を下げたまま、油断なく全体に眼を配る。ゲオルグはほとんど真正面から、ただ一騎、進み出てくるのを認めた。

静寂を従えて、逸る馬を宥めるように、ゆるゆると歩を進めてくる。

甲冑姿のため、はじめ人相がわからなかった。だが距離を詰めて、詰めて、声が届くくらいの近さで見合ったところで、兜を脱ぎ、脇に抱えた。

見知らぬ顔だった。まだ若い。

端正で冷静な面。特に眼が感情を排して冷徹ながらも、知性のあ
る輝きが注意を惹いた。

「はじめてお目にかかります。私はキルヴァ・ダルトワ・イシユリー殿下が配下、次軍師セグラン・リージュと申します。このたびの戦では参謀位についております」

アレンジー・ルドルとゲオルグ・ニーゼンは視線を重ねた。

どちらも表情に見せなかつたが、驚きいつていた。

ではこれほどスザン軍を翻弄し、圧倒的策の攻防でイシユリー軍を優位に導いたのは、いまだ青臭さが残る青年軍師なのだ。

そして次に続く言葉に、自分の耳を疑った。

「いまから、私はあなたがたを呪います」

突拍子もない台詞に、ゲオルグは思考がついていかなかった。アレンジーもきよんとしている。

「……はあ？　なんだって？」

「天は私に味方し、呪いはあなたがたに振りかかり、戦列は千々に乱れるでしょう。投降するならばいまです」

「あいにく、呪いだの祟りだのには縁がない。そんなもんに誑かされるほど阿呆じゃないぜ」

「では、食らうがいい　我が王の地を蹂躪し侵略の旗を掲げる者どもに天罰あれ！」

声高に叫び、セグランは脇に抱えていた兜を空高く放り投げた。

反射的に前列にいたスザン兵のほとんどが兜を眼で追った。

そして見た。

恐ろしき、禍の兆候を。

「ギャザリングか！」

ゲオルグはぎよつとして喚いた。即座にマントを手繰り寄せ、頭から被る。

これを見聞きした兵らは、えつという顔で天を仰いだ。

直後大絶叫があちこちで上がり、それを目の当たりにした者らが次々に落馬した。危機に直面した混乱は更なる混乱を呼び、あつという間にスザン軍は瓦解した。

ギャザリング　日食は昼に太陽が隠れることから不吉の象徴とされ、スザン国では大変忌み嫌われた。

太陽が隠れている間は我が身を隠さないといけないとされ、もしそれが間に合わなかった場合は、たちまち凶悪な運に見舞われ、死を招くとされる。

もつと悲惨なことに、目の当たりにしたという事実が露見した暁には極刑の処罰の対象とされ、誰もが密告されることを非常に恐れた。

そして、あたかもこの天変を招いたのは敵方の参謀の仕業のようだった。

まさに測ったような間合いのこの出来事が、兵らの凶荒を余分に煽る結果となった。

イシュリー軍が見張る中、右往左往、這いつくばるスザン軍は哀れなほどだった。

「君の読み通りだな」

セグランの隣にキルヴァが馬を進めて横に立つ。傍にはアズガルがついている。頭上ではカドウサが小さな円を描いて低く旋回し、警戒にあたっている。

「ちょうど晴れたので助かりました。天候だけが成否をわけるとしたので」

「それにしても、日食が起こるとよく把握していたな」

「リューゲル・ダツファリーは天には無限の情報が含まれていると言いました。それを記録し、分析し、調査することは後に大きな意味を持つと教えられたのです。師の教訓を生かすとは、このことですね」

「彼を見る眼を変えなければいけないかな」

「いいえ。学ぶ面も多々あるとはいえ、王子に相応しくない人間であることに違いありません」

セグランは正面を見据えたままかぶりを振って、少し黙った。感情のない眼だ。

「まもなくこの奇怪な現象も終わります。さあ、そろそろ頃合いです。王子、用意はよろしいですか」

「いつでも。アズガル、これへ」

アズガルは丁重に抱えていたものをキルヴァに引き渡して、セグランと共に少し下がった。

キルヴァはギャザリングが終了し、太陽が元の姿に戻るのを待って、スザン軍と対峙した。

ゲオルグは痛感の面持ちでキルヴァと再会を果たし、アレンジィは戦意喪失著しい兵の様子を眺めて、珍しく肩を落としていた。

「これ以上の戦いは無意味である」

抑揚のない声で告げて、キルヴァは手元のものの布を丁寧にほどいた。

ゲオルグの眼が険しく吊りあがる。

気配を察して振り返ったアレンジィの眼もかっと剥かれる。

キルヴァの手にあったものは、ドロモス・ヨードル・スザン王の首だった。

嘆きの声上がり、啜り泣き、涙をすすする音、号泣、罵倒、悲哀に満ちた空気がたちまち充満していく。

戦いが一気に終息に向かうかと思われたそのとき、一本の矢が飛来した。

それはカドウサの右翼を射抜いた。一声鋭く鳴き、落下するギィ大鷹の姿に場がどよめく。

神聖なる鳥を傷めつけることは国際法で禁じられている。

例外なく敵罰が与えられるというのに、それをも恐れぬ所業。

「カドウサ！」

キルヴァの痛みのもつた語尾の掠れた叫びに、セグランも、アズガルも、近くにいた兵の全員が脇目もふらずギイ大鷹を救いに身を転じた。

僅かな一瞬、キルヴァはひとりになった。

その隙を狙って、側面から突撃があった。

その数、およそ五千。

山林に潜んでいたのはゲオルグ・ニーゼンの副将であるアボルト・ブロナンディス率いる第五小队だった。

キルヴァは囚われの身となる。

スザン戦争・十四（後書き）

お久しぶりでございます。

お待たせいたしました。

そろそろストックが尽きてきた、書かなきゃ……！

スザン編、クライマックスへと続いていきます。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

スザン戦争・十五（前書き）

久方ぶりの更新です

スザン戦争・十五

手段の是非はともかく、鮮やかな奇襲だった。

アボルト・ブロナンデイスは、ゲオルグ・ニーゼンに五千の兵を任されたあと、すぐさま山林に潜った。そこでじつと機を待つことにした。

軍人としてはスザンでも一、二を争うゲオルグが懸念していたことは、一重にキルヴァ・ダルトワ・イシュリー王子の存在だ。

はじめは、キルヴァ王子の命を狙っていた。

だが、刻々と戦況は厳しさを増し、敗色の色が濃厚になってきたところで、目的を差し替えた。

このままでは、たとえ首を落としたところで反撃に遭い、そのうち殲滅されることは眼に見えている。

では、ここは一時撤退し、態勢を立て直し、軍を再編するのが最善策ではないかと判断した。

それには、盾がいる。交渉に値する盾が。

こちらの条件を吞まずにはいられない、イシュリー軍の要 金
髪碧眼の若き王子。

さいわいにして、預けられたダリエロ・アイアンの小隊には、弓兵隊に所属していないのが不思議なくらいの弓の名手がひとりいた。自前のクロス・ボウを所持しており、通常の長弓よりほぼ二倍の飛距離を稼いだ。解き放たれた矢は、見事に的中した。

アボルトは勢いよく藪から飛び出し、キルヴァ王子めがけて突進した。

間近に見る王子は健やかで、若いながらも威厳を備えていた。

風の噂に聞いたところでは、ウージン・マルスカーヤ・ライヒェン国王を相手に一步も譲らず、ライヒェン国との和議をただひとり

で結び、軍師パドウィー・グシカールの策を鼻にもかけず、末姫君を妻に迎える約束まで取り付けたという。

せめて、亡きタルダム王子にキルヴァ王子の才覚の半分、いや、四分の一でもあれば、スザンの未来はいまとはまったく別のものであったろうに。

と、アボルトは胸の内を嘆いた。

王も王子も喪われ、次なる王位継承者は誰より早く火の粉を避けてプラスカヤ国へ亡命中の王弟ゼンダ。王位にも国政にも興味はなく、自称詩人を気取って思索に耽りつつ、飽食暖衣の日々を送っているらしい。

そんな腰抜け男を王として迎えなければならないのか。

いや だめだ。

それではスザンは立ち直れない。疲弊し、国力が限界まで落ちているいま、必要なのは正しい力で民を導く強い指導力を持った人間だ。

革命。

アボルトの心臓が熱く脈打った。

王制を廃し、民意により選ばれた君主が国を統治する。

夢のようなひらめきだったが、容易ではないことは歴然としていた。少なくとも、現時点ではない。他国の侵略の脅威にさらされている現状では、制度改革を訴えたところで耳を貸す者はいないだろう。

まずは、態勢を立て直すことが肝心だ。

そしてそれができるのは、スザンが誇る三人の英雄の中でも攻守どちらも均衡を図れるゲオルグ・ニーゼンが相応しい。

ギイ大鷹を射落とすという奇をてらった策は功を奏した。

キルヴァ王子をアボルトが包囲したことに、啞然とした様子のがゲオルグとアレンジーの二将軍だったが、怒鳴ったのはアレンジーが先だった。

「王子を斬れ！」

スザン戦争・十五（後書き）

災害に見舞われたすべての方々へ、お悔やみ・お見舞い申し上げます。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・十六（前書き）

一ヶ月ぶりです。

スザン戦争・十六

「いやです」

「王は討たれた！ 仇だぞ！」

「そうです、王は討たれました！ なればこそ、いま我が軍を統べるのはお二方をおいて他にはありません。私にはお二方をお守りする義務があります。あなたがたはスザンになくはならぬ方 いえ、私にとつての大事、他に代えられぬのです。なにがなんでも、どんな手を使つても、この場より撤退していただく。私がお守りします」

天の鳥を傷つけた罪で処断は免れない。

もとより命を捨てた戦法であつた。

アボルトの並々ならぬ決意を前にアレンジーは押し黙り、ゲオルグは苦痛の表情を浮かべて歯を食いしばっている。

そこへ、

「っはははははは」

キルヴァ王子が肩を揺すって笑つた。

「あっはははははは」

アボルトはむっとした。

「なにがおかしいのです」

キルヴァ王子が笑いをおさめて、アボルトを正視した。翡翠の瞳

は息を呑むくらい澄んでいる。

「そなたの名は」

「申し遅れました。ゲオルグ・ニーゼン將軍の補佐を務めますアボルト・ブロナンディスと申します」

「私はそなたの覚悟を笑ったわけではない。誤解を招いたのならば、すまぬことをした」

アボルトはぎよつとした。敵国とはいえ、一国の王子が一介の臣下に詫びることなど考えられないことだ。あたふたして、頭を下げる。

「私こそ無礼な口をききました。お許してください」

キルヴァ王子は鷹揚に微笑み、「顔を上げてくれ」と言った。

「私が笑ったのは、そなたがあまりにもあけすけで、実直だったからだよ。そなたはせっかく私を人質にしながらも、自らの口で、私に危害を加えるつもりがないことを、声を大に表明したのだ。それがおかしくて、つい笑ってしまった」

緊迫した空気が霧散する気配。

キルヴァ王子の落ち着いた振る舞いに、包囲する五千の兵も戸惑いし、構えた剣も鈍く弱まるのがわかった。

アボルトは呑まれてはいけない、と自らを叱咤し、弛んだ気を引き締める。

「そんなことは一言も申し上げておりません」

「だが、私の身柄と引き換えにゲオルグ將軍とアレンジー將軍の命を乞うつもりなのだろう？ そのためには私が生きていることが前

提となる。まあ多少の怪我を負わせるくらいは交渉術のうちにもあるが、私の血が一滴でも流れた時点で、スザン軍は壊滅するよ」「どうということですよ」

余計な口を挟んだと、己の失態に気づいたときは遅かった。キルヴァ王子は僅かに顎を持ち上げて、視線を空へ向けた。ぎくりとした。

十二翼天と十翼天が対で頭上に浮いていた。アボルトは喘ぐように息を乱し、胸を上下させ、血の気の引いた顔でキルヴァ王子を見た。

誇張ではない。

十二翼の最強の天人とそれに次ぐ十翼の天人がいれば、この場を瞬時に平らげることくらいなんでもない。

天人兵の強さはいやというほど知っている。

スザンでは六翼の天人を兵士として練兵し、統制するのが精一杯で、それ以上の階級は見たこともなかったが、その破壊力は想像することすら恐ろしい。

すっかり動転したアボルトを前に、だが、キルヴァ王子は意外なことを言った。

「私のカドウサに矢を射かけた罪の代償は払ってもらうが、そなたの命を賭けた奇策に敬意を表しようかと思う」

キルヴァ王子は首を巡らせ、ゲオルグ・ニーゼンとアレンジー・ルドルの両名を捉えた。

「実は、私もゲオルグ將軍とアレンジー將軍が欲しいのだ」

スザン戦争・十六（後書き）

被災地の皆様へ。

一日も早い復興を、心より願っております。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・十七（前書き）

またもや、一ヶ月ぶりの更新です

スザン戦争・十七

「……は？」

「以前、ゲオルグ將軍に誘いをかけたときは断られたが」

「えっ」

「しかし、いまやドロモス王は亡くなられ、寄る辺なき身となった。私はお二方を我が陣中に迎えたい。とはいえ、勝負の決着もつかぬままでは返答もしくいかと思う。そこでそなたと一戦交え、私が勝利した暁には両將軍の身柄をもらい受ける。私が敗北したときはそなたの望みをなんなりと申すがいい。セグランにそのように取り図るよう命じておく」

アボルトは眼を見開いたまま、絶句した。

キルヴァはゲオルグとアレンジーに挑むような微笑をちらつかせた。

「いかがかな」

「気は確かか」と、アレンジー。

「そんなことイシュリー軍の幹部連中の誰も承知せんだろう」と、ゲオルグ。

「私は本気だ」

この会話は瞬く間に蔓延し、イシュリー軍も届いたようで爆発的な騒ぎが起こった。

だがキルヴァはどよめきを撥ね退けて、二人をじっと見据えていた。

「アポルトは手強いぞ」

と、ゲオルグが言った。

「なにせ、俺の自慢の部下だ。みくびられちゃあ、困る」

キルヴァはちょっと吐息して、

「私の方はたいした腕前ではない」

「おいおいおい」

「それでも闘わなくてはいけないときもあるだろう。ひとを請うときは、尚更だ。平時であるならば、幾度訪ねて頭を下げてもらいたい。だが戦場でまみえた以上、いたしかたない」

アポルトは腹をくくった声で、敢然とキルヴァに告げた。

「私が勝った暁には、追撃をせず全軍退却をお見逃しいただきたい。捕虜もお返しく下さい。そして次代の国王が戴冠されるまでスザンへの侵攻はなきものとお約束を」

「わかった」

「こらこらー。そんな安請け合いをしていいのかー」

「安請け合いではない。お二方にはそれだけの価値があるということだ」

ゲオルグ・ニーゼンとアレンジー・ルドルはどちらともなく視線を交わした。この若き敵国の王子の真意を測りかねていた。

アポルトはキルヴァの包囲を解かせた。ずっと下がるように指示し、一旦剣の切っ先を下げてキルヴァと距離を置く。両手でも片手でも使用できる両刃の長剣で、刺突型と切斬型の両方の特徴を備えている。

キルヴァもまた味方の陣に手出し無用の合図を送り、腰に佩いていた剣を抜いた。片手用のやや長めの剣で、柄にナックルガードがついている。反りがないまっすぐの刃、先端は両刃となっていて、軽めで刺突にも有用であり、馬上で斬りつけるのにも適している。

二人は周囲の喧騒を余所に位置についた。

兜のバイザーを引き下ろす。ひと呼吸。

「いざ、参る！」

スザン戦争・十七（後書き）

お久しぶりでございます。

すっかりご無沙汰しております。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・十八（前書き）

またまた一ヶ月ぶり更新です。

スザン戦争・十八

「いざ、参る！」

どちらともなく、戦いの火蓋は切って落とされた。

双方まっすぐに突撃し、音を立てて斬り結ぶ。弾く。白刃に残照がきらめき、興奮した馬の甲高い嘶きが風に乗る。馬首を返す。蹄が土を蹴る。交錯。また一閃。重い鋼が擦れる。土埃が舞う。手綱をうち、反転。今度は握りを変えて姿勢を低く、互いに刺突の攻撃に出た。

「はっ」

アボルトの渾身の突きをキルヴァは見事に受け、力の方向性を変えて流す。そのまま、肘を引き、斜め上から反撃に転じる。無駄のない、速い一撃。

だが、アボルトもこれを難なく交わし、押し離れた。

「おおおおお」

腹の底から唸り声を上げ、アボルトは攻勢に出た。勝負を長引かせるつもりはなかった。時間が経てば経つだけ、状況は不利になることは明白だった。いまは傍観している天人らも、痺れを切らせば、或いは王子に疲労が見えれば、容赦なく介入してくるだろう。

「はあ　っ」

キルヴァはしばらく防戦一方に徹した。

嵐のような斬撃をことごとく受けていった。

その様子は鮮やかで、躁馬術も武芸の力量も口で言うほど脆弱でないことを示していた。

ゲオルグ・ニーゼンとアレンジー・ルドルはこの隙に、と密かに残った兵を取りまとめ、撤収の構えを整えていたのだが、どうにもこの一戦から眼が離せなかった。事実上勝敗の決した戦時にありながら、一対一の対決、それも相手が敵軍の総大将と一兵士。

「……しかし、わからねえ御仁だな。王の首級が奪われた以上、こっちの負け戦が確定しているんだぜ？俺たちが欲しけりゃ、直接そう命令すりゃいいだろうに」

アレンジーがぶつぶつ言い、ゲオルグが首を振る。

「命じられて、唯々諾々と従う従順さが俺たちになればな」

「ただどよう、俺たちのために命懸けで戦つかあ？敗北したら首が飛ぶんだぜえ？いくらなんでも一国の跡取りが浅はかすぎるっつ。見る、取り巻き連中、顔面蒼白。上の天人様は殺気立ってやがるし、こりゃあ、アポルトが勝ったって無事にすまないぜ」

「ああ」

ゲオルグは短く肯定し、眉根をぎゅつと寄せたまま勝負の行方を見定めている。

「それにしても、いい腕だ」

「まあな。柔くねえわ。剣筋が俺らに通じるものがあるな　なんとなくだけど」

「指南役は実践向きの戦法を授けたんだろう。無駄のない、いい動きだ」

剣戟戦になった。両者立ち位置を目まぐるしく移動しながら、押し合い、へしあい、弾き、弾かれ、突き、突かれ、身体ごとぶちあたっては甲冑が鳴った。

キルヴァは防戦から攻勢へ転じた。手首の返しが効いた、細やかに鋭い突きの連続にアボルトは気圧された。

「そなたに問う！」

騒音の最中でも、キルヴァの声はよく通った。

「そなたの大事である両將軍を私の大事としては、いけないか」

「命乞いですか」

「そうではない」

激しく、五十合、六十合、七十合と連続で打ちあえばさすがに腕が痺れ、重い。喉が渴き、息苦しい。汗が眼に入り、視界も悪い。

だが、ここで攻撃の手を緩めては、相手に反撃の余地を与えてしまふということ、互いに承知していた。

そんなときに言葉をかけられ、アボルトは無礼を承知で怒鳴った。

「そんなことが信じられるものか！」

白刃が火花を散らして打ち合う。

弾いた拍子にキルヴァの剣の切っ先がアボルトの跨る馬の耳を掠め、痛みに馬が暴れた。アボルトが思わず振り落とされそうになる。歯を食いしばり、手綱をぐつと手前に引き寄せ、重心を固定、どうにか態勢を持ち直す。

「……はっ……はっ……っは……」

なぜ攻撃しない……？

アボルトは不可解な表情を浮かべた。ほんの僅かだが、決定的に無防備だった。

しかしその一瞬、キルヴァの剣が動きを止め、退いたのを見た。アボルトは呼吸を浅く整えながら、半円を描くようにゆっくりと間合いを詰めていった。

汗が滴る。皮膚が焼けそうに熱い。腕が、重い。身体が、軋む。なれど不思議と　頭は冴えていく。集中力が外部を遮断し、互いに互いしか映らない。眼の端に爛々と紅色に輝く太陽とたなびく紫の雲片。風が螺旋を描く気配。黴臭い土の匂い。鼓動。破裂しそうに膨れ上がる、心臓。

「うおおおおおつ」

雄叫びを上げながら猛進したアボルトと真つ向からぶつかったキルヴァは、衝撃に耐えきれなかった。愛馬の足が乱れた拍子にずりりと鞍上で滑る。落馬しかけたキルヴァの頭上から容赦なくアボルトの両刃の剣が迫る。

「くっ……」

キルヴァが紙一重の差で躲す。

しかし相手の剣のナックルガードにバイザーの金具が引っ掛かり、兜が引っ張られ、そのまま地面に打ち捨てられた。金髪がさらけ出され、首があらわになる。アボルトの眼は一点をとらえた。

首を　！

スザン戦争・十八（後書き）

スザン戦、間もなく終了。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

スザン戦争・十九（前書き）

連載再開です。

お付き合いいただけるすべての皆さまに感謝を込めて

スザン戦争・十九

「王子！」

いまにも加勢したい勢いでかるうじて静観していたセグランが、堪らず叫んだ。

下方から掬い上げるように滑らかに振り斬ったアポルトの渾身の一撃は、まっすぐにキルヴァの首を狙い、そして、硬質の音を鳴らして弾かれた。キルヴァの逆手にした剣によって。

くるくると回転しながらアポルトの長剣はだいぶ遠くの地面に突き立った。

アポルトは啞然としながら呟いた。

「……左……？」

いつのまにか、キルヴァは左手に剣を所有していた。

「両利きか！」

感嘆の音がゲオルグの口から洩れる。

それがどれほどの鍛錬の末習得したものなのか、推し量るべくもない。

キルヴァは手ぶらになったアポルトへ向かい、無言で馬を進めた。アレンジーが慌てる。ゲオルグの肩を掴んで揺らす。

ゲオルグは厳しい表情で微動もせず、眼を凝らす。

勝負は、勝負だ。

「参りました」

潔くアボルトは降参した。
馬を降り、兜を脱いで脇に抱え、膝をつく。

「どうぞご処断を　　將軍、お守りできず、申し訳ありません」

首を垂れたアボルトを見下ろして、キルヴァは口をひらいた。

「いま一度訊こう。そなたの大事である両將軍を私の大事としては、
いけないか」

困惑したどよめきがスザン軍にひろがっていく。ギャザリング騒
ぎで疲弊した顔にあらたな驚愕が奔った。

「面を上げよ」

アボルトは顎を持ち上げ、夕映えに照るキルヴァを見つめた。逆
光を浴び、陰影の射した顔は汗にまみれていたが、とても美しくっ
た。年齢に見合わぬ落ち着いたまなざしに、心を射貫かれた。

偽りなき瞳。真摯さと公正さが、深く静かにきらめいている。

涙が溢れた。理屈ではないなにかに衝き動かされて、自分でもわ
からないまま、アボルトは地面に額を押しつけて平伏した。

「両將軍をお頼み申し上げます」

キルヴァは剣を鞘に収めた。ひらりと飛び降り、すたすたとゲオ
ルグ・ニーゼンとアレンジー・ルドルのもとへ行って、邪気のない
顔で笑う。

「頼みがあるのだが」

ゲオルグとアレンジーは撤退の機を逸したことを今更ながらに悔いていた。

「あの者が欲しい。アボルト・ブロナンデイスを私の配下に引き入れたいのだ」

「はあ？」

「武勇もさることながら、心映えのなんと優れていることか。なにかと保身に走るものが多いこの世の中で、あのように我が身を省みず、国家のため、ひいては傾倒する上官のため、捨て身で戦うとは得難い人材だ。私のカドウサを射た罪のため一度死んでもらわねばならないが、そのちは私の傍におきたい。よいだろうか」

とんとん拍子にことを進めるキルヴァに、アレンジーが話を止める。

「ちょっと待て、ちょっと待て。死んだあとの雇用契約もばかばかしいが、その前に、だな。いやいやいや、人選違いだらう。王子殿が欲しいのは俺たちじゃあなかったのか」

「無論、あなたがたも欲しい」

アレンジーは絶句した。空いた口が塞がらない。

「スザンという国名は今日を限りになくなるが、国民には一切非道を働かないと約束する。人命、爵位、名前、財産を守り、地名もそのままにしよう。一部変更せねばならないものもあるだらうが、悪いようにはしない。私の名で誓おう。但し、そのためには然るべき地位にある方の名前をもって全面降伏いただかねばならない。スザン王の後継にあたられるは、どなただらうか」

ゲオルグとアレンジーは目配せした。先に口をひらいたのはゲオルグだった。

スザン戦争・十九（後書き）

ああ、やっと天人に戻ってこられた……。

甘い物語ばかりを書いていると、硬質な物語が書けなくなりそう
でコワイです。

天人は他にもまして手強いだけに、やりがいのあること、あるこ
と。

はは。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2283j/>

天人伝承

2011年8月27日22時23分発行